
木崎家の人々

猫に小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木崎家の人々

【Nコード】

N9617H

【作者名】

猫に小判

【あらすじ】

とっても綺麗で優秀（約1名除く）だけど、変わり者揃いの木崎家の人々と、その周囲の人が送る日常（ほんのり恋愛風味）を切り取ったお話です。 超不定期更新

天使が笑うとき（前編）（前書き）

天使が笑うとき（前編）

「わたし、おおきくなったら、かずゆきくんを『おむこさん』にする！」

色素の薄いふわふわの茶色の髪、真っ白な肌、ほんのりと桜色に染まった頬。

くると上向きにカールした長い睫に縁取られた、くりくりとした茶色い瞳を宝石みたいにきらきらと輝かせて、ぷっくりとした唇が上機嫌で紡いだ言葉に、彼女の母親は一瞬硬直した後、思いつきり顔を引き攣らせて俺を見た。

当時、久しぶりに人の優しさと温かさに触れた5歳児だった俺は、どうしておばさんはそんな変な顔をするんだろう、と不思議に思っただものだ。

「いいよね？ かずゆきくん」

「うん、いいよ」

天使みたいに清らかで愛くるしい笑顔を向ける彼女に、俺は快く了承の言葉を返した。

実際、彼女は本当に天使のように愛らしかった。彼女みたいに可愛い子は、俺の通っていた幼稚園には1人もいなかったのだ。

俺は会った瞬間に彼女のことが好きになったし、5歳とはいえ、『おむこさん』とはすなわち『およめさん』の対であるということ、俺も理解していた。だから、彼女の言葉を笑顔で了承したわけである。

こうして俺はその日、彼女と初めて会った30分後に将来の約束をしたのだった。

その後、成長するにつれて、俺はあの時、何故彼女の母親が引き攣った顔で俺を見たのか、ということに嫌というほど理解することとなった。

俺がひと目で好きになった可愛い女の子は、天使は天使でも……なんていうか、愛を象徴するとか慈愛の化身だとか、そういうのじやなくて、某宗教において終末のラッパを吹き鳴らして世界を強制的に終わらせる、そういう系統の天使に限りなく近かったのだ。

「さあ、他に何か言いたいことはあるか？　ないんだね？　ならもう黙りな！」

彼女はにつこりと天使のように微笑んで、『それ』をパンプスの爪先で蹴り上げた。

凄まじい音を立てて、『それ』は浮き上がって後方のごみ置き場に背中から突っ込んだ。

蹴り上げられた瞬間に「うつ」とか「げっ」とか呻いた『それ』は、大量のゴミの中に突っ込んだまま沈黙。気絶したのかもしれないが、それはある意味『それ』にとっては救いだらう。

何しろ今いる場所が場所だけに、ゴミ置き場にあるごみは無分別。したがって『それ』の体には、生ゴミや元が何だったのか分からない液体、しれに妙に汚れた衣服の残骸などが降りかかっている。俺なら絶対に触りたくないな、あのゴミの山。

夕方、駅の裏にある繁華街。その奥まった場所にある、人通りの少ない裏通り。その場所で、俺の周りには、現在、地獄のような光景が作り出されていた。

つい今しがた、彼女が蹴り上げて沈黙させた『それ』の他に、『

あれ』とか『これ』とか、もうこれマジで人間なの？ 生きてんの？ 状態の、『元・学校帰りの男子高校生に絡んできた、柄の悪いお兄さん達』が全部で8人、彼女によって散々嬲られて、各々、明らかに不自然な体勢で地面に転がっているのだ。……もう、「8人」じゃなくて「8体」って言ったほうが正確かもしれない……。

一方的な暴力つてのは、いまどきの映画やゲームの中では、ありふれたものだろう。

しかし、現実には、殴る方も殴られる方も、生きている人間なのだ。

だから目の前で行われる殴り合いというものは、思わず目を逸らしてしまいたくなるほど、おぞましくて怖ろしいものだ。

拳の衝突する音、骨が折れる音、殴られた相手の呻き声、胃の中のものを吐き出す音。目を閉じて音声を耳で拾うだけで、俺は逃げ出したくなるね。聞いているだけで、こっちまで痛くなってくる。

しかも、それが『明らかに喧嘩慣れた体格のいい男8人 VS 可憐で愛らしい少女1人』の戦いにおいて、全て、少女によってなされているとしたら。

想像してみてくれ。身長165センチ、ふわふわの背中までの茶色の髪をなびかせた、可憐で愛くるしい天使のような超絶美少女。

そんな少女が、につこりと笑いながら自分より何倍も体格のいい相手を次々と蹴り上げ、ぶん投げては地に沈めていく様子を。

怖くないか？ 怖いだろう？ 俺は怖い！

だからとりあえず、俺は音声の聞こえない安全地帯まで逃げようとしたんだが、それは素早く彼女に襟首を掴まれて阻まれ、現在に至っている。

「ふん、軟弱な奴らだな。女のくせに生意気だ思い知らせてやる、などと言っておきながら結局口先だけじゃないか。和之、君もこん

な塵芥のような奴らに簡単に絡まれるんじゃないよ。待ち合わせの時間になっても来ないと思って探したら、バカそうな男どもに繁華街に連れ込まれた挙句にカツアゲされてるなんて、ベタな三流ドラマみたいで面白すぎて爆笑してしまっただじゃないか」

「何も好きで絡まれてたんじゃないっての……。お前もさ、もうちよつと手加減しろよ。絶対骨何本か折れてるだろ、こいつら」

「わざわざ人が助けてあげたっていうのに、そんな偉そうな口をきくの？ 最初にわたしに手を出したのはこいつらなんだから、わたしに何をされたとしても自業自得ってものだよ」

鼻で笑う彼女に溜息をつきつつ、俺は転がっている8人の『物体』を見る。いや、まだ息はあるんだよなあ……。鼻血とかのせいで、見た感じは血まみれで、かなりやばそうだけど……。

なんていうか、足とか腕とかが、全員、ありえん方向に曲がっていたり捻じれていたりしている。中には白目を剥いて、泡を吹いて気絶している奴もいるから、恐ろしい。

痛いよなあ、そりゃ。

抵抗むなしく彼女に蹂躪される様子があんまり怖いんで、俺は途中から目を逸らしていたが、なんか凄惨な音してたしな……。

「それで？ 和之、わたしに対して何か言うべきことはないの？」

「あー……、待ち合わせ、遅れてごめん。助けてくれてありがとう、明奈」

ちよつとやりすぎだけだな、という俺の付け足しは無視して、満足そうに彼女——俺の幼馴染にして現在交際12年目の天使のように可愛い恋人、木崎明奈は微笑んだ。

木崎明奈と俺、三条和之が初めて出会ったのは、俺と明奈が5歳のときだ。

なんでも、俺の父さんと明奈の両親が高校時代からの友人だったらしく、高校を卒業した後も、たまに連絡を取り合っていたそうだった。当時、うちの非常に危険な家庭環境を知った明奈の両親の勧めにより、俺は5歳の時から小学校2年生の頃まで、短い間だったが、明奈の家で育てられたのだ。

あの頃、俺と父さんとの関係は物凄く危ういものだったから、明奈の両親は俺たち父子にとって、本当に救世主みたいな存在なのだ。

何しろ、ある日突然俺の母親——とはもう言いたくないし、認めたくもない女だ——が記入済みの離婚届だけを残して、その時幼稚園に行っていた1人息子である俺を置いて、他の男と駆け落ち同然に家を出て行ってしまったのだ。さらに信じられないことに、母親と逃げた男は父さんの6つ年上の兄で——俺の母親は、義理の兄にあたる人と浮気していたのだ。

寡黙だが穏やかで誠実な父さんは、明るくて活発な俺の母親を、それはもう愛していた。子ども心に、俺にもそれがよくわかるくらい、父さんは母親にベタ惚れだったのだ。後に明奈の両親に聞いたところ、父さんたちは、父さんの4年間の片思いと3年間の交際の末に、ようやく結婚できたらしい。

それなのに、俺の母親は父さんと結婚した直後あたりから、俺の伯父にあたる人と浮気していたのだ。

生みの親とはいえ、呆れるし、むかつく話である。まあ、そんなことがあって、当時の俺と父さんの関係は、かなり危険な状態にあった。

母方の祖父母は、自分たちの娘が悪いのではなく、弟の嫁を誘惑した伯父と自分の妻の管理も出来ない甲斐性なしの父さんが悪いのだと主張して、知らんぷり。父方の祖父母は、いち会社員の父さんよりも、大学時代に起業して以来、そこそこの規模の会社を営ん

ている伯父の方がお気に入り、弟の嫁に手を出した大馬鹿野郎を責めず、父さんがしっかりしていないせいだと責めた。

そして、俺の存在が何よりも大きな問題だった。

父さんは俺を伯父と母親の間に出来た子どもだと思い、俺に対する接し方がわからなくなった。伯父と母親は、俺は父さんの子どもだから絶対に引き取らない、と言い張った。

こんな状況で、いたいけな5歳の俺が幸せに笑っていられたか？ 答えは、否だ。俺は周囲の変化についていけなかったし、正確に状況を把握していたわけでもなかった。ただ、父さんや優しくった祖父母の俺を見る目が、悪い方向に変わってしまったことは、敏感に感じ取っていた。

そして、大好きだった母親と、よく家に遊びに来ていた伯父が俺のことを本当は嫌っていたのだ、ということにも気がついた。

そのせいで俺は情緒不安定になり、全く笑えなくなったばかりか、急に癇癪を起こして暴れ出すようになってしまった。

父さんも、それまでは母親に俺の世話を一任していたし、家事も不慣れなもんだから、家は自然と荒れていった。おまけに家庭に問題があっても働かなくちゃいけないから、仕事のストレスも溜まっていた。父さんは次第に追い詰められていった。さらに俺が急に癇癪を起こしては父さんを困らせ、疲れさせていき——まさしく八方塞がりな状況だったのだ。

この時、人づてに話を聞いた明奈の両親が父さんを訪ねてきて、救いの手を差し出してくれなかったら、一体どうなっていたのか。

父さんは、俺を自分の子ではないんじゃないかと疑いながら、決

して俺に冷たい言葉を吐かなかったし、手をあげることもなかった。優しくて穏やかな人だから、母親と兄の裏切りについて、子どもの俺を責めることが出来なかったのだろう。

ただ、あのままの状況が続いていたら、絶対に俺と父さんの関係は完全に壊れていた、ということは確信をもって言える。父さんは優しくて穏やかな人だが、決して傷つかず、人を恨み憎むことがない、聖人君子ではないのだ。

もしかしたら、俺にとっては最悪の状況——それこそ父さんによる虐待死、なんて未来が待ち受けていたかもしれない。それくらい、当時の俺と父さんの関係はギリギリの均衡の上に成り立っていたのだ。

そういう意味で、明奈の両親には父子揃って本当に感謝しているのだ。

父さんが精神的に落ち着き、母親らとの諸々の問題が片付くまで、俺を引き取って、実の子と変わらない愛情を注いで育ててくれた。家事の不慣れな父さんのために、食事を差し入れたりもしてくれていたらしい。

離婚の際の財産分与や慰謝料の問題、父方と母方の祖父母と親戚連中との問題、そして俺が誰の子か、という問題についても、明奈の両親が腕のいい弁護士を手配してくれたり、父さんの相談に乗ってくれたりしたそうだ。

結局のところ、その後のDNA鑑定によって、俺は正真正銘父さんと愚かな母親との間の子どもであることが判明した。

俺と父さんは、浮気をした挙句に出て行った母親と伯父から取れるだけの慰謝料をふんだくり、財産分与も俺たちにとってがつつり有利な条件を飲ませ、以後絶対に俺の親権を母親らが主張しないこと、俺に私的に会わないことを誓わせた。おかげで母親の方の実家とも父親の方の実家とも完全に縁を切ったが、まあ、俺と父さんに

とつては一番満足できる結果に落ち着いたわけだ。

そして、明奈の家族と俺たち父子との付き合いは、現在でも続いている。

俺と明奈が初めて会ったその日から将来の約束をして、以来恋人になったことも理由のひとつだが、父さんが離婚問題などのごたごたが片付いた際にずっと勤めていた会社を辞めて、住んでいた家も引き払って木崎家の近くに引っ越してきて、明奈の父親と同じ職場に再就職したことも理由のひとつだ。

ありがたいことに、俺の父さんも明奈の両親も、俺と明奈の交際を快く認めてくれている。ただし、明奈の母親——梓さんは時々、かなり申し訳なさそうな、同情と哀れみのこもった顔で俺を見ているが。

明奈は、かなり可愛い。

容姿の好みは人それぞれだが、明奈のことを「可愛くて可憐で天使みたいだ！」と俺が言っても、反論する人間は絶対にいないだろうと、俺は確信を持って言える。

身長は165センチと女子にしては少しだけ高めかもしれないが、父親に似て色素の薄い髪と瞳に、日本人離れした、目鼻立ちのはっきりとした愛らしい顔立ちといい、スラリとしていながら出るところ出て締まるところ締まっているスタイルといい、もう本当に、見た目は最高だと思う。

……ただ、その最高級の外見に似合って、頭脳もずば抜けて高い上に、身体能力も「え？　実は背中にチャックついてて中に宇宙人でも入ってんじゃないの？」と言いたくなるような素晴らしさ。性格は、その天使のような外見を裏切って、さばさばとした男前かつ好戦的で、おまけに血も涙もないサディスト気質。精神的にも容赦ないが、つい先ほど俺に絡んできた不良を徹底的に蹴ったよう

に、肉体的にも容赦がない。明らかに性別を間違って生まれてきたんじゃないのか、と思いたくなる精神的・肉体的強さを持っているのだ。

そして俺にとって困ったことに、凡人である俺には思いもつかない行動を起こしては、俺を巻き込んで暴れるのが大好きなのだ。

まあ、今回のように、道を歩いているだけで、何故かよく不良などに絡まれる俺を爆笑しつつ助けることも多い。……毎回、かなりやり過ぎてはいるんだけど。

硝子細工のように繊細な心臓と一般常識をもつ俺としては、特に暴力沙汰には、あんまり巻き込んで欲しくないのだが、昔から明奈は聞きやしない。……はあ。

「……一応、救急車呼んどくか？」

ピクリとも動かない『物体』たちを前に、俺は明奈に常識的な提案を試してみた。

「別に放っておいても誰も困らないと思うけど、まあいいよ。適当に呼んでおこうか」

あっさり言って、明奈は暴れる前に俺に預けていた鞆の中から真っ黒い携帯電話を取り出して、救急車を8台要請した。

この携帯電話は明奈が仕事で使っているもので、特定の相手以外の場所に電話をかけると、そこからは公衆電話からかかってきた履歴になる、という何らかの犯罪にひっかかってそうな代物だ。だがまあ、下手に事情を聞かれても困るので、こういう場合には便利なアイテムだ。今回も、明らかに過剰防衛……の主張も厳しいくらいぼっこぼこにしてるもんなあ。

「よし、余計な時間をくってしまったね。行くよ、和之」

「はいよ」

通話を終えた明奈は、俺から鞆を取り戻すと、携帯電話をそこに
入れてから歩き出した。もう、自分が叩きのめした相手を振り返ろ
うともしない。

俺は1度、哀れな姿に成り果てた『物体』——否、柄の悪いお兄
さんたちを振り返った。

凡庸で冴えなくて、長いものには巻かれる抵抗するな面倒くさい
主義の俺なんぞに因縁をつけたから駄目だったんだよ。おまけに、
俺の財布の中身を奪って、さらに暇つぶしのためにリンチにしよう
とするから。そこをうつかり、破壊天使たる俺の可愛い恋人に見つ
かってしまったせいで、彼らは明奈によって、ぼっこぼこのぎっ
ちよのぐっちゃぐちゃにされてしまった。

お兄さんたちよ、怪我が治ったらこれに懲りて、どうかまっとう
に生きてくれ。

まあ、こういうのって普通、彼女が襲われてるところを彼氏が颯
爽と現れて助けるよなー、俺って自分の手を汚さずに彼女にやらし
てるよなー、などと思わなくもないが、明奈が楽しそうに男たちを
殴り飛ばしていたので、いいでしょう。うん。

大体、俺が言っただって明奈がやめるわけないしな。

それに、彼女の楽しみの邪魔をしないのも、彼氏の優しさっても
んだろ？ …… 多分。

天使が笑うとき（前編）（後書き）

男女の立場が……逆……？いえ、そこに愛があれば関係ありません。

ちなみに、「およめさんになる」ではなく、「おむこさんにする」と言うあたりに明奈の性格がよく表れています。

9月13日：本文、割と直しました。勢いだけで書いてたので、足りない部分を付け足してみたり。一人称は難しいですね。

天使が笑うとき（後編）

「ほら、和之。ちゃんと挨拶しなさい」

ぽかぽかと暖かい昼下がり、木崎家の広いリビングにて、ぎこちなく笑った父さんに背中を押されて、俺は今日からしばらく世話になる木崎家の人々と面会した。

「……さんじょう かずゆき、5さいです。きょうからお世話になります。よろしくおねがいします」

本当は、嫌だった。

すごくすごく、嫌だった。

俺の存在が父さんを苦しめていることは幼心にわかっていたし、このまま一緒にいてもきつと俺も父さんも苦しいままで、母親は絶対に俺たちの元へ戻ってきてはくれないことも、本能的に理解していた。

少し前に家に訪ねてきてくれて、部屋の掃除をして、おいしくて温かいご飯を作ってくれた、父さんの友人だという木崎家の優しい女の人と綺麗でかっこいい男の人——梓さんと要さんという名前は聞いたものの、その時は「おじさん」「おばさん」でいいと言われた——のことは俺もすぐに好きになったけれど、それでも父さんと離れて暮らすのは嫌だった。

仕事の無い日は必ず会いに来てくれるって約束してくれたけれど、離れれば離れるほど、父さんは俺のことを嫌いになるんじゃないか、

母親のように俺のことを「知らない」って言うんじゃないかと、その二つのことが俺は本当に怖かったんだ。でも、父さんに「行きたくない」と言って嫌われることも怖くて、俺は結局おとなしくこの日を迎えたのだった。

「和之君は挨拶がとっても上手ねえ。今日からよろしくね、和之君。うちには和之君と同じ年の女の子と、ちびすけの男の子がいるのよ。ほら、2人とも挨拶して」

にこにここと、優しい笑顔で梓さんが言って、要さんが抱っこしていた、当時2歳になったばかりの優吾を俺に近づけて、幼児ですらうっかり魅了されてしまう、腰が砕けそうになるほどの美声で「これが我が家のちびすけ、優吾だよ。この間2歳になったところ」と言った。

優吾は髪の色と瞳の色は梓さんに似て黒かったが、顔立ちとはつきりと要さん似だった。あんまり可愛いもんだから、「優吾」という名前を聞いていたにもかかわらず、俺は最初優吾のことを女の子かと思った。優吾は何も言わずに、まん丸な黒目で俺のことをじっと見つめてきた。

「ほら、明奈ちゃん。和之君に挨拶して」

俺が自分よりも小さくてふにやふにやした優吾と見つめあっていたら、梓さんがそんなことを言って、自分の後ろに隠れていた女の子に声をかけた。女の子は梓さんに促されて、彼女のスカートの後ろからひよこつと顔を覗かせて俺を見た。

そして、天使みたいにきらきらした笑顔でこう言って、俺の手をきゅっと握って元気よく走り出したんだ。

「こんにちは、かずゆきくん。わたしはね、きざき あきなつていうんだよ。ねえ、きょうからいつしよにくらすんだよね？ わたしがいまから、きみにいえのなかをあんないしてあげるよ。いこう！」

彼女が俺に見せた笑顔は眩いほど輝いていて、可愛かった。

きゅつと俺の手を握った手は、父さんのものよりずっと小さかったけど、温かった。

そのときになって、母親が出て行ってから、父さんが一度も俺と手を繋いでくれなかったことに気がついて、俺は一瞬大声で泣きそうになった。

でも、彼女があんまりにもきらきらとした笑顔で俺を振り返って、「わたしはかずゆきくんにあうの、ずっとたのしみになっていたんだよ！」と可愛い声で言ったから、涙も悲しい気持ちも一瞬で吹き飛んで、気がついたら俺も一緒になって笑っていた。

あのときから、俺はずっと、世界で一番、明奈のことが可愛くて愛おしくてたまらないんだ。

「今日は、要さんも帰ってきてるの？」
「うん。忌々しいことに、いつもなら仕事の事後処理まできっちりこなすんだけどね。明後日は母さんの誕生日だろう？ わたしは当然間に合うように帰ってくるつもりだったけど、あの男、今回の仕事が終わった直後に上の連中を脅して二週間の休暇をもぎ取ってね。だから、わたしも今回はしばらく日本にいるよ」

人通りの少ない夕暮れの田んぼのあぜ道を、俺は明奈と手を繋いで歩いていた。

今日は木崎家の夕食に父子揃って招待されているのだ。俺の父さんは要さんらと違って日本の支社勤務で、今日は定時であがり次第、木崎家に向かうと聞いている。

木崎家宅があるのは、市街地から離れた自然に囲まれた閑静な場所、ぼつぼつと民家のある場所を抜けた区画にある。木崎家宅は、家の広さはかなりでかいし、内部も豪華だが、ド派手な豪邸ではない。外観はかなり大きな近代的な普通の家……？　みたいな感じ。まあ、家なんてのは、雨風凌げて中に人が住めればいいんだしな。うん。

俺と明奈は、道中、実際に会えなかった間のことをたくさん話した。

家から近い県内の公立高校に通っている俺とは異なり、明奈は小学校・中学校はきちんと地元で通ったものの、高校には入らず、現在は明奈の父親——要さんの仕事について行って、世界中を回っている。

要さんは、とある警備会社に勤めていて、要人警護のような仕事をしているらしい。ちなみに俺の父さんは、その会社の俺たちが住んでいる市内にある支社で、普通に事務系の仕事をしている。

勿論、明奈と俺はきちんと連絡を取り合っているし、こうして明奈が暇を見つけて日本に帰ってきては一緒に過ごしているのだが、下手をすると半年近く全く会えないときもある。そういうときは、連絡もほとんど取れない。

いくら明奈の超人的な能力を知っているとはいえ、俺としては、他の男に明奈を取られやしないかとか、何か怪我でもしてるんじゃない

ないのかとか、やはり色々と非常に不安なのだが、そういう時には必ず、梓さんがあっけらかんと笑って「大丈夫よー」と励ましてくれる。

梓さんは、こう言う失礼だが、明奈やその弟の優吾と純の生みの親でありながら、人目を惹く容貌の3人とは外見が全く似ていない、ごく普通の女性である。

かといって、不細工だとかそういうんじゃない。俺からすれば、穏やかでほんわかした雰囲気の可愛い人だ。

ただ、子ども三人が見事に夫である要さん似の外見をしているため、外見的に似ていない梓さんは、実の母親でありながら心ない中傷を受けることも多い。しかし彼女はそれほど気にしていないようで、俺自身、小学生や中学生の頃は、周りの奴らから明奈との関係について「釣り合ってない」だのなんだの言われて落ち込んだときは、その度に梓さんに慰めてもらったものだ。

ただ、彼女の俺に対する同情と哀れみのこもった表情は、そういった理由からではなく、単に明奈に振り回されている俺を、要さんに振り回されている自分と重ねているにすぎない。

5歳の時の明奈の「かずきくんはあきなの『おむこさん』」発言を聞いて彼女が硬直したのも、かつて梓さんが要さんに告白されたときのことを思い出したのだったらしい。あの時、彼女には俺がその後、夫を女の子にしたらこんな感じかな？　と思われる言動を既に見せていた明奈に、ぐったりしながらも振り回されまくる日々がやけにリアルに想像できたらしい。先見の明のある女性だ、全くその通りになっている。

そんな梓さんの夫であり、明奈の血の繋がった父親である要さんは……まあ、なんというか。強烈な美貌と能力のある人だ。

明奈を男にして、そこに怜悧さと赤子も虜にできる妖艶さを足す。

そして明奈の情け容赦のないサドっ気を更に5倍くらいの濃度にして、明奈の現在の知能と能力を10倍くらいに伸ばしたような……うーん、ものすごく色々な意味で優れているんだけど、かなり変わった人物である。

おまけに明奈と要さんは、血の繋がった親子だというのに、昔から物凄く仲が悪い。

梓さん曰く「同類嫌悪」らしいが、普通、娘が父親に対して挨拶代わりにチエーンソー持って襲い掛かったり、父親が娘を隙あらば叩きのめして頭を靴底でぐりぐり踏みつけたりしようとするだろうか。ギリギリどころか、明らかに家庭内暴力（ただし一方的なものではなく双方向）に該当しやしないか？ 明奈のように可愛い娘なら、俺なら確実に猫っ可愛がりするのになあ。

あの2人は常に薄笑いを浮かべながらも殺気を漲らせて相対しているの、傍から見ていて恐ろしいこと、この上ない。親子というより、血に飢えた獣同士、といったほうがしっくりくる。

そもそも、明奈が現在要さんの仕事について行っているのも、自分の人脈を広めたり、自分の能力を向上させたりする、という目的のほかに、父親に近づいて、将来、彼を叩き潰して跪かせるという目標が根本にあるためなのだそう。それはもう、明奈がはいはいをしだした赤ん坊の頃からの、不変の目標であるらしい。

………なんとというか、「お父さんと一緒に下着を洗っちゃいや！」とか「親父臭がするから触んないでよ！」などと、養ってもらっている恩を忘れて父親に対して生意気なことを言っている世の年頃の娘さんが、とてもまともに見えてしまう。そんな摩訶不思議な関係なのだ、要さんと明奈は。

別に夫婦仲が悪いわけでもない（むしろ要さんは梓さんのことが物凄く好きなのが、傍から見ていてよくわかる）し、弟の優吾も

純も要さんとはそんなに仲は悪くないのに、どうしても父と娘の仲は改善しない。

なので、明奈と要さんの対立については、もう俺も梓さんも口を挟まない。なんだかんだで2人とも喧嘩するのが楽しそうだし、明奈も「あの男のことは世界で一番嫌いだけど、愛してはいるよ、父親だからね」とは言っているんで。でももう少し歩み寄り……というか手加減してくれないかな、2人とも。見てて痛いし、父と娘の壮絶な殴り合いの後は、2人のせつかくの美貌が大変もつたいないことになるのだが。

「それは嬉しいな。よし、土日は出かけような、明奈。平日は待ち合わせして放課後デートだ！」

「それだと毎日デートすることにならない？ ……ま、いいけどね」

今回は予想外に明奈の滞在時間が長くて、俺は嬉しくなつて明奈の右手と繋いだ左手をぶんぶんと振る。明奈は呆れたように、しかし楽しそうに笑った。夕日に照らされた彼女の笑顔は、相変わらず天使のようだ。……数十分前には、この笑顔で男どもを『物体A』に変えてたんだけど、そんな気配など微塵もない。さすがだ。

俺はふと、ずっと昔、明奈と初めて会った日のことを思い出した。あの日から今まで、俺は明奈と一緒に歩くときは、いつもこうやって手を繋いでいる。それも、俗に言う「恋人繋ぎ」というやつではなく、小さい子どもが母親と繋ぐのと同じ、普通の手繋ぎ。

一度だけ、「恋人繋ぎ」を試したことがあったが、すぐにやめた。指と指を絡め合わせることが嫌だったんじゃない。ただ、なんだかしっくりこなかった。明奈もそうだったようで、少し苦笑して、「別に、わざわざ指を絡める必要はないね」と言っていた。

まったくもって、その通りだ。

指を絡めていようと、手を握り合わせたただだろうが、俺も明奈も、お互いに気持ちが繋がっていることはよく知っている。

ただ、幼子のような「手繋ぎ」の方が、俺と明奈には似合っているのだ。

握り合って、互いに手を離さないことを信じて疑わない、単純で誠実な、幼い信頼の表現方法が似合っている、という、それだけのことなんだ。

俺は明奈を見下ろした。昔は同じくらいの背丈だったけれど、今は俺の方が明奈より15センチほど高い。父さんも長身だから、まだまだ伸びるかもしれない。

明奈は俺よりも背が低く、細くて柔らかい。

でも、実のところ、本気で俺が戦っても瞬殺だ。一般的な男女の肉体的構造における優劣は、明奈に限っては適用されない。恐るべし、要さん遺伝子。梓さん曰く、「明奈ちゃんが子どもの中で一番要に似てるのよね……」。むしろ性別だけ違う歳の離れた双子っていうか……」だもんな、常識とか完全に無視してるもんな、この父娘は。

しかし、俺は明奈が、俺と母である梓さんに対してだけは、絶対に本気でぶつかってこないことを知っている。恐らく、梓さんも、要さんも、弟2人も気づいている。

明奈は俺を傷つけるものから俺を守る。でも、俺と取っ組み合いの喧嘩だけはしない。今まで、一度もしたことがない。

聡明な明奈には分かっているのだ、俺にも一応『男のプライド』なるくだらんものがあって、それを傷つけてはいけないことを。

でも、自分が俺に対して手を抜くような不誠実な真似を取ること
は、明奈のプライドが許さない。だから、俺は明奈と口喧嘩はして
も取っ組み合いはしたことがない。なんだかんだいって、最終的に
は明奈が折れるからだ。それは俺に対する明奈の優しさであり、誠
実さであり、深い愛情の表れなのだ。

俺はかつて、大好きだった母親に「あんななんて、いない」と
言われた。

大好きだった人たちに、冷たい目で見られた。
そんな経験があるからか、元々なのはわからないが、とにかく
昔から打算的で卑怯者だ。

人を殴るのも殴られるのも嫌で、自分自身ではなく自分が一番大
切な存在にそれをさせる。喧嘩をしても、最終的に彼女が折れてく
れることがわかっていいるから、明奈相手だと絶対に自分の主張を譲
らない。

明奈は天使のように愛らしくて、聡明で、とても強い。でも、肉
親を除けば、明奈は俺にだけは絶対に勝てない。意識して、常に敗
者であり続けている。そして俺は、そのことに酷く満足しているの
だ。自分より圧倒的に優れている存在が自らの意思で自分の下にい
る、という優越感。

俺は多分、最低な男なんだろう。自覚はしている。
でも。

俺は立ち止まって、空いている右手で柔らかな明奈の髪を撫でた。
明奈も立ち止まって、俺を見上げる。

過ごした年月の分だけ、変わってしまった目線の差、最初から変わらない、むしろ広がり続ける人間としての優劣。そして、

「俺は最初に会ったときから、ほんとに明奈のことが好きなんだよ」

最初から変わらない、これからも絶対に変わらない気持ち。

「明奈の笑った顔が好きだ。きらきらしてて、天使みたいで。世界で一番好きだ」

（本当は、怖いんだよ。お前はとても素晴らしい人間だから。会えない時間の後、会えたときが一番怖いんだ。俺のことを嫌いになつてないかって。もつといい奴を見つけたんじゃないかって）

（わかってるんだ、そんなことは絶対に有り得ないって。でも怖いんだ。お前はいつも俺に負けるから。俺のことを、自分が負けることで『木崎明奈』から守ろうとするから）

（本当は、ずっと俺が負け続けているのに）

「……なんだ、そんなこと。知ってるよ。わたしだって一番最初に母さんに和之の話を聞いたときから、ずっと君のことが好きだよ。とっても賢くて父親思いの優しい子なのに、今は上手に笑えなくなっているって聞いたから、わたしが一番に友達になつて、笑顔にしようと思ったんだ。初めて会ったときは、今までで一番緊張していたよ。母さんのスカートの後ろに隠れて、一生懸命に一番いい笑顔の練習をしてたんだ」

初めて聞く話に、俺は驚愕した。そういえば、今の今まで、明奈が俺のどこが好きなのか、聞いたことがなかった。

「わたしが笑ったら、最初は悲しそうな顔をしていたのに、和之も笑ってくれたから。嬉しくって、君のことが大好きになったよ。だから、君をわたしの『おむこさんにする』って言ったんだ。そうしたら、和之が笑って『いいよ』って言うてくれたから、わたしは最高に幸せな気分になったよ。和之は、わたしが他の人より優れていても、そのまま笑っていてくれて、いつもわたしを嬉しい気持ちにしてくれる」

「……明奈」

「わたしは負けず嫌いだからね、いつかあの男は絶対に跪かせてやるけれど、和之にはいつも負けてしまう。勝てないんだ。和之の顔を見ると、わたしのプライドとか、そんなもの、どうしても良くなってしまう」

「…………」

「わたしだつて、和之の笑った顔が好きだよ。温かくて、わたしも幸せになれる。わたしも世界で一番、和之のことが好きだ」

そう言つて笑う明奈は、本当に天使のように清らかで可愛らしい。終末のラッパを吹く天使寄りだけど、とんでもないサド気質で凡人な俺をめちゃくちゃな騒動に巻き込むこともあるけど。

俺の大好きな明奈は、世界で一番可愛くって愛おしい。

「……明奈」

「……ん」

夕日に鮮やかに染まる景色の中で、真っ赤になった明奈の唇に、できるだけ優しくキスをする。

そつと閉じられた彼女の瞼が僅かに震えて、その下のくると力ールした茶色い長い睫がかすかに濡れていた。

俺は凡庸で、打算的で、卑怯な男だけど。きっとこれからもそれは変わらないけど。

でも、明奈を好きだという気持ちも絶対に変わらない。だからせめて、俺は明奈がずっと負け続けてしまう『三条和之』でいよう。

唇を離すと、明奈が瞼をあげて俺を見上げて、真っ赤な顔のまま、につこりと笑った。照れたように、嬉しそうに、楽しそうに。

それが本当に天使みたいな最高に可愛い笑顔で、つられて俺も笑顔になってしまった。

そして、手を繋いだまま、2人で木崎家へ向けて歩きだす。

とりあえず、今日は夕食を楽しんで、明日からは明奈が日本にいられる時間いっぱい、2人で過ごそう。

次の別れはあつという間だけど、再会もどうせすぐだ。

離れていても、俺と明奈が繋がってることは、俺たちがよくわかってるんだから。

天使が笑うとき（後編）（後書き）

個人的に、「恋人繋ぎ」のカップルより普通に手を繋いでいるカップルに萌えます。

「惚れた方が負け」というか、「惚れているから負け」な2人でした。最初から好き、最後まで好き。

簡易人物紹介

キザキ・アキナ
木崎明奈：木崎家長女。17歳。男前。和之は婿にするよ（入り婿という意味ではなく、新郎という意味で）。

サンジョウ・カスユキ
三条和之：三条家長男。17歳、高2。何気に口と性格が悪いかも。明奈は嫁になってもらうよ。

奥様の溜息、天使が覚醒した日の話

それは確か、暖かな春の昼下がりのことだったと記憶している。

それまでは単にころころと転がっていただけの長女・明奈が、立派に「はいはい」ができるようになった日の翌日のことだ。

リビングにある、庭に面した大きな窓の前で、天使のように可愛らしい明奈が一生懸命はいはいして自分の方にやって来るのを、わたしは胸をどきどきさせながら待っていた。

娘の外貌は平凡なわたしに似ず、やたらと顔の良い夫に似たので、それはそれは愛らしい赤ん坊だった。ぷくぷくしたほっぺたをほんのりと紅潮させて無邪気に笑いながらわたしの方へと這ってくる明奈は、そりやもう最高に可愛かった。

娘・万歳！

妊娠中と出産前後の苦しみなど、この可愛い存在がわたしの前で生きていてくれる事実に比べれば、大した問題ではなかった。まさか自分の娘がこんなに可愛いなどと思ってもみなかったわたしにとって、明奈の存在は、新鮮な驚きと感動を毎日与えてくれた。

そんな可愛いわたしの小さな天使が、あともう少しでわたしの元へ辿り着く、という瞬間に、あの男が邪魔をしゃがったのだ。

「へえ。ちびっこ、だいぶん四つ足で這うのが上手になってきたねえ」

腰にくる、甘やかでいて刃物のような鋭さのある心地よい低音とともに、天使の体が上へ持ち上げられた。いつの間にかリビングに来ていた、わたしの夫兼天使の父親である男が、天使を有無を言わ

せず抱き上げたのだ。

「ちよつと、要！ 何するのよ、もうちよつとで明奈がわたしのところに到着したのに！」

やたらと存在感のある、人を惹きつけてやまない容姿の癖に、その気になれば完全に気配を消すことができる男の横暴に、わたしは当然ながら怒声をあげた。といっても、明奈をびっくりさせてはいけないから、そんなに大きな声ではなかったが。

「うん。人生、簡単に目的地に辿り着けると思ったら大間違いだということ、ちびっこに教えてあげようかと思ってね」

天上天下唯我独尊を地で行く鬼畜外道根性捻じ曲がり男はそう言つて、蕩けるような笑みを見せた。わたしは瞬時に奴に対する殺意が湧いた。

なんだその滅茶苦茶な理屈は。ちよつと良いこと言いました、みたいな空気やめんか。

あといい加減「ちびっこ」じゃなくて名前で呼べ！ 一応あんたとわたしで考えた名前だろうが！ それと「四つ足で這う」とか言うな！ 客観的な表現方法としては間違つてはいないが、それは普通、獣の類に対して用いる表現だ。間違つても血を分けた娘に対して使う表現ではない、断じて！！

わたしの文句を、奴は悠然とした笑みで受け流しやがった。殴りたい、と本気で思ったわたしを誰が責められるだろうか。

大体この男、平日なのに当時はやたらと家にいた。元々奴が担当するのは大口の仕事が多いから、担当する仕事がない時は本当に長期間に渡って暇になるのだが（それでも毎月きちんと目玉が飛び出

額の給料が入るのだから、妻としては有難いが、なんか世の中間違っていると思う）、それにしても家にいすぎた――後から思えば、恐らく奴の人智を超越した勘が奴を家に留まらせていたのだらう。

「あー！」

明奈を抱き上げた夫とわたしの一方的な睨み合いは、娘が突然あげた声によって遮られた。

何かを激しく嫌がるその声に、わたしと夫は思わず明奈の顔を覗き込んだ。

「や、やー！！」

明奈は、夫の肩口まで伸びた襟足の長い髪を小さな両手で掴んで、思いつき引き張っていた。

それに留まらず、大声をあげて、小さい身体を目一杯じたばたさせて暴れていた。

これには夫もさすがに驚いたのか、明奈を落とさないように抱え直したが（一応、赤ん坊を落としたらマズイという程度の分別は奴にもあつたらしい）、明奈は暴れやまない。慌ててわたしが奴から明奈を奪い取って、ようやく明奈はおとなしくなったのである。

「あきちゃん、どうしたの？ お父さんの抱っこが嫌だった？」

明奈は父親であるあの男よりも母親であるわたしによく懐いていた。

だから、抱えあげた小さな身体をゆらゆら揺らしながらそう尋ねると、明奈は両手でわたしの胸元に縋りついてきて（どうでもいいが、明奈は奴の髪の毛を引っかくことはできなかった。残念）、先ほどまでの機嫌の悪さが嘘のような可愛らしい笑顔でにっこりとわたしに微笑んだ。

その天使の微笑みに思わずわたしも頬を緩めると、明奈はふいに

夫の方に首を向けて、びしつと右手の拳を突き出した。そして、

「やー！」

と、声をあげて夫に笑いかけた。

……笑いかけたんだ、天使みたいな笑顔で。うん。
可愛い笑顔だったよ、本当に。

ただ、その笑顔が、わたしが心底嫌いな夫の笑顔と酷似していたため、わたしは思わず硬直して、明奈を一瞬腕の中から落としそうになったのだ。

天使のような、とびきり可愛い笑顔なのに、何故か既視感のあるその表情。

親愛を表すでもなく、相手に媚を売るでもない……お気に入りのお獲物を見つけた肉食獣の微笑みが、わたしの天使の顔に浮かんでいた。

物凄く嫌な予感がして、恐る恐る夫の方を見ると——小さな娘の大暴れによって乱れた髪と服を整えた男が同じ表情をして、わたしの腕の中の天使に笑い返していた。

何度見ても慣れることのない、背筋がぞつとするような恐怖によく似た妖艶さを称えた、男の顔に浮かぶ美しい肉食獣の笑みに、わたしは本気で泣きたくなった。

「ああ……」

恍惚とした、甘い声で呟いて、夫がわたしを見つめた。

形の良い唇がゆつくりと動いて、「いいなあ」と言葉を紡いだ。

「本当に、面白いなあ。まさか、こんな子どもが生まれるとは思っ

てもみなかったよ。やっぱり君は最高だね、梓。この子はきつと、一生をかけて僕を潰し来るよ。そして僕はこの子を何度も返り討ちにして、屈辱と絶望を味あわせてあげる。ああ、いいなあ、最高だ。こんなに僕によく似た子どもが生まれてくれるなんて。ああ、違うな。梓が僕によく似た子どもを生んでくれたんだよね？」

嬉しいなあ——そう言った夫は、いつの間にかわたしの目の前に立っていた。

思わず身を引いたわたしを、夫は腕の中の娘ごとふわりと優しく抱き締めて、聞く者に圧倒的な恐怖と官能を植えつけ屈服させる甘い声でそつとわたしに囁きかけた。

「ねえ、梓。これから、とっても楽しくなりそうだと思わないかい？」

ああ、世界で一番君を愛しているよ、梓。それに、可愛い明奈。僕はなんて幸せ者なんだろう。世界一愛しくて、大好きで、大切な存在が奥さんで、近い将来必ず世界一嫌いになれて、尚且つ唯一僕と張り合えそうな愛しい存在が自分の娘だなんて。本当に幸せだ、きつと死ぬまで退屈することはないだろうね——そう言って満足そうに笑う男と、同じように満足そうに無邪気な笑い声をあげる自分の腕の中の小さな天使に、わたしはこれからの自分の苦勞を予感して、思わず気が遠くなりかけたのだった。

「まあ、なんていうか……あの2人が仲悪いのは、同類嫌悪みたいなものだから」

明確な理由は無いのよ。相手が存在してるのが単に嫌なだけみたい。

わたしは思い出したくもない過去を記憶のブラックボックスの中から引つ張り出して、向かいのソファで座ってお茶を飲んでる娘の幼馴染兼彼氏君（将来の約束までしてるから、もう婚約者でもいいかなあ）にそう言った。

なんでこんな話になったのかと言うと、彼に「今さらですけど、なんであの2人って仲悪いんですか？」と聞かれたからだ。

仲の悪い父娘が相對している庭では、日常生活を送るにあたって工事現場などでしか聞けないような轟音が響いている。

ああー、また庭に穴とかが空いてたらどうしよう……。

「同類嫌悪、ですか……」

「んー、わたしも頑張ったんだけどね、明奈が子どもの中じゃ一番外も中も要にそっくりになっちゃって」

「ああ……。なんとなくわかります……」

齡5つにして同い年の我が娘に惚れられて、がつつり将来の約束まで交わしてしまった少年は、遠い目をして呟いた。……色々苦労かけてすまない、少年よ。

「でも、明奈の方が要なんかより、よっぽどまとまだし分別も弁えてるから。何か困ったことがあったら何でも言ってね？」

「はい。ありがとうございます」

年齢に似合わぬ丁寧な物言いとは裏腹に、照れたような笑顔は年相応で可愛い。

彼は学生時代に色々とお世話になった先輩の息子さんだし、明奈

に振り回されても、ずっと笑って付き合ってくれている貴重な存在だ。このまま上手く2人の仲が進んで欲しいと、わたしは思っている。

何しろ、彼も家庭事情がなかなか複雑なのだ。

そのことが原因で、わたしや要、父親である先輩にも、彼はどこかしら遠慮する節がある。

しかし、明奈に関してはどうも、そうではないらしい。母親であるわたしが言うのもなんだが、色々と父親似の明奈はしかし、父親よりもまともで男前（ってなんか違う気もするけど）な性格に育った。精神的にも肉体的にも、同年代の子どもたちに比べて遥かに強い。そんな明奈が彼の支えとなつてやれるのなら、彼にとつても明奈にとつてもいいことだろう。

暫くして、庭の轟音が止んだのに気がついて、彼が娘のために救急箱（かなり本格的な治療ができる万能工具箱）を片手に庭へと向かった。その後ろ姿を眺めながら、わたしは小さく溜息をつく。

結局、わたしのあの時の予感通り、娘と父親の仲は月日が経つにつれ悪化し、今では事あるごとに壮絶な舌戦と下手をすれば殴り合いが起こっている次第である。

はい？ 家庭内暴力？ 何ですか、それ？

うちの夫と娘は骨が折れても1週間でくつつき、痣ができて翌朝にはほとんど目立たなくなっている、そんな化け物のような体質をしていますので、問題ありません。娘の方はともかく、夫も阿呆ですが加減は弁えています、まだ圧倒的に実力差のある今のところは。無力な母と争いごとの嫌いな息子2人は巻き込まれませんので、大人げない構いたがりの父親と反抗期の娘のじゃれあいだと思ってください。

……………そうとも思わなければやってられん。

幸いにして、後に生まれた息子2人は要遺伝子のせいで多少変わったところはあるものの、長女ほどぶっ飛んではいなかった。夫も息子2人とは普通に仲が良い。よかった、よかった。

まあ、なんというか。あの似た者父娘は、本当によく似ているのだ。

外見や能力についてだけではなく、生みの親であるわたしにもどうにもできない根本的なところが。

だから、年々似通ってくる相手がどうにも気に食わないでいるのだ。

夫にとっては出来の悪い自分が、娘にとっては変な方向に突っ走った自分が、それぞれ相手を通して見えてしまうのだろう。

しかし、互いに互いを嫌ってはいるものの、一応親子としての愛情は持っているらしいので、そこだけは安心できる。これで心から憎み合われた日には、わたしは絶対に離婚してやる。

「何を考えてるの？」

物思いに沈んでいたわたしの耳に、甘やかな低音が心地よく響いた。

相変わらず気配を完全に消して移動しやがる迷惑な夫が、わたしが座っているソファの背もたれから手を伸ばして、わたしにもたれ掛かってきた。重い。うぜえ。

「どっかの馬鹿な構いたがりの父親と、勝てないって分かっているのに構われに行く馬鹿で可愛い娘について考えてたの」

わたしの答えに、夫は喉を鳴らして笑った。吐息が耳を掠めてくすぐったい。小さく身をよじると、身体にまわった腕の拘束がより強くなった。

「ねえ、梓。子どもがいるって、楽しいねえ。僕は自分がこんなに充実した結婚生活を送れるとは思ってもしなかったよ。苦労して君を捕獲して結婚まで漕ぎ着けて子どもを仕込んで、本当によかった」「……わたしも子どもがこんなに可愛いとは思ってもしなかったし、今は十分幸せだけど。あんなに必死に逃げまくったのにあんなに捕まって結婚までもっていかれたのだけは、何故か納得できないのよね……」

子どもを仕込まれた云々ってのは、もうほんと、抵抗しても無意味だったっていうか、致し方ないんだけど。

そこまでに至る過程が……ううん。やめとこう、思い出したら本気で人生リセットしたくなってしまふ。

わたしをしつかりと抱き締めて擦り寄ってくる夫の顔を両手で押しとどめながら、わたしは娘とその恋人の行く末を思う。

願わくば、彼がわたしがかつて歩んだ苦悩と苦労と絶望の茨の道（最終到着地点は悪夢の結婚式）を歩むことがないことを誠心誠意お祈りしておく。わたしも夫も息子2人も、君になら喜んで熨斗つけて娘を任せるよ！

……とりあえず、今は娘たちが戻ってくる前に、この鬱陶しい男をどうにかしなければ。

はあ……。

奥様の溜息、天使が覚醒した日の話（後書き）

後半、若干表現が下品だったかも。すみません。あと、家庭内暴力はいけません。あしからず。

奥様……といっても梓さんはごく普通の専業主婦です。でも旦那の会社の人には「木崎さんの奥様」と呼ばれています。木崎さんと結婚した（させられた？）がために、旦那の勤め先の人や旦那の知人・友人から憐れまれたり尊敬されたり崇拜されたりしている苦労性の女性です。「不憫」と「巻き込まれ」は彼女と和之の代名詞。

簡易人物紹介

木崎梓：キザキ・アズサ木崎家の奥様にして子どもたちの母。37歳。苦労性。専業主婦。木崎家唯一の普通の顔、普通の人。ただし、要と結婚して子どもまで作ってる時点で一番普通じゃない、と要の関係者に思われていることを、幸いにも彼女は知らない。

木崎要：キザキ・カナメ木崎家の旦那様にして子どもたちの父。42歳（実年齢は本人も不明）。声と容姿は極上、能力も最強、ただし性格がなんかもう駄目。仕事は海外がメインなので、基本的にあんまり家にいない。

木崎君の秘密の事情（前編）

「……………ええっと。何してるの？ 木崎君」

「……………修行？」

なぜに疑問系。

というか、木崎君にとっては、直径30センチサイズのホールケーキを切らずにそのまま直接フォークでほじくりつつ食べるのは修行になるんだ……。

まあ、確かに、広いテーブルの上に所狭しと並べられている木崎君が現在食べているものとよく似た、真っ白いクリームと新鮮なフルーツがたっぷり載った全部で10個弱のホールケーキと、完食済と思われる、木崎君の横に重ねられた大きな皿の数を見るに、確かに彼は現在、果物と生クリームとスポンジケーキに対する胃袋の修行をしているのかもしれない……。

「……………ああ、野中さん」

「はい？」

黙々とケーキを食べ続けていた木崎君が、ふと後ろに立っているあたしを振り返って、ひょいっと生クリームのかかった真っ赤な苺を突き刺したフォークを差し出した。

「今、暇なら、一緒にケーキ食べない？」

やっぱり修行じゃなくって単にケーキ食べてただけなんじゃないっすか、とか。

食べ物突き刺さったフォークで人を指差すなよ、とか。

今の木崎君のポーズ、「はい、あーんして」な感じでたまりません、とか。

色々な言葉（主にツツコミと妄想）があたしの頭の中を一瞬にして駆け巡り、あたしは気づいたら木崎君の横に座って大きく頷いていたのだった。

「喜んでご相伴に預かります」

その日の夕飯と翌日の朝ごはんが胸焼けのせいで全く喉を通らなかったのは、言うまでもない。

あたしのクラスの木崎君は、とっても変わっている。

見た目はすごくカッコいい。髪の毛目の色も真っ黒だけど、顔立ちはハーフっぽい感じ。で、飛びぬけて背が高いわけじゃないけど、なんていうか……スタイルがいい。すらつとしてて、姿勢がよくて、立っている姿がすごく綺麗。クラスの男子が、ぐだつた姿勢で制服を着崩してるのに対して、木崎君はいつもきちんと制服を着ていて、それがすごく似合っている。

……それなのに、木崎君はいつもぼーっとしているのだ。

歩く姿勢も、立っている姿勢もすごく綺麗なのに、どこかに座った途端に、ぼーっと上の空状態になる。座って聞く授業はどれもそんな感じで、机に頬杖をついたりして、ぼけーと窓の外を眺めた

りしている。

うちの中学の生徒はほとんどが近くの小学校からの持ち上がりで、先生の間でも生徒の情報が共有されているらしく、入学当初から問題児のチェックが入っている。授業に全く真剣に取り組まない木崎君は、勿論問題児だ。

でも、木崎君は物凄く頭がいい。運動神経も抜群だ。

宿題はちゃんとしてくるし、テストはいつも満点かそれに近い数字。体力テストも1年生の時から校内順位1位で、運動会やクラスマッチの時には大活躍だ。話しかけにくいタイプ（見た目が綺麗な子がばーっしてるから、なんか怖いんだよね）だから、特定の仲のいい友達はいないみたいだけど、皆に密やかに慕われている。

性格だつて物静かで、授業中にばーっとする以外に先生を困らせることはしない。だから、先生達にしても、木崎君のことは嫌いじゃないんだと思う。

今ではもう、木崎君が授業中にばーっとしてるのは、もうしょうがないって諦めて、どの先生も注意しなくなった。厳しいので有名な教師暦35年という生徒指導の橋岡ジジイも、「いるんだよね、たまに。ああいう天才型の生徒は……」って笑ってたし。

木崎君の3歳年上のお姉さんも変わった人だったらしく（小学校は一緒だったけど、どんな人なのかはよく知らないんだよね、あたし）、「まあ姉よりは、ましですよね……」というのが先生達の共通の認識らしい。どんなお姉さんなんだ、一体。色々噂は聞くけど、なんか嘘っぽいしなあ……。

そんな木崎君とあたし、野中夕子は、小学校1年生のときから、ずっと同じクラスだ。これはなかなか凄いことだと思う。小学校の時は2年ごとにクラス替えがあつたし、中学は毎年クラス替えがあ

る。でも、あたしと木崎君はいつも同じクラスだった。これは密かな自慢でもある。

かと言って、あたしと木崎君が仲良しかというと、全然そんなことはない。

小学生の頃から、基本的に昼休みも教室の中でぼんやりと過ごしている木崎君に対して、男兄弟の中で育ったあたしは、雨の日以外はいつも外で男子に混じって遊んでいた。

木崎君は、家が市の郊外に近い辺鄙な場所にあるため、学校が終わったら居残ったりせずに、さっさと帰宅していた。中学にあがった今でも、木崎君は部活に入らず（うちの中学は部活が強制されない楽な学校だからね）、授業が終わったらさっさと帰宅している。それに対して、あたしは家が学校に近いから、放課後も暗くなるまで遊んで帰ったし、中学にあがった今では女子バレーボール部に入って毎日遅くまで部活をしている。

だから、あたしと木崎君は一緒に遊んだこともなければ、教室の中でも親しく話をしたこともない。

いや、正しくは、「なかった」のだ。

先週の日曜日、お母さんに頼まれてお使いに行った先で、ホールケーキの山に囲まれた木崎君、という謎の空間に遭遇するまでは。

木崎君の秘密の事情（中編）

その日は朝から雨が降っていた。

せつかくの日曜日だっていうのに、嫌な感じだった。

雨の日が大嫌いなあたしは、朝から機嫌が悪かった。

空は濃い灰色の分厚い雲に覆われていて、雨は一日中止みそうになかったし、じめじめした空気とざーざー煩い雨音のせいで、すごくイライラしていた。絶対外になんか出たくなかったから、仕方なく宿題と予習をして、その後は弟とゲームの対戦をして遊んでいた。

それなのに、夕方、お母さんにお使いを頼まれてしまって、あたしはむくれたまま家から少し離れたところにある神社へと向かった。雨が降ってなかったら自転車で15分くらい漕いだら着く距離なのに、雨が降ってるせいで歩きだったから、いつもの倍は時間がかかってしまった。

「おじちゃん！ 狩野のおじちゃん、夕子ですー！ 晩ご飯のお裾分けに来ましたー！！ おじちゃん、いないのー？！」

あたしはいつものように、神社のすぐ横にある、広くてぱつと見は立派だが、実はぼろい外観の平屋建ての一軒家の戸をばんばん叩きながら大声を出した。インターホン、などという文明の利器がついていないのだ、この家は。

お狐さまを祀っている近所の神社は、無人の小さな寂れた神社である。

そこは神主さんがいない代わりに、神社の近くのお家が掃除など

をしている。

現在、1番神社の掃除などを積極的に行っているのが、神社のすぐ横の家に住んでいる、お母さんの幼馴染である狩野敏行さん。あたしは単におじちゃんって呼んでるけどね。

おじちゃんは、お母さんの幼馴染っていつでもお母さんより10も年上で、昔からうちの近所一帯の子どもたちのまとめ役をしていたらしい。その名残なのか、お母さんの世代の大人たちは、おじちゃんのことをとっても慕っている。

そして、未だに独身のおじちゃん的生活を心配して、こうして偶に夕飯のおかずのお裾分けをしているのだ。

「……あれえ？ いないのかな……」

いつもならドタドタという大きな足音とともに、すぐに出てくるおじちゃんが全然出てこなかったため、あたしはタッパーの入ったビニール袋片手に困ってしまった。おじちゃんの家玄関は引き戸なので、ドアノブにビニール袋を引っ掛けて帰る、なんて真似ができないのだ。

あたしが声を出して呼びかけてから5分ちょっと。一向に反応が返ってこないことに、どうしようかなーと困っていると、ようやく聞き慣れた煩い足音とともに、おじちゃんが玄関の戸を開けた。

「やー、夕子ちゃん。待たせちゃって、悪い、悪い。ちょっと客が来ててさあ」

小柄でちょっとお腹の出たおじちゃんは、いつも通りの人の良さそうな笑顔であたしを出迎えてくれた。おじちゃんのぼちゃっとした丸顔は、笑うと愛嬌があってなんだか可愛らしい。見てるこっち

も、ほっこりしてくるいい笑顔だ。

あたしは「もう」と怒ったふりをしながら、お母さんに渡された麻婆豆腐と酢の物が入ったタッパをおじちゃんに手渡した。おじちゃんはこのこしながら「いっつも悪いねえ」と言っ受けて取った。

そのとき、あたしはおじちゃんの体から何やら甘い匂いが漂ってきたのに気がついた。いつものおじちゃんには全く縁のなさそうな、甘い……生クリームの匂い？

「そうだった！」

唐突におじちゃんが大きな声をあげて、あたしを見た。あたしがびっくりしていると、おじちゃんは満面の笑みで「夕子ちゃん、甘いものの平気だったよね？」と聞いてきた。

「はあ……。まあ、好きだけど……」

「よっしゃ、そりゃ好都合！」

夕子ちゃん、雨の中わざわざ来てくれたんだから、ちょっと上がっていつてよ」

「え？ でも、おじちゃん、さっきお客さんが来てるって言ってなかった？」

「いやあ、それがね、客は客なんだけど」

おじちゃんはあたしを「まあまあ、気にせず上がって」と促しながら、困ったように頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜた。

「実はなあ、今座敷にいる客なんだけど、いきなり昼過ぎにうちに大量にケーキを持って来たんだよ。で、今まで俺とそいつでケーキを処理してんだけど、量が半端なくってなあ。夕子ちゃん、ちょっと食べてってくれない？」

あたしを奥の広い座敷の方に案内しながら、おじちゃんはその言ってあたしを拝むようなポーズをとった。

そりゃ、ケーキは好きだけど、そんなにいっぱいあつて困ってるんなら他所のお家にいくつかお裾分けしたらいいのに。

そう言ったら、おじちゃんは何とも言えない表情をして（なんか、思いつきり眉を寄せて口を歪めて、視線をあちこちに彷徨わせた。不気味だった……）、「ちよつとそれはできないんだよなあ」と困ったように言った。

いまいち状況がよく分からないが、どうやら手作りのものらしく、それで他所に分けるのを躊躇っているらしい。

まあ、ケーキをおじちゃんに持ってきたそのお客さんには悪いけど、見た目がやばかったり、一口食べて不味かったらさつさと帰ったらしいや。

そんな風に気軽に考えていたあたしが、おじちゃんが「おーい、助っ人だぞー」の言葉とともに開かれた襖の先で見た光景は。

おじちゃんの家で一番広い座敷の中央に置かれた、長方形の巨大な机の上に所狭しと並べられた、全部で10個弱ほどの真っ白い生クリームとフルーツで彩られた美味しそうなホールケーキ（直径30センチ大）。

そこから漂ってくる甘い甘い匂いと、それに囲まれて、あたしとおじちゃんにちょうど背を向けた形で黙々とケーキをホールのまま食べている少年。彼の左横には、食べ終わったケーキの大皿が6枚ほど重ねられていた。

その少年は、胡坐をかいて座っていた。

胡坐つて、自然と猫背になるじゃない？ その状態のまま物を食べるなら、特にね。

それなのに、彼の姿勢はすごく綺麗だった。全然だらしく見えない、凜としたその後姿。——その姿に、何故か強い既視感を覚えたあたし。

彼はおじちゃんの言葉に、それまで一定の間隔で皿の上と自分の顔の辺りとを往復させていたフォークを握った右手をぴたりと止めた。そして、ゆっくりとこちらを振り返り——

「うええええっ?! き、木崎君っ?!」

「……あれ、野中さん」

思いもよらなかった同級生の顔に、思わずひっくり返った声をあげてしまったあたしと、綺麗な瞳を軽く見開いてあたしの名前を呼んだ彼——木崎君。そして、

「お? なんだ、優吾、夕子ちゃんと知り合いだったのか?」

呑気な声をあげるおじちゃん。

それに冷静に「同級生だよ」と返す木崎君。

予想外の展開に、あたしは暫し呆然としてしまった。

「おじちゃんと木崎君って、知り合いだったんだね」

驚きから立ち直ったあたしは、木崎君の右隣に座ってケーキをつつきながら、そんなことを言った。

木崎君に「一緒にケーキ食べない?」と誘われて15分。そろそろ興奮が収まって、色々と聞きたいことがでてきたのだ。

「知り合いつていうか……友達?」

「えっ、どういう接点？」

木崎君が相変わらずどこかぼんやりした調子で答えるのに、あたしはびっくりした。

割と田舎なこの地域で、木崎君の家は昔からあるわけではないことは、あたしも知っている。

たしか、木崎君のご両親が結婚した後にこっちに移ってきたらしい、ということを知ったことがある。

あたしの言葉に木崎君は少し首を傾げて、

「……ええと。小さい頃に、僕がよく迷子になった時に見つけて家まで届けてくれた」

「はあ？」

またもや予想外の言葉が木崎君の口から出て、あたしはかなり変な声をあげてしまった。

迷子……迷子？！

そりゃ、木崎君ってよくぼけーっとしてるけど、それでも授業中に先生に当てられたらちゃんと正解を答える、そんな凄い人なのだ。だから、てつきりぼーっとしても木崎君は根っこところはしっかりしてると思っ込んでいた。間違っても迷子にはなったりしなさそうなのに。

「なんか、自分じゃ覚えてないけど、僕は小さい頃、気がついたらよく行方不明になってる子どもだったらしくて。で、その度に母さんとかあきちゃん……姉さんが探してくれたんだけど、なんでか毎回、敏行さんが僕が神社の中にいるのを見つけてくれて、そのせいで仲良くなった」

淡々とした口調のまま、ぼんやりした目で木崎君はそう言った。

生クリームの食べすぎで既にギブアップ状態のおじちゃん、少し離れたところでコーヒーを啜っていた。

あたしが目線でおじちゃんに「今の話、ほんと?!」と問いかけると、おじちゃんは疲れたような顔をしてヒラヒラと手を振り、「ほんとだよー」と言った。

「一番最初は確か、幼稚園にあがってすぐくらいときかなあ。

優吾君、家から遠いのに、3歳児の足でなか神社の中にいてね。夕方に掃除しようと思って神社に来たら、小さい子が1人つきりで石段に腰掛けてるから、ビックリしたよ、ほんと。名前と家の場所を聞いて、慌てて調べて電話したの。優吾君、いきなりいなくなつててみたいで、お母さん半泣きでねえ。すぐにお父さんと一緒に迎えに来たんだけど、その後も何回もそういうことがあつてね」

いやー、もう5回目からは俺も慣れちゃってさー。

そう言つて呑気そうに笑うおじちゃんに、あたしは物凄い衝撃を受けた。まさか、あたしの身近にいたおじちゃんと木崎君が仲良しだったなんて！

そうと知っていたら、もっと頻繁におじちゃんの家に行ったのに！ おじちゃんも教えてくれたらよかつたのに！ そしたら、もっと早い段階で木崎君と仲良くなれてたのに！！

誤解がないように言っておくと、あたしは別に木崎君に恋愛感情を抱いているわけではない。ただ、綺麗でどこまでもマイペースな木崎君がかっこいいから、ちよつと仲良しになりたいだけだ。

学校の大多数の生徒が木崎君に向ける感情も、憧れ、っていうのが一番多い。

綺麗で運動も勉強もできて、でもぼけーとした木崎君は、学校のルールに縛られず、先生たちを黙らせるだけの成果を出しているのだ。恋愛対象にはならなくても、尊敬とか、憧れを抱きたくなる気持ちも分かつてほしい。

ただ、木崎君は普段（ケーキを黙々と食べている今もだけど）、何を考えてるのかよく分からない人だから、話しかけづらい。だから、仲良くしたくてもきつかけがあんまりないのだ。

しかし！ 今、あたしは何と木崎君に誘われて、一緒にケーキを食べている！！ 8年くらいクラスが一緒だったけど、初めてちゃんと会話してる！！

万歳！！ お母さん、雨の中無理矢理お使いに行かせてくれてありがとう！！

そんな風に内心で狂喜乱舞していたあたしに、木崎君が声をかけた。

「……そういえば、野中さんはよく敏行さんの所に来るの？」

「えっ、う、うん。うちのお母さんがおじちゃんと幼馴染で、晩ご飯の差し入れをよく持って行って言われるから、差し入れに」

「ふうん」
フォークを口に咥えたまま、木崎君は小さく首を傾げてあたしを見た。

綺麗な黒い髪が動きに合わせて、さらさらと流れる。長い睫に縁取られた真つ黒の瞳が、何もかも見透かすようにあたしを見つめる。

「いい子なんだね、野中さん」

そう言って、木崎君は小さく微笑んだ。

木崎君はいつも、どこかぼうつとした表情をしていて、あんまりそれが変わらない。だから、笑顔なんてのは物凄くレアだ。

あたしは思わず、その珍しくて綺麗な微笑みに、ぽかんと見蕩れてしまった。

「……食べないの？」

よほど間抜けな顔をしていたのか、木崎君が不思議そうに言って、慌ててあたしはケーキに取り掛かった。

ちなみに、あたしは一番小さそうなホールケーキをもしかやと食べている。

手作りらしいが、豪華な見た目に見合った、ふんわりとして全くどくなくクリームと中に挟まれた甘酸っぱいフルーツ、そしてしっとりとしたスポンジケーキは、有名店に並んでいてもおかしくないほどに美味しかった。

滅多に見られない木崎君の微笑みに、自然と赤らんでくる頬を誤魔化そうとして、あたしは大口を開けてケーキを食べながら、次の疑問を口にした。

「でもこのケーキ、すごいい美味しいけど、量もすごいいよね！木崎君のお母さんが作ったの？」

状況からして当然と言えば当然のあたしの疑問に、木崎君はぴたっとフォークを動かす手を止めた。

そして、なんとというか……これまた珍しく、沈痛な表情をあたしに向けた。

「……母さんじゃなくて、馬鹿な父親が……」

そこまで言ってフォークを皿の上に置くと、肘を胡坐を組んでいる膝に乗せて、両手を組んでそこに額をくっつけて盛大な溜息を吐いた。

な、なんか聞いちゃいけないことだった？ いやでも、この状況でこれを聞かないほうがおかしいよね！ だってなんで（木崎君とおじちゃんが完食済みの分も合わせると）20個近いホールケーキがあるの？ しかもそれをたった2人で片付けようとするとか、おかしいよね？

「お、お父さんが作ったの？ 木崎君のお父さん、お菓子作り上手なんだね！」

「……あの人、基本的に何でも人並み以上にできるから……。でも、

これは作りすぎ……。

注意したら、僕に処分しろって言うし……。嫌がったら有無を言わせず車にケーキごと詰め込まれて敏行さんの所に連行されて捨てられるし……」

ぶつぶつと暗い声で言う木崎君の表情は、垂れた髪の毛のせいで見えない。見えないけど……なんとなく想像はつく。きっと、これまた珍しく暗澹たる表情をしているに違いない。

「敏行さんも嫌がってくればいいのに、簡単にあの人に言いくるめられて。」

あんないい歳したおっさんに顔赤らめてどうすんの」

恨みがましい目で木崎君に睨まれて、ついでにその発言にあたしが思わず「え、おじちゃん、木崎君のお父さんに顔を赤らめるって……実はそういう性癖……？」という目で見てしまったため、おじちゃんは慌てて「違う！ 違うから！！」と言った。

「いや、あれは、木崎さんが奥さんの誕生日用に作ったケーキの試作品が大量に余って困ってるって言ってたから！ その、愛情に感激してだな！！」

断じて俺にはそういう趣味はない！！——と豪語するおじちゃんに白い目を向けていると、木崎君はまた溜息をついて、「あの人、自分の顔と声の使いどころはきっちり把握してるからなあ……」とぼやいた。

そういえば、小学校の授業参観の時とかに見た木崎君のお母さんって、若いし可愛い感じの人だけど、木崎君には全然似てなかった。木崎君には悪いけど、ほんとに普通のレベル。で、なんで木崎君みたいな綺麗な子が生まれるんだろ？ って授業参観の度に、クラスじゃ密かに話題になってたけど、木崎君は父親似だったんだ。なるほどね！。

あたしがひとつ謎が解けて感心している一方で、木崎君は疲れたような溜息をついて、再びフォークを動かし始めた。……どうでもいいけど、木崎君の胃袋すごいな。さっきから食べるペース、全然落ちてないんだけど。

そんなことを話しながらあたしがケーキを丸々ひとつ食べ終えて、ついでに一個ホールケーキをお土産に頂いた後（木崎君には何故か「変な味とか匂いとかしたら遠慮なく捨てて」と何度も念を押された）、あたしは木崎君とおじちゃんと別れて家に帰った。

この日を境に、あたしと木崎君は仲の良い友達付き合い合いを始めることになったのだ。

木崎君の秘密の事情（後編）

「木崎君って、学校で会うのと外で会うのとじゃ、なんか雰囲気違うよね？」

木崎君とケーキを食べた翌週の日曜日。

あたしはまたもお母さんに夕飯の差し入れを頼まれて、おじちゃんの家に来ていた。

そして、ちょうどおじちゃんの所に遊びに来ていた木崎君と会ったため、現在2人でおじちゃんの家縁側に座って、仲良くお茶を飲みつつ談笑中。

家主であるおじちゃんは神社の掃除があると言って、あたしと木崎君に留守番を頼んで出かけて行った。一応「手伝おうか？」って声を掛けたんだけど、笑って断られてしまった。

うーん、昔からおじちゃんは掃除の手伝いをさせてくれないんだよね。楽だからいいけど、なんだかなあ。

それはともかく、おじちゃんの家は木崎君と2人きりでじっくり話せる絶好の機会。

あたしはとりあえず、木崎君と仲良くなっておこうと、この一週間でなんとなく気がついたことを彼に尋ねてみたのだった。

「そう？」

「うん。なんか、学校だといつもぼーっとしてるけど、今とか、先週の日曜日とかは、そんな風じゃなかったよ」

不思議そうに首を傾げる木崎君、あたしは目一杯力強く頷いた。

そう、木崎君と初めてまともに話した日曜日の翌、月曜日。

教室で会った木崎君は、相変わらずのぼーっとした変な人だった。それでも一応、あたしに気づいたら「おはよう」と声をかけてくれたんだけど、元々同級生に挨拶はする人だから、それは別におかしくない。学校の中で特にあたしに話しかけてこないで、ぼーっとしているのもいつも通り。

ただ、あたしは1週間、木崎君をこっそり観察していて、気がついたのだ。

おじちゃんの家で会った木崎君は、ちょっと変わっていたけど、ちゃんとした感じだった。なんていうか……「自分」というものをきちんと表に出していた気がする。

それなのに、学校の木崎君は、「何でもできるけどぼーっとした変な人」で、存在感が有るのに無い、という感じなのだ。「自分」がちゃんと表に出てなくて、「学校に通っていますよー」というプログラムが木崎君に入力されていて、それが自動的に実行されているような気がした。

そんな、ある意味失礼なことをあたしが言くと、木崎君は少し考え込むようにして黙った。

そして、暫しの沈黙の後、おもむろに立ち上がってあたしに正面から向き直った。縁側に腰掛けているあたしは、自然、木崎君を見上げる形になってしまう。

「野中さんって、結構鋭いよね」

いつも通り、どこかぼんやりした調子で、しかし普段よりもずっと静かで落ち着いた目で木崎君は言った。

「……え？ 何が？」

「うん。僕に『学校に通っている』っていうプログラムが入力され

てて、それが自動的に実行されてる、とか」

「えっと……。それはあの、単なるものの例えっていうか」

困った。

木崎君に変なお世辞とかは失礼な気がして、なんとなく冗談めかして思ったことをそのまま口にしたただけなのに、こんなにまともな反応が返ってくるとは思わなかった。

どうしよう、もしかして怒っちゃったかな、と内心で冷や汗を流しまくっているあたしに構わず、木崎君はそのまま言葉を紡いだ。

「言い得て妙、かな。野中さんの例えは、本質を捉えてる」

木崎君は別に怒ってはいないのか、ふっと小さく笑った。

「ほ、本質って？」

「うん。僕、小さい頃から人が多いところって苦手で、本当は学校になんか通いたくないんだよね」

「ええっ?!」

予想外の発言に、あたしはびっくりして木崎君を見つめた。木崎君は不思議そうにして、「そんなに驚くことかなあ」とぼんやりと言った。

「別に人嫌いとか、そういうんじゃないから安心して。」

授業も学校行事も楽しいし、クラスの人も好きだから」

あたしを安心させるように言われた言葉に、しかしあたしは今度も衝撃を受けた。

……木崎君、授業、楽しいんだ？ ぼーっとあらぬ方向見てるだけなの？

今の言葉を先生方が聞いたら、感動するよりも脱力する先生の方が多いんじゃないだろうか。

入学当初、あれだけ必死に叱り、宥めずかしても結局授業中にぼけーとしていた木崎君が、実は授業を楽しんでいると感じていたとは。

……むしろ「お前は教師を馬鹿にしてるのか」って怒るところかな……。このことはあたしの胸に秘めておこう。はい、決定。

「ただ、人が多いと……どうにも、煩くって」

本当に嫌そうに顔を歪めて、木崎君は言った。

そんな風に嫌悪感いっぱいな表情も、あたしは初めて見た。

「煩い？」

「うん。……多分、他の人は気にならないのか、聞こえてないのか、よく分からないけど」

そう言って、木崎君はふっと視線をあたしから外して空に向けた。難しそうに綺麗な顔を歪めたまま、言葉が続ける。

「物心ついた頃から、かなあ。」

気がついたら、普通に話してる人の声以外にも、僕にはいろんな『音』が聞こえて、それが煩くって。耳を塞いでも聞こえるから、何かの病気かと思って色々と病院に連れて行ってももらったけど、どこにも引つかからないから、結局『これ』が何なのかは僕にもよくわからないんだけど。とにかく、ずっと音が聞こえる。人が多いところほど煩くて、少ないところほど静か」

木崎君は空を見上げたまま、両手で自分の耳を塞いだ。そして目を閉じ、小さく息を吐いた。

「声でもないし、ほんとに『音』としか言えないんだけど。」

とにかく、学校なんか最悪。人が多いから、煩すぎて普通にしたらしんどくなる。だから、学校にいる間はあんまり自分の意識をしつかり持っていないんだ。それこそ野中さんが言ってた通り、『学校に通っている』状態のプログラムを自分で自分に入力して実行してもらってる」

そう言って、木崎君は目を開けて静かにあたしを見た。

……随分、突拍子も無い話だ。

他の人間が言っていたら「何こいつ？ 電波？」とか思うところだけど、何せ相手は木崎君。これは冗談でもなんでもない、木崎君が他の人には話していない、本当のことなんだろう。

なんであたしがこんなに簡単に木崎君の話を信じるかっていうと、木崎君の学校での態度と今の態度の差に「『音』が煩い」っていう理由があるなら、納得できるからだ。

それくらい、学校での木崎君と今の木崎君には違いがある。

今の木崎君は、学校での木崎君より普通の男の子っぽい。やっぱりけーっとした雰囲気はあるけど、それでも言葉のひとつひとつにちゃんと感情が宿っている。それに比べて、学校での木崎君は、なんていうか、そういう感情がほとんど表れていない。

……もしかしたら、先生方の何人かは、ある意味「殻」に閉じこもって自分を守っている木崎君を心配して、色々注意していたのかもしれない。

そう考えたら、木崎君の授業態度についてかなり早い段階で注意がなくなったのにも頷ける。なんだかんだいって、うちの中学の先生はいい人が多いから、木崎君の態度が本人の強い意志で変えないでいる「殻」だ、ということにちゃんと気づいたんだろう。

「……木崎君って」

「うん？」

両耳を塞いでいた手を放して、木崎君は小さく首をかしげた。剛毛のあたしには、木崎君のさらさらとした細くて柔らかそうな黒い髪が非常にうらやましい。

「『音』が聞こえるだけ？」

あたしは授業中、ずっと窓の外を見つめていた木崎君の姿を思い

出して、そう尋ねた。

単にばーつとしてるだけかもしれない。でも、1週間、ストーカのごとく木崎君を見つめていたあたしには、木崎君が『何か』から頑なに目を背けているように感じた。

「人の多いところだと、何か……見たくないものが見えるんじゃないの？だから、授業中、ずっと外を見てるんじゃない？」

ある種の確信をもって言ったあたしに、木崎君は虚を突かれたような顔をして黙り込んだ。

もし違っていたら、かなり失礼な奴だ、あたし。

でも、何故なのかは分からないけど、ここまで木崎君が、恐らくずっと秘密にしていたことをあたしに話してくれたんだ。どうせなら、全部吐かせてしまえ。

あたしの心の声が聞こえたのか、どうか。

木崎君は本当に困ったような顔をして（これも初めて見た！レア顔。なんか可愛い）、それから長い溜息をついた。

「……野中さんって、ほんとに鋭い。

もしかして、僕のことを先週ずっと見てたの、何か僕のこと、疑ってた？」

「えっ、気づいてたの?!」

「そりゃ、授業中だけじゃなくて休み時間もずっと見られてたら気がつくよ……」

父さんの作ったケーキを食べて家族の誰かが病気にでもなったのかと思つて、ヒヤヒヤした」

苦笑する木崎君（これもレア……以下略）に、あたしは途端に恥ずかしくなる。

うわー、気色悪い奴だとか思われてないよね?! 普通に話しかけてくれてるもんね、木崎君!!

「……まあ、別に僕が他の人からじろじろ見られるのは今に始まったことじゃないから、別にいいんだけど」

と、さすがに人気者の自覚はあるのか、寛容な木崎君。ありがとう。

でも、やつぱあだし、見すぎだった……よね。ごめんなさい……。

しゅんとなったあたしに困ったように笑って、木崎君は「まあ、当たり前なんだけど」と言った。

「はえ？」

「うん。『見たくないものが見える』っていの。これも、物心ついてから当たり前に見えてた。

多分、大多数の人には見えてないものだと思う」

「……………えっと……………」

自分で指摘しておいてなんだが、それってつまり…………アレだよな？幽霊とか、妖怪とか、なんかそういう見えちゃいけないモノ？

「まあ、漫画とかに出てくるような、リアルなのはあんまり見えなわけだね。詳しく言ったら野中さんが怖がりそうだからやめておくけど、僕があんまり視界に入れたくない形状のモノが、人が多いところはよく集まるから。正直、黒板の内容がそのせいで見えないところもあるから、授業中前を向いてるのが馬鹿らしくって」

怖い話が太っ嫌いなあたしの顔色が悪くなったのに気がついたのか、木崎君はそう言って優しく微笑んだ（これもレア…………以下略）。
うわああん、多分そうかなーと思ってた事実が当たってて嬉しいはずなのに嬉しくない！

まさかあたしに何か変なのが取り憑いてたりしないよね？！

あたしのそんな情けない言葉に、木崎君は笑って「大丈夫だよ、何かくつついてたら僕、野中さんと会話しようだなんて思わないか

ら」とさらっと酷いことを優しく言ってくれた。

……あれ、木崎君て案外酷い人？ あれれ？

「……でも、困ったなあ」

微笑んだまま、木崎君は全然困ってない調子でそんなことを言った。

「何が？ あつ、あたし、このことは絶対誰にも言わないよ！」

「うん、それは別にどっちでもいいんだけど」

どっちでもいいんかい。

いや、わざわざ言いふらしたりしないけど。だって、絶対あたしの頭がおかしいとか、木崎君をけなす嫌な奴って思われるだけだろうし。

それに、あたしは怖い話が嫌いだけど、根っこの部分では幽霊とか超常現象とかあんまり信じてない（ていうか信じたくない）。でも、それが絶対には言い切れないと思ってる。

だから、木崎君が聞こえるというのなら、他の誰にも聞こえなくてもその『音』は存在しているのだろうし、他の誰に見えなくても『何か』が木崎君に見えるのなら、それは確かに存在しているのだ。

……でも、木崎君が別に自分の事情について、そこまでひた隠しにしたいわけじゃないんだったら、何が困るんだろう。

「木崎君？ 何が困るの？」

「んー……。まあ、野中さんは気にしないでいいよ。主に困るのは、敏行さんと僕だから」

「ええ？ なんでここでいきなりおじちゃんが出てくるの？」

あたしの問いかけに、木崎君は微笑んだまま答えてくれない。

うつん、そんなキラキラした笑顔で誤魔化せると思うなー！ 今

までの会話でなんとなくわかったけど、木崎君、案外強かな性格してるでしょ！

しかし、いつこうに理由を話してくれない木崎君に、あたしはとうとう追及を諦めた。

縁側に面した部屋の時計を見ると、そろそろおじちゃんが帰ってくる時間だ。あたしもご飯のために家に帰らなくちゃいけない。

だから最後に、あたしは木崎君に今日の会話でひとつ、疑問に思ったことを尋ねた。

勿論、どうして急に木崎君が自分の特殊な事情について、あたしに話してくれたのか、ということをだ。

「ああ、それはまあ、危ないケーキと一緒に食べて、おまけに1個押し付けちゃったし」

「危ない？ 普通に美味しかったけど？」

木崎君の解答に、あたしは首を傾げた。

甘いもの大好きなうちの家族はあの日の晩、皆で仲良くケーキを頂いたのだ。あたしがお礼を言うならまだしも、どうしてそれが理由になるんだろう。

「うん。一応、大丈夫そうなの渡したから平気だとは思ってたんだけど、あの父さんが作ったものだから……」

ふっと遠い目をする木崎君を不思議に思う。

……木崎君のお父さんって、もしかして、変わった人なのかな？

「……ケーキのことだけ？」

「あとは、なんとなく親近感が湧いたから、かな」

親近感。……あたしに、木崎君が？

………何で？ そりゃ、小学校からずっと同じクラスだけど、特別仲良くもないのに？

思ったことがそのまま顔に出ていたのか、木崎君は笑って「名前だよ」と言った。

「……名前？」

「うん。僕は下の名前、優吾って言うんだけど」

それはさすがに知ってます。おじちゃんも「優吾君」って呼んでるし。

「それがどうしたの？」

「気がつかない？ 野中さん、下の名前、『夕子』でしょ」

読みが一字違いだから、なんとなく親近感。

ぼんやりとそんなことを言って笑う木崎君に、あたしは呆気にとられてしまった。

……まさか、そんなくだらないことで？

いや、喜ぶべきなのかな、これ……なんか仲良くなれたし……でも、なんかだかな……。

内心かなり複雑なあたしは、それが顔に出ていたのか、木崎君が不思議そうな顔をした。

いや、別に、木崎君があたしに特別な気持ちを抱いてたから、とかそういうことを期待していたわけじゃないけど、いまいち釈然としない。

……そりゃ、ちょっとは期待してたけど。でもでも、ほんとにちよつとだけだし……！

そんなこんなで、木崎君を前に悶々としていたあたしは、おじちゃんが帰ってきてから木崎君と別れて家路についた。

別れ際、木崎君は「また明日、学校で」と笑っていた。

きつと、明日も学校で会う木崎君は、「ぼーっとしてるけど実は凄い人」という「殻」に自分を閉じ込めた木崎君なんだろう。

でも、それはそれでいいと思う。本来の、普通の男の子のように笑って話をしてくれる木崎君を皆が知れないのは残念だけど。

なんの特殊能力も持たないあたしには、木崎君の他の人には分からないものを見たり聞いたりする体質を治すことはできないし、下手に「殻」をやめさせたせいでしんどくなつて、木崎君が学校に来なくなるのは嫌だから。

それに、木崎君も学校は好きって言っていたから、きっと大丈夫。もし辛そうなら、その時は友達として出来る限り、助けてあげよう。

なんだかんだいって、木崎君の今まで知らなかった一面を知って有頂天だったあたしは、だから、あたしが去った後、木崎君がおじちゃんとこんな会話をしていたことを全く知らなかった。

「……優吾君？ 何、その笑顔。木崎さんにそっくりだよ？」

「嫌だな、敏行さん。……潰すよ？」

「ごめんなさいすみません見間違いました」

「まったく……。家族で父さんに似てるのはあきちゃんだけだよ。

僕は母さん似」

「（いや、外見は全員木崎さん寄りだよ……。性格もそこはかたなく、全員木崎さんの血を感じるよ……）」

分かった、分かった。そうだったな、優吾君は奥さん似だったな、うん」

「……今、何か失礼なことを心の中で言われた気がするけど、まあいいよ。

ところで、敏行さん。これからちょっと、気をつけてほしいんだけど」

「（ぼんやりしてる癖に怖い子だな、ほんとに）……気をつけるっ

て、何に？」

「狐」

「え」

「野中さん、ちょっと、可愛い」

「は？」

「困ったな、ほんと……。知ってるでしょ？　ここの神社の狐、僕のお気に入りにも悪戯するから。あの狐、母さんは父さんがついているの知ってるから大丈夫だし、和兄さんもあきちゃんが知っているから平気だし。純は1人でも心配いらないから、別にいいし」

「え、ちょ、何？　優吾君、狐が鬱陶しいから中学出るまで、異性で特定の仲の良い子は作らないって言っただけだった？」

「うん、言った。でも撤回する。無理。野中さん可愛い」

「はあ？　そりゃ、夕子ちゃんはいいい子だけどつ。」

優吾君、君ね、あの性悪狐を殺さずに抑えるの、すごい大変だつて知ってて言ってる？」

「うん。大丈夫、僕も手伝うから」

「いやいやいや、我慢しようよ、あと1年半くらい！」

「無理。野中さん、すごい可愛い」

「だんだん褒め言葉がグレードアップしてきてるな、おい！」

「大体、思春期にそんな風に交友関係を無理矢理限定して禁止するのって、おかしいよね？」

健全そうに見えて、実は逆に不健全だよ、それ」

「そう言っただけが反対したのを押し切ったの、優吾君だよな？！」

「まあまあ。明日から、学校の帰りにちゃんと寄るから。日曜日も『掃除』、手伝うよ」

「こらこら、何決定してるの」

「だから、僕に協力してよ。野中さん、ぼやっとしてるのに鋭いし、怖がりだし、思ってることわかりやすく、すごい可愛い。僕、あの子、欲しい」

「(ぼんやりしてる癖に実は性格が凄く歪んでる子がなんか怖いこと言ってる!)　夕子ちゃんは何モノじゃないっ!」

「……ふうん。協力してくれないの?　なら、僕、今からでもあの狐、殺しに行くけど?」

「……っ!!　ま、待てこらっ!!　わかった、わかったから!　殺すのだけは待ってくれ、あと1年半!!」

「うん。じゃ、これからよろしくね」

「(変わり身早いな!!　でも本気で殺しに行く気だったなこのクソ餓鬼……!)　……分かった。俺も夕子ちゃんは娘みたいなもんだから、狐は全力で抑える。が、フォローしきれん部分もあるから、それは優吾君に任せるよ」

「うん。……楽しみだな」

「(すまん、夕子ちゃん……!　おじちゃん頑張るから、このクソ餓鬼の魔の手から逃れてくれ……!!)　……はあ」

ちなみに、その日から毎週日曜日の夕方、差し入れがなくてもおじちゃんの家に行って、木崎君とお話するのがあたしの楽しい習慣になったのだった。

何故かおじちゃんは疲れた顔をしているけど、木崎君とも仲良くなれて、あたしとしては嬉しい限り。

やっぱり、友達っていいよね!　これからも、木崎君のいろんな面を知りたいなあ。

木崎君の秘密の事情（後編）（後書き）

木崎家長男と同級生ちゃんのお話でした。

きやーきやーとアイドルの追っかけのように騒ぐのではなく、そつと周囲から温かい目で見守りたい系の長男。実は姉のおかげで先生に目を付けられていた部分もありました。

簡易人物紹介

木崎優吾：キザキ・ユウゴ 木崎家長男。14歳、中2。小さい頃から色々見えたり聞こえたりする苦労人。野中さんが可愛いらしい。

野中夕子：ノナカ・ユウコ 野中家長女（兄2人・弟1人）。14歳、中2。明るくて活発な女の子。憧れの木崎君と仲良くなれて、ご満悦。

狩野敏行：カノウ・トシユキ 狩野家長男。54歳。実はそこそこ売れてる小説家。でも周りには無職だと思われている。3歳児の優吾に良いように使われて以来、腐れ縁が続いている不憫な人。この人も色々見えたり聞こえたりする。

奥様の溜息〰狐と長男の決意の話〰（前書き）

注意：動物に対して、若干の残酷描写があります。苦手な方はお避けください。

奥様の溜息―狐と長男の決意の話―

自慢じゃないが、わたしの夫の外見は滅多にお目にかかれない極上品である。

指通りのよい柔らかな髪は濃い栗色、美しいアーモンド型の目の中にある瞳は薄い茶色をしている。眉は剃らずとも完璧に整っており、すっと通った鼻梁は高く、形のよい、薄い唇はいつでも艶やかだ。

美しくも男性の色気を兼ね備えた顔立ちは全体的に彫りが深いものの、完全な西洋人の顔ではない。本人はわたしに対して、自分は西洋人と東洋人のハーフだと言っているが、さて、どのような人種から生まれたのやら。これは夫自身にもわからないから、仕方がない。

恐らく、現代の科学技術を以てすれば、夫を構成する人種の特定は容易いだろう。しかし、夫は自身のルーツに全く興味がなく、わたしもそんなもんを知ったところで今更夫に対する評価が変わるわけがないので、どうでもいい。せいぜい、夫の中身が魔物や宇宙人ではない、ということの科学的根拠を突きつけられて、ちよつと安心するくらいだ。

夫は顔に似合って、スタイルも抜群にいい。

背はすらりと高く、胴は短く足が長い。一見して細身だが、実は非常に無駄なく、しかも美しく筋肉がついている。また、姿勢も凛としていて綺麗なため、どのような服を着ていても美しく見える。

つけ上がるから絶対に本人には言わないが、奴の身体にはある種の芸術的な美しさがあると、わたしも思っている。彫刻のモデルとかしらいいんじゃないだろうか。……あつ、なんか刺し傷とか銃痕とか不審な傷があるから駄目か。

また、夫は声も素晴らしくいい。

よく研いだ刃物のような鋭さと、甘い色気を兼ね備えた耳心地のよいバリトン。あの声と夫が生来もつ独特の妖艶さによって、姿は見せずとも電話越しに腰砕けにされた老若男女の数々をわたしは知っている。

実は、わたしが夫のパーツの中で最も好きなのが奴の声なのだが、それを奴は知っていて、色々と有効活用してくるため、非常に腹立たしいことこの上ない。絶対にそのうち仕返ししてやる。

……まあ、つまり何が言いたいのか、と言うと。

夫は昔から非常にもてる人間だった、ということだ。それも、老若男女問わず。

それでも夫の性格が分かれば皆自然と離れていくのだが、如何せん、奴が外見だけでなく能力も人並みはずれて高く、それを活かした職業で超高給取りなため、あわよくばと玉の輿を狙う女もごくごく少数、いた。

そしてそんな女——時には男——からわたしが謂れない嫌がらせや侮辱を受けることも、しばしばあった。

そういうとき、夫は大体的場合、にこにこと嬉しそうに笑っている。奴は、わたしが自分のせいで落ち込んだり怒ったりするのが、大好きなのだ。あの変態が！！

しかし、そんな変態でどうしようもない夫が、ごく偶に本気で怒ることがあった。それは例えば、嫌がらせが度を過ぎて、わたしの命の危険があったときや、夫以外の原因のせいで、わたしが傷ついたときだった。

ちょうど、こんな風に。

「……四つ足の獣の分際で、僕の妻の体に傷をつけるとは」

とてつもなく慈愛に満ち溢れた笑顔と声音。

聖人さながらに清らかな笑顔だ。そして、虫一匹すら殺したことがなさそうな優しい声だ。

………なのはどうして、こんなに背筋がぞわぞわするほど禍々しいんだろうか。

「か、要？」

「ん？ 大丈夫だよ、梓。殺しはしないから。ちょっときつく躰を
するだけだからね」

たかが狐の分際で、僕と梓の息子を何回も攫っていただけならまだしも、梓を傷つけるなんて愚かな真似をしてくれたんだから、2度とこんなことをする気が起きないように、馬鹿な獣の頭でも理解できるようにちゃんと思いい知らせてあげないと——云々。

寝室のベッドの上で力なく横たわるわたしの髪を右手で優しく撫でながら、そんなことを柔らかに微笑んで言う夫に冷や汗が流れた。

怖え。

邪気の無い、光り輝くオーラが出ていそうな、キラキラとした笑顔がこれほど恐ろしく見える人間も滅多にいないのではなからうか。まずい、これは本気で怒っている。

ヒヤヒヤしつつも夫を止められないでいると、寝室の扉をノックする音がして、夫の返事の後に小さく扉が開いた。

そこから長女の明奈と彼女の恋人の和之君、そして2人に押されるような格好で、泣き腫らした真っ赤な目をした長男の優吾が入ってきた。

「狩野さんがリビングで待っているよ」

明奈の言葉に、夫は僅かに目を細めて、心配そうにわたしを見た。とりあえずここは「殺さない」と言った夫の言葉を信じるしかない、と思い、わたしは奴を安心させるように微笑んで「大丈夫だから、行ってきた」と言った。

夫はふつと微笑んで（だからその優しいな笑みが怖いんだよ！）、わたしの額に唇を落とした後、明奈と和之君を連れて部屋から出て行った。

そして寝室には、ベッドに横たわったままのわたしと、泣き腫らした目を隠すように俯いたままの小さな長男が残された。

「ゆう君、おいで」

なんとか動かせる右手で長男をおいでですると、優吾は一瞬だけ体をビクつとさせて、それからわたしの方へおずおずと近づいてきた。

「……おかあさん、ごめんなさい……」

夫譲りの可愛い顔を真っ赤にさせて、ぐしぐしと泣きながらそんなことを言う息子に胸が痛んで、わたしは右手で小さな彼の頭をよしよしと撫でてやった。

「ゆう君は何にも悪いことしてないでしょ？ お母さんに謝ることなんか何もないんだよ？」

「でも、ぼくのせいだ……」

「ゆう君のせいじゃないよ」

どうにもわたしの怪我の責任を感じているらしい息子を痛ましく思いながら、わたしはなんとか、この小さく賢くそして優しい彼を罪悪感から解放しようと、慰めと説得を重ねた。

優吾は、無口で大人しい子だった。

長女の明奈は動き出すのは早かったが、言葉を明確に話し始めるのは遅かった。その分、話し出したら物凄いスピードでめきめきと言語能力を伸ばしていったが。

それに対して優吾は、動き出すのも遅かったし、話し出すのも遅かった。現在4歳の優吾は幼稚園に入った当初も今も、他の子どもが大きな声で自分の主張をするのに対し、ほとんど口を開かない。話すのはいつも二言三言、それも文章ではなく簡易な単語のみ。

幼稚園の先生には、こちらの言っていることはきちんと理解しているし挨拶もちゃんとできる子なので、恐らく本人の性格だろう、集団生活をしていれば自然にたくさん話すようになる、とアドバイスされたのだが、わたしと夫の見解は違うものだった。

確かに話し出すのは遅い子だったが、話そうと思えば、いくらでも話せるのだ、優吾は。

ただ、何かが邪魔をして、人の多いところでは極端に無口になるいや、よく観察していたらわかるのだが、声を出さずに小さく唇を動かして何かを話しているのだ。仕事柄、そういった人の些細な動きに敏感な夫がまず初めにそれに気づいて、わたしに教えてくれた。

そして、ここで問題が起きた。優吾が幼稚園に通いだすのと同時に、休日のふとした瞬間、急に優吾が家の中からいなくなる、という事態が頻発したのだ。

一番最初のときはわたしもパニックになって半狂乱状態だったが、その時もその後も、優吾は突然いなくなる度に、必ず家から遠く離れた小さな無人の神社の中で近所に住む狩野さんに発見・保護された。

それが何度か続いて、ついに習慣化してしまった頃、わたしが毎朝軽く掃除する家の前の道に、鴉の死骸が落ちていた。

誤って車にでも轢かれたのかな、と少し可哀相に思っていたら、その翌日には鼠の死骸が、その更に翌日には猫の死骸が……と、一週間ほど動物の死骸が連続で置かれるにあたって、わたしはその時ちょうど仕事でロシアに飛んでいた夫を電話で呼び戻した。夫には多少無茶をさせたようだが、仕方がない。だって、これは明らかに嫌がらせだ。このときわたしは、夫の過去の女か男の仕業だろうと思っていたのだ。

夫はわたしが電話をした2日後の明け方に帰国した。

奴はその日の朝に置かれていた死骸を見た瞬間、奴にしては珍しく、不機嫌も露わに盛大な舌打ちをしてその死骸を処分した。そして、そのまま無理矢理幼稚園を休ませた長男を小脇に抱えて狩野さんの家に直行し、何かを夜まで話し合って帰ってきた。

話の詳しい内容は教えてもらえなかったが、概要だけは教えてもらった。

優吾は、普通の人には見えないものが見え、聞こえない音が聞こえるらしい。それも日常的に。

わたしとしては衝撃の事実ではあるが、なんせ優吾の遺伝子の半分（もしかしたら大部分かもしれない。というかわたしの遺伝子はほとんど夫の遺伝子に食い潰されてそうだ）は化け物みたいな夫から出来ているのだ。それに、世の中には科学的に解明できない不思議な現象や物体もあるのだ。その一例がわたしの夫であるからして、息子である優吾に何らかの特殊な能力があっても不思議ではない。

むしろ、赤ん坊の頃から家の中のある方向をしきりに気にしたり、寝言が「うるしやい……」だつりしたのはそのせいか、とわたしは納得したくらいだ。それに、人が多い場所で無口になるのも、わたしにはわからない『音』や『何か』のせいだとしたら、納得できる。家の中で明奈や和之君と遊んでいるときの優吾は、割とよく話

すのだ。

そして、そんな優吾のことを、我が家から離れた場所にある無人の神社の主たる『お狐さま』（夫曰く、正確には狐ではないそうだが）が入って、度々休日には優吾を勝手にうちから攫っていたらしい。その度に、代々その神社の狐の管理をしているという狩野さんが慌てて優吾のことを保護してくれていたそうだ。

ちなみに、狩野さんの家系は直系の男子が何故か必ず「見えて聞こえて感じる人」らしく、対処方法も詳しく知っているので、色々優吾の指導をしてくれることになった。

ただ、優吾本人は賢いがまだ幼い子なので、もしかしたら成長過程で見えなくなる可能性もある、とのこと。念のため病院などで耳や目の検査をしてもらった方が、本人も自分の特殊性をちゃんと理解できていいそうだ。それについてはわたしと夫が、優吾の意思を尊重して決めたらいいらしい。

で。

その『お狐さま』はどうやら性格が悪いらしく、優吾が自分に懐かないことに腹を立てて、今度は優吾が懐いているわたしに嫌がらせをしてきたらしい。わたしはよくわからなかったが、道の前に置かれていた動物たちの死骸は全て獣に内臓をいくらか喰われ、切り裂かれたものだったそうだ。

はつきり言って、胸糞の悪い話だ。

神社の主だかなんだか知らないが、なんで狐ごときにわたしの可愛い息子を攫われなくてはいけないのだ。おまけに、嫉妬でどこぞのストーカーのような嫌がらせを受ける謂れもなければ、そんなことで無惨にも命を奪われた動物たちが可哀相すぎる。なんにしる、命をそんな風に弄ぶのは許せない。

話を聞いていて物凄く腹が立つたわたしを、珍しく夫が宥めた。やり方はどうであれ、相手の『お狐さま』は動物の命を簡単に奪えたり、離れた場所に人の子を攫っていける力のある奴なんだ、と。そして、色々やりすぎな性格の奴ではあるが、『お狐さま』には代替わりがあり、12年後に今の『お狐さま』は役目を降りるから、それまでは下手に手出しは出来ないらしい。よくはわからないが、あの無人の寂れた神社には何やら大切な役割があるそうだ。

「まあ、狩野さんが釘を刺しておくらしいから、滅多なことは起きないと思うよ」

そう言つて、夫は笑っていた。

奴は明確に見えたり聞こえたりするわけではないが、気配は感じるらしい。それは明奈も同じで、もう本当に、どこまでそっくりさんなんだこの父娘は。

また、夫の会社にはそっち系専門の部署もあるらしく、最悪そのエキスパート兼夫の下僕数名を動かすつもりらしい。夫自身も、そっち系についての対処法はちゃんと知っているから平気らしいが……ほんとにどういう警備会社なんだ、あそこは。

優吾には何があつたのか具体的には教えていなかったが、聡い子だから心配そうにわたしを見つめていた。

そんなことがあつた2カ月後。

狐も大人しくなったな、と思っていた矢先の日曜日の朝。

夫と子どもたちが近くのパン屋に出かけて留守の間、わたしが1人きりでリビングを掃除していたときに、それはいきなり起こった。

大きな地震、だった。

初期微動なしの大きな揺れが唐突に部屋を襲つて、掃除機をかけ

ていたわたしは勢いよく床に倒れこんだ。体を思いつきり打って咳き込んだのだが、悲鳴もろくにあげられないほど強い揺れが上下左右に襲ってきて、わたしは混乱した状態のまま、体のあちこちを床やら壁やら家具やらに何度も強く打ちつけた。

時間にして僅か5分ほど。しかし、その僅かな時間で体中が痺れて動けなくなるほど痛めつけられたわたしは、ぐったりと倒れこんだままだった。

ただ、揺れが収まった瞬間に部屋に充満した、むせ返るほどの強い生臭い獣臭と、倒れたままのわたしを嘲笑うかのように響き渡った甲高い狐の鳴き声には久々にぞっとした。

その後、帰宅した夫と子どもたちが異変を察知して駆けつけてくれ、現在わたしは夫から直々に手当てを受けてベッドに寝かされているのだが。

「おかあさん……ごめんなさい……」

ぐすぐすと未だ泣いている優吾を、痛む体に鞭打って、強く抱きしめる。小さくて温かなこの子が、こんな風に泣く必要なんてここにもないのに。

夫も今回のことで前回すぐに動かなかったことを反省していたが、ぶつちやけわたしは子どものためなら多少命の危機に瀕しようが全く気にしない。

そりゃ、痛いのは嫌だ。しかし、それ以上に可愛い子どもたちが傷つくのも、泣くのも嫌だ。前回夫が狐に直接制裁を科さなかったのも、それによって動物の死骸のことが優吾にばれて、優吾が自分で自分を責めるだろうことを理解していたためだ。一応、奴にも人の親らしい感情はあるらしい。

ただ、今回は……あの様子だと、『お狐さま』がどうなるか、ちよつとわからない……。はつきり言つて、夫の方が『お狐さま』より何倍も怖い。

来るべき時が来るまで、どうにか存在していてほしいらしい『お狐さま』。殺したら、まずそうなんだけど、なあ……。

「おかあさん……」

ようやく泣き止んできた優吾は、腕の中からわたしを見上げてきた。わたしに色だけよく似た真つ黒な瞳以外、泣きすぎたせいで目は真つ赤に充血している。

「おかあさん、ぼく、もつとつよくなる」

泣きすぎて掠れてしまった声で、優吾はそんなことを言った。

「それでね、それでね。ぜったい、きつねをやつつけるからね。だから、ぼくのこと、きらいにならないでね……」

「ゆう君……」

わたしは思わず泣きそうになった。

優吾のバカ、嫌いになるはずがないじゃないか！

夫はあんなんだが、娘もちよつとぶつとんでるところがあるが、優吾も、直接は血の繋がってない和之君も、わたしの大事な家族だ。多少変わったものに好かれようが、普通と違ふところがあるうが、だからどうした！

大体、この程度の怪我、夫との結婚前の騒動によつて負つたわたしの精神的ダメージに比べたら些細なものだ！！

「……おかあさん、なんでおとうさんとけつこんしたの……？」

力説したら、心の底から不思議そうに優吾に聞かれた。……ごめん、それは聞かないで……。

まあ、とにかく優吾も立ち直つたようで、わたしもほつとした。それに、優吾が強くなつてくれるのなら安心だ。さつそく明日から

明奈に鍛えさせよう。

このときのわたしは、後に娘とは若干違う方向に強かに成長した優吾が、わたしに内緒で実は『お狐さま』を簡単に殺せる程度にまで修行を積んでいたり、自分の初恋を実らせるために狩野さんをあらゆる手段を用いて脅したりしていたことなどは、全く想像もしていなかった。

ただ、先輩が和之君に会いにくる午後3時までに帰宅した、それまで神社に行っていたメンバー達——えらく清らしい笑顔の夫と娘、異常なまでに青ざめ震えている狩野さん、そしてどこか遠い目をした和之君——を見て、わたしが深い深い溜息をついたのは、言うまでもない。

奥様の溜息、狐と長男の決意の話（後書き）

余談：

奥様の受難、超常現象ver。

「秘密の事情」でぼけーとした子だった木崎君は、この後、姉に揉まれて強かになっていった姿なのでした。

ちなみに、『お狐さま』は奥様大好きな旦那様とお母さん大好きな長女の超人タッグによって、「かろうじて存在している」程度にまでボコられました。

狩野さん、本気で木崎家にびびる（ボコられてるのが見えるから）。和之、遠い目をする（見えないから神社の外で待機してたが、なんかマズイ状況だというのはわかる）。あつ、狩野さんにも不憫と巻き込まれ属性がつけました。

最悪な休日に見た空の色（激昂×逃亡編）

黄色、赤色、橙色。

色んな暖かい色が混ざり合ってできた綺麗な光が、わたし達を照らしていた。

「綺麗だね」

「うん……」

夕日が赤いつて言うのは、嘘だ。

こんなにたくさんの方が混ざってるのに、ただ赤いだけに見えるなんて、皆、目が悪いんだ。

「夕日が全部沈む前に、帰ろうね」

「……うん」

わたしの返事に、少年は微笑んだ。

わたしの右手を握るでもなく、ただ掴んでいるだけの彼は、眩しそうに目を細めて夕日を見つめた。

あと少し。

あと少しで、奇跡みたいに楽しかったこの時間と、お別れだ。

神様は不公平だ。

「真奈美、この人が真奈美の新しいお母さんと、真奈美の弟だよ」

「真奈美ちゃん、初めまして。私は十河由里っていうの。こっちは息子の圭太。小学校3年生なの。ほら、圭太、この子が圭太の新しいお姉ちゃんよ」

何が楽しいのか、にこにこ笑っているお父さん。一張羅のダークグレーのスーツがぱりつと決まっっていて、かつこいいい。

お父さんはもう40歳だけど、ずっと若く見える。きりつとして、モデルみたい。でも、わたしとはあんまり似ていない。

わたしはお母さん似だ。

お父さんとお似合いの、すっごく綺麗なお母さん。真っ直ぐな黒い髪、白い肌、綺麗な黒い瞳。スタイルだって抜群だった。

お父さんとお母さん、それにお母さん似のわたしが一緒に歩いてたら、まるで芸能人の親子みたいだって、色んな人に言われた。「美形カリスマ家族」って、地元じゃ有名だったんだから。

それなのに、お母さんは6年前に急に倒れて、そのまま死んでしまった。それ以来、わたしとお父さんはずっと2人暮らしだった。

おじいちゃんもおばあちゃんも、何回もお父さんにお見合いを勧めていたけど、お父さんは毎回断っていた。当たり前だ、お父さんはお母さんとラブラブだったんだから。お父さんは、一生お母さんのことが大好きなんだから、再婚なんかするはずがない。

——そう、思っていたのに。

お父さんの40回目の誕生日のお祝いに連れてこられた、たつぷりのボリュームと温かくて優しい味が人気のレストラン。

実は、結婚を考えている女性がいるんだ、と告げられたときから、嫌な予感はしていた。

4人席に案内されたときから、わたしはずっと黙って顔を俯けて

いたのに。

「……真奈美？」

わたし以外の人間の紹介が終わったのに、黙ったままのわたしを不審に思ったのか、お父さんが声をかけてきた。

でも、答えたくなかった。

だって、最悪だった。

お父さんが「付き合っている人がいる」って言ったときも、「実は結婚を考えている人がいる」って言ったときも、全部冗談だと思っただ。だから、「じゃあ今度ちゃんと紹介してね」って、おどけて言ったのに。

本当に、連れてくるなんて。

わたしは顔を上げて、正面に座る十河母子を睨む。

十河由里は、ただのおばさんだった。

16歳のわたしからしてみれば、いくら綺麗に化粧してても、肌の艶のなさや小皺は隠せるものではない。太ってはいないけど、胸もない。お母さんに比べたら、本当に普通のおばさんだった。

その息子の圭太は、頭の悪そうなガキだった。

真っ黒に日焼けした肌、細い手足。無理矢理綺麗な服を着せられてるってのがよくわかる。

短く刈り込んだ髪の毛に、太い眉。このくらいのガキの顔の良し悪しなんてわかんないけど、十河由里には似ていない。じゃあ、こいつは十河由里の元夫似なんだ。

最悪。

「……ねえ、なんで母子家庭なの？ 前の旦那はどうしたのよ」
低い声で問いかけたら、十河由里の顔が強張った。圭太は不愉快

そくに顔を歪めてた。お父さんがわたしの隣で息を飲んだのがわかったけど、顔を向けてなんかやらなかった。

「……前の、夫とはね、離婚したのよ」

取り繕うように優しげに微笑みながら言った十河由里に、苛立ちのゲージがMAXになった。何、それ。

「わたしのお母さんは、わたしが10歳の時に死んじゃったのよ」
斬りつけるように言っていると、十河由里の顔がまた強張った。

「なのに、なんであんなんかがわたしの新しいお母さんになれるのよ。わたしのお母さんは1人だけよ。あんな、鏡で自分の顔、見たことある？ あんたとお父さんじゃ全然釣り合わないわ、もちろんわたしともね。それなのに家族になる？ バカじゃないの？ ひと目見りや分かるわよ、わたしとお父さんとあんなら2人が他人だって。あんたみたいなブスからわたしが生まれるわけないでしょ？」
そんな家族がほしけりや、そのバカみたいなガキの父親に戻ってきてくださいって頭下げりやいいでしょ、どうやったのかは知らないけど、うちのお父さんを誑かさないでよ！

そこまで言ったところで、バシャッと冷たい水を被せられた。十河由里は真っ青になって震えている。

その隣に座っていた圭太が、テールに足を乗つけて身を乗り出して、自分の席に置いてあったグラスを掴んで、そこに入っていた水をわたしにふっかけてきたのだ。

それを理解して、水のせいでいったんは冷えた頭が再びカアッと熱くなった。

「何すんのよ！」

「うるせえっ、黙れよ、ブスー！」

「なっ、誰がブスよ！ このクソガキ！」
「——黙りなさい、真奈美！！」

空気が震えるほど鋭い怒声に、わたしと圭太は同時にビクツと身震わせて、声を出した人を見た。

お父さんが、十河由里と同じような真っ青な顔色をして、硬い表情でわたしを見た。

……お父さんが、わたしを怒鳴った。
信じられない。

だって、お父さんはいつも、絶対にわたしの味方なのに。お母さんがいたときも、お母さんに叱られたわたしを、いつも庇ってくれたのに。「真奈美はお父さんのお姫様だよ」って、言ってくれたのに。

お父さんは、初めて見る怖い顔で、わたしを見ていた。

「由里さんと圭太君に謝りなさい、真奈美」
いつもより低くて冷たい声で、お父さんはそう言った。
なんで？ なんでわたしが謝るの？

「真奈美」

お父さんの怖い顔と厳しい声に、体が震えた。

お父さん、怒ってる。わたしに怒ってるんだ。

なんで？ 本当のことを言っただけじゃない。こんなおばさんとクソガキが家族になるなんて、皆に笑われるだけだよ。こんなおばさんより、お母さんの方が綺麗で優しいよ。この2人は、お父さんの収入当てにしているだけだよ。

そう思うのに、お父さんが怖くて一言も喋れなくなってしまった。

鼻の奥がツンとして、視界が徐々に潤んでくる。

泣きそうなのに、お父さんはわたしを睨むのをやめてくれない。酷い、どうして。

「……いいのよ、隆司さん。真奈美ちゃん、急なことでびっくりしてしまったのよ」

かすかに震える声で、青ざめた表情のまま、十河由里がそんなことを言った。青ざめた顔をぎこちなく笑顔にして、わたしに笑いかけてきた。

「ほら、圭太もお行儀が悪いから、テーブルから早く降りなさい」
意外なことに、圭太は十河由里の言うことに素直に従った。わたしの方を睨んだまま、大人しく元の席に着いた。

「由里さん、でも」

「しょうがないわよ。彩加さん、綺麗な方だったもの。それなのにいきなりこんなおばさんが新しい母親になりますって言っても、信じられないわ」

何よ、わかってるんなら、さっさと身を引きなさいよ。

そう思っただけで視界で十河由里を睨んだら、十河由里は青ざめた顔のまま、それでもわたしを真っ直ぐに見返してきた。

「でもね、真奈美ちゃん。今すぐじゃなくていいの。少しずついいから、私たちと家族になっただけいいのよ」

その言葉に、わたしは大声で「嫌っ、絶対嫌っ!!」と怒鳴って、

——パンツ!!

鋭い音と、一瞬遅れてやってきた熱い痛みに、呆然となった。

お父さんが、今までで一番怖い顔をして、わたしを見ていた。

——お父さんに、ほった、叩かれたんだ。

そう理解した瞬間に、わたしは膝の上に乗せていた、お父さんに誕生日に買ってもらったお気に入りバッグを掴んで、その場から逃げ出していた。

滅茶苦茶に走りながら、思った。

神様は、不公平だ。

お母さんを早く死なせてしまっくらいなら、十河由里と圭太を殺せばよかったんだ。

そしてその分、お母さんが長生きすればよかったのに。

神様は、不公平だ。

あんな、ブスで何の価値もない奴らに、わたしとお父さんと家族になるチャンスを与えるなんて。

神様は、不公平だ。

最悪な休日に見た空の色（呆然×絶句編）

お父さんが予約していたレストランが、格式ばった高級なところじゃなく、温かな雰囲気のレストランでよかった。ついでに、個室の予約で、本当によかった。

でないと、わたしが最初に大声出した時点で、4人まとめて店を追い出されている。

「……はあ……」

人生で初めてお父さんにひっぱたかれて、ショックでレストランを走って逃げ出して。そこから最寄の駅へと向かったわたしは、トイレの個室の中で声を殺して号泣して、その後、泣いたのと十河圭太に水をぶっかけられたせいでメイクが斑模様になってしまった自分の顔を手鏡で見つめていた。

とりあえず、涙は止まった。今、わたしの中にあるのは、大泣きした後の虚脱感だけ。

ああ、ほっぺた、じんじんする……。

赤くなっている、お父さんに叩かれた左頬をそつと撫でる。

ちよつと、ファンデーションでも隠れないだろうなあ、これ。っていうか、冷やした方がいいかな。放っておくと腫れそう。

口の中にも、チリチリとした鋭い痛みがある。ひっぱたかれた拍子に口内にある頬の肉を噛み切ってしまったのだ。血の味がして、不愉快でたまらない。

ここが改装したばかりの駅でよかった。トイレ、綺麗だし。そう思いながら、個室の中から出て、もう思い切って顔を洗う。ウォーターブルーのは使ってないし、涙でほとんど流れてたから、

綺麗に取れるだろう。それに、わたしは素が綺麗だから、化粧なんごくごく軽いものだ。マスカラなんかつけてないし、水洗いで問題ないだろう。

ばしゃばしゃと顔を洗って、ついでに口の中を軽くゆすいで、それからハンドバックに入れていたお気に入りのハンカチで顔を拭く。おかげで、ハンカチはびしょびしょになってしまった。もういいや、と思って、そのままハンカチを軽く絞って薄っすらと赤くなっている左頬にあてる。ひんやりとして、気持ちいい。

一回思いっきり泣いて落ち着いたら、自分のことを振り返る余裕が出てきた。

……正直、まずかった、とは思う。

本当は、分かっていた。お父さんが、冗談なんかで「付き合ってる人がいる」とか、わたしに言うはずがないって。

お父さんは少しずつ、少しずつ十河母子のことをわたしに話そうとしてくれていた。でも、わたしはお父さんがお母さん以外の人と恋人のような関係になるのが嫌で、冗談を言って誤魔化してはそれを曖昧に受け流していた。

それなのに、あんな風に喧嘩売っちゃって。お父さんが怒るのも、当たり前だ。

でも、お父さんだって悪い。

だって、まさかあんな普通のおばさんと再婚するだなんて。おまけに、生意気なクソガキつき！

しかも夫と死に別れた、とかならわかるけど、離婚って。それって、性格の不一致とか、浮気とか、借金とか、そういうのが理由でしょ？ 最っ悪！！ そんなの、どっちにも問題ありじゃない！

そもそも離婚したっていつでも、そいつはクソガキの父親でしょ？！新しい男見つけてないで、よりを戻せばいいじゃない！いい歳したおばさんが色気出して、みつともないったら！！

そう思ったら、またムカムカしてきた。

お父さん、優しいから、十河由里に迫られて断れなかったんだ。子ども好きだし、あの女、自分の息子も利用してお父さんに近づいたんだ。絶対そうだ。でないと、あんなおばさんと再婚したいなんて、お父さんが言い出すはずがない。

やっぱり、わたしは正しい。お父さんは絶対に騙されてるんだ。目を覚まさせてあげなきゃ。ああ、でも、わたし、逃げ出してきたやつだし、お父さん、怒ってた…。

わたしは、十河由里がああの後、お父さんに泣きながら擦り寄る姿を想像して、ぞっとした。

やばい、失敗した。今なら、お父さんは十河由里の言いなりになっってしまう！

どうしよう、どうしよう。

ぐるぐると考え込みながら、わたしはトイレを出て、人混みの中を歩いた。

でも、いい考えは思い浮かばない。

また泣き出しそうになったところで、わたしは空いていたベンチに座り込んだ。

わたしはその時になって、ようやく自分が駅ではない場所にいることに気がついた。

ちゃんと前を向いて歩いて歩いてなかったからわからなかったけど、いつの間にか、駅に併設された大型ショッピングモールの中に入って

きてみたい。

たくさんの専門店が入っている大型ショッピングモールには、休日の昼間ということもあって、家族連れが多い。仲良く買い物をする家族の姿を眺めて、わたしは小さく鼻を嚙った。

お父さんは、今日、4人でお昼ご飯を食べた後、どうするつもりだったんだろう。

どっちかの家に行つて、そこで色々な話をして、晩ご飯も一緒に食べるつもりだったのかな。お父さんの誕生日ケーキ、今年はワンホールで買って、4等分したかったのかな。

考えるだに、あの十河母子と和氣藹々と過ごす自分とお父さんが想像できない。気持ち悪い。

「……気持ち悪い。最悪」

小さく声に出したら、わたしの中でその通りよ、と肯定する声が返ってきて、なんとなく胸がすつとした。

そうだ、なんであんなレベルの低いお婆さんとクソガキがわたしとお父さんの家族になれるんだ。

「あんた達みたい凡人が、わたしとお父さんとの間に入つてこれる筈がないでしょ。お父さんは、お母さんが一番好きなんだから。再婚なんて、絶対にしないんだから」

そうだ、そうだ。お父さんだって、わたしが嫌がつてるのが、さっきのことで分かっただろう。大事な一人娘が拒否してるんだから、無理矢理に十河母子と家族になるうとはしない筈だ。

さっきは叩かれたけど、大丈夫。次にわたしが反対しても、お父さんはわたしを叩いたりしない。だってわたしは、

「お父さんの、大事なお姫さまなんだから」

わたしの小さな独り言に、予想外の返事が返ってきたのはこの瞬間だった。

「うわ、気持ち悪い」

澄んだボーイソプラノが、強烈な嫌悪と軽蔑の感情を込めてわたしにぶつけられた。

ぎよつとして、声のした方を見る。大人が3人は余裕で座れるベンチの右端に座っていたわたしのすぐ左隣に、1人の少年が座っていた。

少年、といっても、ちょうど十河圭太と同じ歳くらいの小学生のガキだ。でも、あのクソガキとは全然違っていた。

その子は、物凄い美少年だった。

ジュニアモデルだろうか。濃い栗色の髪に茶色の瞳、滑らかそうな白い肌をしていて、顔立ちはお人形のように整っている。

こんなに綺麗な男の子を見たのは初めてで、わたしは思わずまじまじと彼を見つめてしまった。

すっごい綺麗。うわ、これくらいの年頃の少年の生足にきゃーきやー言う友達のがもちがよつとわかってしまった。その子は初夏に合った七部袖のTシャツとハーフパンツを着ていて、そこから除く無駄毛のない、それでいて細くて形の綺麗な腕や脚が目を惹く。

「……ちよつと。何、人の身体じろじろ見てんの？」

嫌そうな声に、慌てて視線を脚から顔に向けると、男の子は綺麗な顔を歪めてわたしを睨んでいた。

わたしはようやく、自分が変態のようなことをしていたのに気が

ついて、「ご、ごめん」と謝って——あれ、と思った。
この子、さっきわたしに「気持ち悪い」とか言わなかった？

わたしが胡乱げな顔で見えていたら、彼は返事もせずに、ふいつと視線をわたしから右手に握った携帯電話に移した。あれは、形と色からしてジュニアケータイ、かな。少年は年齢に似合わない、物凄い指の速さでケータイのキーを押している。

「……ねえ。気持ち悪いから、こつちをじろじろ見ないでくれる？」
顔をケータイに向けたまま、少年が険のある口調でわたしに言った。

なんなの、この子。さっきから偉そうに。

「何なのよ。さっきから偉そうに……」

「うるっさいなあ」

むっとして文句を言ったわたしの言葉を途中で遮って、少年はわたしを思いっきり睨んだ。小学生のガキの癖に、綺麗な瞳にはぞつとするほど冷たい光が宿っていた。

な、なんなのよ！ その顔！！ ガキの癖に、生意気！

「あのさあ、あんた、さっきから一人でブツブツ煩いんだよ。おばさんがどうの、再婚がどうの。おまけに『わたしはお父さんの大事なお姫様なんだから』とか言っただけでやーっと笑ってるし。気持ち悪すぎ。頭おかしいの？」

身長からして、座高もわたしの方が高いのに、少年は遥か高みからわたしを見下しているかのような口調でそう言った。

その言葉を聞いて、わたしは顔中に熱が集まってくるのを感じた。もしかして、全部聞かれてた？！

「ぬ、盗み聞きするなんて、最低よ！」

「はあ？ 何言ってるの、あんた。俺が座ってたところをあんたが後からフラフラやって来て、隣にどかっと座った挙句、俺に聞こえるような音量でブツブツ言い出したんだろ。あー、自覚なしでやってたの？ 気持ち悪いなあ、ほんと。さっさと病院行けば？」

「なっ……」

「大体、初対面の人の身体をいやらしー目で見るとか、最低だろ。小学生に欲情すんなよ、変態女」

「っ……」

絶句。

わたしは生まれて初めて、絶句した。

わたしは、友達からよく「口が悪い」って言われる。「性格がキツイ」とか、「ワガママ」とかも、よく言われる。

でも、それはわたしが自分の意見をちゃんと出してるだけだ。周りの子たちみたいに、人の機嫌ばかりとって、へらへらしてるのが嫌だから、自分の意見を出して、それを貫こうとしてるだけ。

事実、小さい頃から、わたしに口で勝てる女の子も男の子もいなかった。だって、わたしはお母さん似の美人だし、成績だって優秀で、運動神経も抜群だから。わたしのことを悪く言う子は、みんなわたしに嫉妬してるだけだったもの。どの子も所詮わたしに劣っているっていう本当のことを指摘してやれば、みんな悔しそうに黙るか泣き出すだけだった。

それなのに。

こ、こんな……小学生、それも3、4年生くらいの男の子に、こんな風に馬鹿にされて見下されて、何一つ言い返せないなんて……！！

わたしが真っ赤になって屈辱と怒りに身体を震わせていると、少

年はあつさりわたしから視線を逸らして、またケータイを弄りだした。

なんなの、こいつ!! 絶対親の躰がなつてない!! ちょっと綺麗だからって、甘やかせすぎじゃない?! そりゃ、綺麗な子だなーってじろじろ見たのは悪いと思うけど! 独り言なんて聞かないふりするのが礼儀ってもんでしょ?!

少年を睨んでいると、彼の体の向こうに買い物袋が置かれているのに気がついた。有名な生活雑貨の店の袋がいくつかと、服屋の袋がいくつか。

もしかして、こいつ荷物番でもしてるの?

……ってことは、この生意気なガキの親が、そのうち現れるんじゃない?

そう気づいて、わたしは素早くあたりを見渡した。こんなに顔だけは綺麗な子の親なんだから、きっと美形の夫婦だ。でも、頭はちやらんぽらんに決まってる。そういう親がいるから、モンスター・ペアレントとか、学級崩壊とかが起きるんだ。わたしがきっちり、文句言つてやる!

「何、馬鹿なこと考えてんの? あんた」

「はっ?」

まるでわたしの心の中を読んだかのようなタイミングで、少年が顔はケータイに向けたまま、横目でわたしを睨んだ。な、なによつ、その態度!

「ああ、俺の言ったことが図星すぎて言い返せないから、代わりに俺の親に無意味ないちやもんつけようとか思ってる?」

「なっ……」

「残念、俺今日は親とは来てないから。姉ちゃんとその彼氏と一緒に来てんの。で、この荷物は俺のもんじゃないから」

「えっ」

「俺の前にここに座ってた、俺とは無関係のおっさんが忘れてった荷物。なんか慌ててどっかに行ったから、そのうち勝手に取りに来るんじゃないの？」

「……」

「そもそも、俺は友達と約束があつたから姉ちゃん達と一緒に来ただけで、帰りの時間までは姉ちゃん達とは別行動だし。あんたがいちやもんつけれるような相手は待っても当分来ないけど？」

「あ、あんたみたいな小さい子、一人でこんな場所に放っておくとか……」

「は？ 傍から見てりゃ、あんたの方が危ないよ。」

独り言ブツブツ言つてにやにや笑うわ、小学生を卑猥な目で見ろわ、気持ち悪すぎ。おまけになんかフラフラしてるし。俺よりあんたの方が絶対に拉致しやすいね。鏡で自分の顔色見たら？」

「……………」

再び、絶句。

な、なんなの、この子。というか、「ヒワイ」とか「ラチ」とか、このくらいの年齢の子ってこんな言葉、当たり前前に使う？ お、おかしくない？

わたしが呆然としつつ、それでも尚、何とか言い返そうとしたとき。

ぐぐうゝぎゆるぎゆるぎゆるゝゝゝ

大きなお腹の音が鳴り響いた——わたしのお腹の中から。

「……………」

「……あんた、何歳児だよ……」

混雑してて、BGMも結構なボリュームで流れているにもかかわらず、ちょうどわたしの前を歩いてた客の何人かがぎょつとしたような顔でわたしを見ていた。……は、恥ずかしすぎる。少年の心の底から呆れたような声にも、返事ができない。

今日は朝が早くて、ついでに昼食が豪華だとお父さんから聞いていたから、朝ごはんはいつもより少なめで。なのに結局、一口も食べずにレストランを飛び出して、めちゃくちゃに走って、号泣したから——はつきり言って、わたしは今、物凄くお腹が空いていた。

「……はあ」

これ以上ないくらい真っ赤になって、ついでに恥ずかしくて泣きそうになって俯いたわたしに、少年のうんざりしたような溜息が聞こえた。

こんな生意気な年下の少年に、女の子として聞かれない音ワースト3に入る音を聞かれてしまったことに、本当に泣きそうになる。……もう、やだ。最悪。消えちゃいたい。

「仕方ないなあ」

そんな言葉とともに、突然右腕をぐいっとひっぱり上げられた。

「えっ……」

「ほら、さっさと立ちなよ。行くよ」

そう言って、少年はわたしの右手首と掴んだまま、歩き出した。

「えっ、ちょ、ちょっと待ってよ！ いきなり何するのよ！」

「うるっさいなあ。声のボリューム落としてよ。そんなに注目浴びたいの？」

わたしより小さい癖に、信じられない力の強さでわたしの身体を引っ張りながら、少年は馬鹿にしたように言った。

「そうじゃなくって、いきなりなんなの！」

「だから、うるさいって。口を縫い付けられたいの？」

そう言っただけ振り返った少年の目がぞっとするほど冷たくて、思わずわたしは口を噤んだ。

な、何この子……。怖い……。

少年はわたしを引っ張って、上りのエスカレーターに乗った。

何？ どこに行くの？

「3階のフードコートだよ」

またもわたしの心を読むんだかのようなタイミングで、少年は言った。

「な、なんで……」

「俺もちょうど腹減ってたし。あんたがすごい腹の音響かせてくれたおかげで、あのままあそこにいるのも恥ずかしいし？ ついでだから連れてってやるよ」

「はっ……」

な、なんで？

っていうか、何その俺様な言い方！

「冗談っ、馬鹿にしないでよっ！」

「馬鹿になんかしてないよ、呆れてるんだよ、気づけよバーカ。別にいいだろ、俺も友達と会う予定潰れちゃったし。昼飯のついでに、姉ちゃんたちと合流するまで付き合ってよ」

……………は？

「どうせ暇なんだろう？ 1人でブツブツ言っただけにやにやして怪しい人やってるより、俺と遊ぼうよ」

……………へ？

「うん、そうしよう。いや、せっかく市街地に出てきたのに、暇になっちゃってどうしようかと思ってたところだから、ちょっといいや」

……………ええつと？

「じゃ、決まりね。帰りの時間まで俺とデートしようね、お姉ちゃん？」

……………。

少年の突拍子もない提案と、初めて見せた天使もかくやという笑顔に。

わたしは本日3度目となる絶句状態に陥ったのだった。

最悪な休日に見た空の色（昼食×強制編）

「お姉ちゃん、よく食べるねえ……」

心底呆れたような、感心したような微妙な声に、わたしはむつとしながら3個目のハンバーガーに手を伸ばした。

仕方ないでしょ、お腹すいてるんだから。走るのも泣くのも、結構体力使うんだからね。「あー、見てて胸焼けする……」と気持ち悪そうに言う少年は無視して、2箱目のナゲットの箱も片手でこじ開ける。

結局あの後、わたしは急に笑顔になった美少年に引っぱられて、人がこった返すフードコートに連れて行かれた。そして当然のように昼ご飯（某全国チェーンのハンバーガーショップのサラダセット）を奢らされ、現在、タイミングよく空いた席に2人で向かい合って座っている。

この、顔は綺麗な癖にクソ生意気で偉そうな少年は、なんのつもりだか知らないけど、わたしの呼び方を「あんだ」から「お姉ちゃん」に変えてからというものの、蕩けるような可愛い笑顔を振りまいている。

そりゃ、こんな可愛い子に「お姉ちゃん」とか言われたら嬉しいけど？店員さんとか、周りの客がうつとりしてるのを見るのは気持ちいいけど？……………こいつ、明らかにわたしのことを見下して馬鹿にしている。

信じられない、ほんと！「お姉ちゃん」って言うときのイントネーション！ものすごい嫌味に聞こえる！！「あんだ」の方がまだマシだった！！

「お姉ちゃん、ちゃんと噛んでる？ 飲み込むの、早くない？」

「……………」

「それにしても、いくらあんだだけ巨大な腹の虫鳴らしたからって、バーガー4個にナゲット2箱、ポテトLサイズ2個はないと思うなあ。一応、自分が女だっていう自覚ある？ 若いからって惰性で食べると、太るよ？」

「……………」

「まあ、お姉ちゃん、今でも神経は十分図太そうだから、別に体がぶくぶく太っても困らないか。あー、むしろ、そっちの方がお似合いい？」

「……………」

むかつく。

むかつく、むかつく、マジむかつくこのクソガキ！！

何で天使みたいな可愛い笑顔で、そんな悪意と嫌味たっぷりな声で失礼なことが言えんの？！ 女の子に対して太るとか、むしろそっちの方がお似合いとか、普通言う？！ 大体、こいつちよつと中身が成熟しすぎじゃない？！ こいつの言い方、ちよつとおかしいし！

なんていうか、このくらいの年頃の少年が同級生の女の子に対して言う「ブス」とか「太るよ」とか、そういうときの言い方じゃない。明らかに自分より格下の人間に対するような、冷たくて軽蔑した言い方だ。幼いがゆえの悪意、とかそういうんじゃない。冷静に考えた上で、本気でわたしのことを馬鹿にしてるって感じの言い方。……………学校の担任とか、生徒指導の教師とかの言い方と同じだ。

「……………あんだ、一体何考えてんのよ」
「んー？」

最後のハンバーガーの包みを開けながら、目の前で足をブラブラ揺らしつつケータイを弄っている少年に声をかける。相変わらず、キーを打つ手がめちゃくちゃ早い。……さっきから、何打ってんだろ。

「別に、お姉ちゃんには関係ないよ」

またもわたしの心の中を読んだかのような返事をして、少年はケータイをハーフパンツのポケットの中にしまった。な、なんなのこの子……ほんとに心の中、読んでんの？

「……なんか馬鹿なこと考えてるみたいだけど、一応否定しとくよ？ お姉ちゃん、顔に考えてること出すぎ」

「なっ……」

鼻で笑って言われてしまった。………むっかつくなあ！！

「あのねえっ」

「俺は別に、何にも考えてないけど？」

………やっぱり心の中、読んでるんじゃないの？

「さっきも言ったじゃん。友達と約束してたのが潰れちゃって暇なんだって」

「じゃ、じゃあ、一緒に来たお姉さん達と遊んでもらえばいいじゃない。彼氏と一緒にいるって言ったって、あんたみたいな小さい子をこんな人ごみに1人でほっぽっておくなんて、ほんととは心配してる筈よ？」

ここぞとばかりに「あんたみたいな小さい子」って部分にたっぷりと嫌味を込めて言ってみたけど、それはあっさり流されて、

「無理だね」

真顔で断言された。

「む、無理って……」

「和兄ちゃん……彼氏の方とはかく、俺の姉ちゃんにそんな思いやりの心があるはずがないだろ？ 久しぶりにこっちに帰ってきて、朝から晩まで大好きな彼氏といちゃつけるんだから、実の弟のことなんか気にするわけないじゃん」

「は……」

「今朝だって、一緒に行くって言ったら殺されそうな目で睨まれたし。もうすぐ日本を発つから、時間いっぱい彼氏を独占したいんだよ。女の嫉妬ってほんっと、怖いしみともないよねえ。俺だって別に一緒に来る気はなかったけど、彼氏の方が俺を誘ってくれたの知ってさ、すっごい拗ねてんの。バカだよねえ」

「え、ええっと……お姉さんと仲、悪いの？」

わたしの問いかけに、少年はきょとんとした顔をして、
「別に、普通に仲良いけど？」

と言った。え、ええ？ あんたの今の言い方、明らかにお姉さんと仲悪いでしょ！

「わっかんないかなあ。俺の姉ちゃんの話だよ？」

「そうだけど……」

「だーからあ。俺の、姉ちゃんだよ？」

「……………」

この、顔はすば抜けていいけどクソ生意気で口の悪い少年の、姉。

「……なんとなく、わかったかも……」

きつと、顔は綺麗だけど、こいつと同じくらい性格が悪いんだ。

「うん。まあ、大体合ってると思うけど、別に姉ちゃんは性格は悪くないよ？ ただ、ちょっと頭のネジが100本くらいぶっ飛んでるところがあるから」

「やばすぎじゃないの、それ」
どんな姉よ。

今いちよくわからないまま、わたしはバーガーを食べ終えて、ナゲットの残りを摘んだ。少年が「うわ、ほんとに全部食べる気だ……」とうんざりしたように呟いたけど、無視。うるさいな、わたしのお金で買ったんだから、別にいいでしょ！

「まあ、そういうことだから、夕方まで俺とデートね、お姉ちゃん」
につこり笑った少年の神々しいまでの可愛らしさに、思わず頷きかけてギリギリで踏みとどまる。……あ、危ない……。っ。

「デ、デートって、あんた何バカなこと言ってるの?!」

「うるさいよー、お姉ちゃん。食べ物をお口の中に入れたまま話すのはマナー違反。きつたねえの」

「……っ!!」

む、むかつくー!! いちいちむかつきすぎるんだけど、こいつ!!
でも、確かに少年の言うとおりだったから、必死に口の中のナゲットを咀嚼して飲み込んだ。うー、全然味わえなかった!

「だってさあ、お姉ちゃん、どうせ暇だろ?」

「べ、別に暇じゃないわよっ」

「嘘つき」

すつと目を細めて少年はわたしを見た。うつ、とわたしは思わず怯む。この子、ほんとに何者? エレベーターの方にひっぱって行かれたときもだけど、偶に物凄く怖い目をする。

「なんか、髪とかうつすら濡れてるし。誰かに水でもかけられた? それに左頬、ちよつと赤くなってるよ。叩かれたの?」

「っ!!」

「目もちよつと充血してるなあ。もしかしくなくても、泣いたんだろ

？」

な……なんなの、こいつ。
なんで、そんなことがわかるのよ？！

「あー、凶星？ やっぱりね」

わたしの強張った顔を見て、少年は嬉しそうに笑った。何がそんなに面白いのよ、こいつ……！！

また、急激に目の前の少年への怒りが再燃してきて、顔が熱くなる。ぎりぎり両手を強く握り締めて、大声で怒鳴りつけたくなるのをなんとか耐えた。

「あんたねえっ……」

「じゃ、そろそろ行こっか？」

につこり笑って、少年は椅子から立ち上がった。そして、わたしの中途半端に開いたままの口の中に、残りのナゲット3つをまとめて突っ込んできた。

な、なにすんのよ……！！

「ほ、ひよっよ、はひゃひゅひよよ……！！」

「ははっ、ごめん何言ってるのか全然わかんない」

変な顔ー、と指をさしてけたけた笑う少年を、口の中に詰まったナゲットをほつぺたを目一杯膨らませて咀嚼しながら睨みつける。

こ、こいつはっ……！！ いちいちわたしの怒るタイミングをずらすように行動して……！！

あまりの悔しさに薄っすらと涙まで滲んできたわたしに、少年は憎たらしい、それはそれは綺麗な笑顔を向けてきた。

「ちょうどいいじゃん。俺は今日の予定が潰れて暇、お姉ちゃんも一緒にいた人に水かけられて叩かれて大泣きして暇。で、お昼ごはんもお姉ちゃんに奢ってもらったことだし、お礼にデートしてあげる」

「ひゃふひっへひゅひよよ？」

「その馬鹿面さっさとどうにかしなよ。すごい間抜けに見えるよ？」

——だからさあ、俺が話を聞いてあげるよって言ってるんだよ」

「ひよ……」

「ひよ、じゃなくなつて」

にこにこと綺麗に笑いながら、わたしを思いつき馬鹿にして見下した態度と声で、少年は言った。

「お姉ちゃんが水かけられて叩かれて大泣きした、その原因と過程を聞いて励ましてあげるから、俺とおいでって言ってるの」

ぜ、絶対に嫌っ！！ 馬鹿にする気満々じゃないの、このクソガキが！！

……という抗議の言葉を言う前に、少年に無理矢理、食べ終わった残骸の載ったトレイを持たされて背中を押されて歩き出した、口の中もごもご状態のわたし。

きよ、拒否権なし？！ せめて口の中のナゲット、全部食べ終わるまで待つてよ！！

そう内心で叫びながら、わたしはまたしても、ずるずると少年に引きずられていったのだった。

最悪な休日に見た空の色（昼食×強制編）（後書き）

当初は、4話構成でした。

……………無理！！ 終わらん！！

なので、中途半端ですが、前半部分を。

もう少し、小生意気で口の悪い二人にお付き合いください。

最悪な休日に見た空の色（号泣×暴露編）

ずるずると生意気な少年に引き摺られてわたしが向かった先は、
わたしが初めて来る場所だった。

「……何、ここ？」

「見てわからない？ お姉ちゃん、目が悪いの？ それとも頭が悪いの？ あ、もしかして両方？」

「……………」

むっかつく……！！

「屋上庭園、初めて来たの！」

「なんだ、わかってるんじゃない」

あんたの言い方が、いちいちむかつくのよ、このクソガキ！！
わたしが睨むと、少年はにつこりと嫌味なほどに綺麗な笑顔を向けてきた。顔がいいからっていい気になって……！！

わたしが少年に連れてこられたのは、ショッピングモールの北の端にある大きな遊戯場の屋上だった。

ここは半年くらい前に新しく建てられた施設だ。全部で4階建てで、各階にゲームセンターやカラオケ、ボーリング場、アイススケート場やビリヤードなど、様々な娯楽施設が入っている。それとは別に、広い屋上にはたくさんの種類の木や花が植えられた屋上庭園があり、中には屋上庭園だけを見に来る人がいるくらい、そこは立派な造りをしている。

市街地ではあるものの、周りにあまり高層ビルがないせいで、屋上庭園からの景色は悪いものではない。そういえば、友達がここからは綺麗に夕焼けが見えるって言ってたっけ。

少年はわたしの右手をがちりと掴んだまま（決して手を繋いではないの、手首を掴まれてるだけなの！）、わたしをベンチのある所まで引っ張っていった。

昼過ぎで日差しが強いせいか、人影はまばらだ。遊戯場の中はこれでもかかっていうほど音楽や人の声がうるさかったのに、屋上庭園は酷く静かだった。わたしは少年に促されて、すぐ目の前に転落防止用の高い柵があるベンチに腰掛けた。後ろにある大きな木がちょうど影を作っていたため、日差しに直接さらされることはなかった。

「あんた、ほんとになんなのよ。いきなり人を引き摺ってきて」

「だから、さつきも言っただろ。お姉ちゃんの愚痴を聞いて慰めてあげるって」

……最初は確か「デートしよう」とか言ってなかったつけ？ しかも、なんでわたしがあんたに愚痴らなきゃいけないのよ？！

「だってさー、お姉ちゃん。俺に見捨てられたら、どうすんの？」

「はあ？」

いきなり何言い出すのよ、こいつ。

「なんだか知らないけど、誰かに水掛けられて叩かれて泣いたんでしょ？ 俺に今見捨てられて、その後1人で立ち直れるの？」

「なっ……」

「それで、いつも通りの状態で家に帰れるの？ ……無理だろ、その顔じゃ」

少年の言葉の途中で、わたしの顔が強張ったのが、自分でもよくわかった。少年もそれに気がついて、あからさまに馬鹿にしたような顔でわたしを見た。

その態度にはむかついたけど、確かにこいつの言うとおりだ。夜になれば、家に帰らなきゃいけない……帰りたくないけど。

友達の家に泊まる、という手は使えない。だって、そんなに仲の

良い子、いないから。

わたしは基本的に、友達とは深い付き合いはしていない。だって、みんなに合わすのって、疲れるんだもの。家に帰って、お父さんと一緒にいるほうがずっと楽しいし有意義だ。友達と話したり買い物したりするのも楽しいけど、ずっと一緒にいたいとは全く思わない。話す内容はくだらないことばかりだし、つまらないもの。

そう、わたしは結局、帰らなくちゃいけないんだ。お父さんの待つ、あの家に。

そう考えたら、ぞっとした。咄嗟にわたしの頭に思い浮かんだのは、いつもの優しくてかつこいとお父さんの笑顔じゃない。

レストランで初めて見た、わたしを叩いたお父さんの怖い顔。

腹の立つ少年のせいで忘れていたけど、お父さんはわたしを怒っていた、それも物凄く。

こんなことは初めてだ。お父さんは、いつもわたしの味方だったから、わたしのことをあんな風に怒ることはなかった。それなのに。

ふと思いついて、バッグの中に仕舞い込んでいたケータイを開ける。マナーモードにしていたからわからなかったけど……着信、15件。メールも8件。全部、お父さんからだった。

「あ……」

思わず、小さく声を出してしまった。メールも着信も、わたしがレストランを飛び出してすぐくらいから、かかってきている。それなのに……履歴は途中から完全に途絶えている。

何が書いてあるのか、怖くてメールは確認できない。何を言われるのか、怖くてリダイヤルできない。

……わたし、もしかして、お父さんに見捨てられた？

そう思ったら、鼻の奥がツンとして——気がついたら、涙が出て

いた。

「お姉ちゃんさあ……。よくまあ、俺みたいな年下の子どもの前でいきなり泣き出したりするよなあ。羞恥心とかプライドとか、そういうの、持っていないの？」

心の底からうんざりしたような声で、少年がわたしに冷たいジュースの缶を押し付けた。わたしはそれを有り難く頂いた。だって、このジュース、わたしのお金で買ったものだし！

少年の言葉に忘れかけていた現実を突きつけられて思わず泣き出してしまったわたしを、最初、少年は実に鬱陶しそうに見ていた。でも、わたしがなかなか泣き止みそうになかったからか、無言でわたしの財布を掴むと遊戯場の中へ向かい、自販機で買えるタオルと冷たいジュースを持って戻ってきた。

勝手に人の財布を持って行かないでよ、とか、色々と言いたいことはあったけど、一応それなりに優しい対応してくれたから、文句の言葉は飲み込んで、大人しくそれらの品を受け取った。

「う、うるさいわね……。あんたが酷いこと言うからでしょ?!」

「何が？ 何が酷いの？ ごく当たり前のことしか言っていないけど？」

「……っ」

悔しいけど、その通りだ。わたしが都合よく忘れていただけで、お父さんや十河母子の問題は解決していない。どう足掻いても、わたしがお父さんと2人で暮らしている以上、家に帰ればお父さんと顔を合わせなくちゃならない。……たとえば、お父さんがわたしのことを見捨てたとしても。

ぎゅっと唇を噛んで、また泣き出したくなるのを耐える。これ以

上泣いたら、さすがのこのクソガキも呆れてわたしを見捨てそうだな。こんな生意気なやつに、話を聞いて慰めてもらうなんて、したくない。

でも、今わたしが頼れる人間は、すぐ隣に座ってわたしを眺めている、こいつ以外いない。

友達に、こんな情けない話も聞かせられないし。何より、いつもわたしの一番の相談相手だったお父さんが問題なのだ。なら、話せる相手は、逆にわたしのことをよく知らない相手に限る。

わたしは覚悟を決めて、少年にレストランでの顛末を話そうとして――あれ、と思った。

「あの、ちよつと、今更なんだけど……。わたし、あんたの名前、聞いてないよね？」

「鼻声可愛くないね、お姉ちゃん」

「はなっ……。そういうことはいちいち指摘しなくていいの！ そっじゃなくって、あんたの名前！！」

「人に名前を尋ねるときは、まず自分から名乗りましょう――っていう常識、知ってる？」

む、むっかつくなあ、こいつ！！

ぎりぎりど怒りで頬が引き攣るのを感じながら、わたしは少年を睨みつけて名乗った。

「わたしは遠野真奈美。ついでに言つとくと、高1よ。で、あんたは？」

「真奈美ちゃんとお姉ちゃん、呼び方はどっちがいい？」

「ど、どっちでもいいわよ！ それよりあんたの名前！！」

「んー、別に俺のは知らなくていいよ」

……は？

「何言つてんのよ、あんた」

「だから、別にお姉ちゃんは俺の名前なんか知らなくていいって。どうせ、今日たまたま会っただけなんだから」

「それは、そうだけど。わ、わたしはちゃんと名乗ったのに！」

「お姉ちゃんが勝手に言っただけだろ？ 別に今まで名前知らなくても会話できてたんだから、構わないだろ」

「……それは、まあ、そうだけど……」

「それとも何？ お姉ちゃん、そんなに俺のことを何から何まで詳しく知りたいの？」

変態女、と声に出さずに唇の動きだけで言われて、わたしは思わず「ふざけないでよ！」と叫びそうになって、なんとか堪えた。むむっかつく……こいつ、ほんとにむかつく……！！

真っ赤になって睨むと、少年は目を細めて馬鹿にしたように笑った。こいつ、性格悪すぎ！！ どうやったらこんな悪魔みたいな子どもができるのよ？！

「まあ、俺のことは天使でも悪魔でも、お姉ちゃんの好きなように思ってくれていいからさ」

またもわたしの心の中を読んだようなことを言って、少年はにっこりと微笑んだ。

「さ、いい加減その情緒不安定の原因と過程を話しなよ。あ、でも思い出し泣きはするなよ。鬱陶しいから」

……ほんとにわたしを慰める気があるの？ こいつ。

胡乱に思いながらも、他に相談できる人間もないから、わたしはとにかく今日あったことを話し出した——普通、このくらいの年齢の子に聞かせるような話じゃないけど、こいつが外見以上に精神的に育ってるのは嫌ってほど理解したから、世間一般的な常識とか配慮はとりあえず横に置いて。

死んでしまったお母さんのことも含めて、気がついたら、わたしはお父さんにも言ったことのない内容まで、たくさんのことを少年に吐き出していた。彼は相槌を打つだけで、全く口出しをせずになわたしの話を聞いていた。

そして、全部話し終わって、わたしが一息ついたときに、彼はおもむろに深く溜息をついて、わたしを心の底から馬鹿にしたような呆れたような、うんざりしたような目で見て、

「お姉ちゃん。……お前、いまだき珍しいくらいの大馬鹿者だろ」

と、不愉快そうに口を歪めて言った。

な、なんでよっ？！

最悪な休日に見た空の色（説教×自覚編）

「な、何でよっ?!」

「何でって……馬鹿だとしか言いようがないから。しかも大馬鹿」

「あー、ほんと信じられない、いまどきこんな大馬鹿いるんだー、と心の底から呆れた声で少年は言った。

「な、なんなの?! こいつ、わたしのことを慰めてくれるんじゃないの?!」

わたしは少年のその態度に啞然として、彼を見つめた。

「あー、もう、本当に面倒だけど、説明してあげるよ。順番にね。

まず、お姉ちゃんの亡くなったお母さん……彩加さんだっけ? 彩加さんとお姉ちゃんは見えた目はそっくりなんだ?」

「そ、そうだけど……」

「うん。お母さんとわたしは、顔立ちとか髪質とか、すごくよく似てる。前に、こっそりお母さんの学生時代の写真を見たことがあるけど、今のわたしとよく似ていた。

「……で、お姉ちゃんは、彩加さんをすごい美人で優しい素敵なお母さんって言ってるけど、それって遠回しに自分を褒めてるの?」

「一瞬、言われた意味がわからなかった。一拍おいて、意味を理解して——思わず、怒鳴っていた。

「な、何言ってるの?!」

「なんだ、違うの?」

「当たり前じゃない! わたしとお母さんが似てるのは外見だけよ!」

「家事がとつても得意で、手作りのお菓子とか、お手製の洋服とかを作っていたお母さんと、手先が不器用なわたしとは、比べ物にならない。」

でも、わたしの言葉に少年はつまらなそうな顔をして「ふうん」と言っただけだった。

「ってことはさあ。お姉ちゃん、自分で自分のことを『すごい美人』だと思ってるんだ？」

「……そんなの、見たらわかるでしょ？」

普通、こういう場合は謙遜するかもしれないけど、そんなのはかえって嫌味ってものだ。わたしがお母さん似の美人だって言うのは、写真を見ればわかるし、学校でも1番の美少女だって言われてるんだから。

「で、お姉ちゃんのお父さんも、かつこよくて、仕事ができるいい男なんだ？」

「そうよ。お父さんは、世界一かつこいいんだから！」

「あ、そう。よかったね」

勢いよく肯定したわたしに、少年は天使のような笑顔で心底どうでもよさそうに頷いた。……む、むかつく……！！

「それで、彩加さんは6年前に亡くなって、それからお姉ちゃんはお父さんとずっと2人暮しだったけど、今日お父さんの再婚相手の母子と会食があった。それで、お父さんがわざわざ娘に勇気をもつて紹介した再婚相手が気に喰わないからってお姉ちゃんが馬鹿した挙句、未来の弟に水ぶっかけられて、お父さんに叩かれて、お姉ちゃんも逆ギレして逃げ出した、と。……馬鹿じゃねえの？」

断定口調でもう一度「馬鹿じゃねえの」という少年に、一気に怒りが湧いた。だからなんで、わたしが馬鹿なのよ？！

「馬鹿だから馬鹿だって言ってるんだよ。とりあえず黙って俺の話を聞け。お姉ちゃんも俺に聞かれたことだけ答えろ」

もう一回怒鳴ろうとした瞬間に、ぞつとするような冷たい目で言われて、思わず黙ってしまった。な、なんなの、その小学生らしか

らぬ迫力は？！ こいつ、時々怖すぎる！

「あのね、お姉ちゃん。お姉ちゃんが美人だつて言うのは、お姉ちゃんが自分でそう思つて、周りもそう認めてるならいいんだよ、別に。俺もお姉ちゃんの顔を見て、ブスだとは思わないから。でも、それだけじゃん」

「は？」

な、何？ わたしのことを褒めた……？ かと思つたら、それだけつて？

「ああ、俺はお姉ちゃんのことを褒めたわけじゃないからね。お姉ちゃんの見た目に対するただの感想を言っただけ。で、『それだけ』の意味がわかつてないだろうから言つけど、お姉ちゃんは見た目だけだよ」

……？ 言つてる意味が、全然わからない。

「だからね。俺は、こう言つてんの。——お前には見た目以上の価値なんかないんだよ、バーカ」

「……っ！！」

声を低くして冷たく言われた言葉に、硬直した。言葉の意味を理解して、すうっと体が芯から冷えていく。

「……つて言つたら、ちよつと言いすぎだけど」

につこり笑つて明るく言つと、少年は唐突にわたしの右手首を左手でぎゅつと掴んだ。

「お姉ちゃんさあ、自分で自覚してないだろうけど、客観的に見たらただのワガママ自己中女だよ。言われたことない？ 『ワガママ』とか『自己中』とか、『顔が可愛いからつていい気になつて』とか」

いきなり掴まれた右手に動揺しながら、わたしは頷いた。

小さい頃から、クラスの子や学校の先生に何度も言われた言葉。

でも。

「で、その度にお姉ちゃんはいり返して、相手を黙らせるわけだ。

『わたしに嫉妬してるだけでしょ?』とか言って」

思わず、ぎよつとして彼の顔を見る。少年はにっこり笑顔で、しかし口調は相変わらずわたしを馬鹿にして見下したままだ。

……なんで、そんなことがわかるの?

まじまじと見つめていたら、少年はちよつと首を傾げて「でもさあ」と言った。

「中には途中で黙って、お姉ちゃんと話すのやめた子もいただろ?」
いた。その言葉に、無言で頷く。

途中で何もわたしに言い返せなくって、泣き出して、黙ってしまった弱虫な子たち。

「そういう子はさあ、わかったんだよ。お姉ちゃんは自分が絶対に正しくて、他の子のことを自分より格下に見てるから、何を言ってもわかってもらえないってことが。全然話を通じないんだから、そりゃ泣きたくもなるよね。おまけにお姉ちゃんに嫉妬のせいでしょ、とか言い切られちゃったら、もう黙るしかないよねえ。別に気にしなくていいのにな、そんなこと」

少年の言っていることの意味がまた、わからない。

だって……だって、あの子たちは、所詮、わたしに嫉妬してるだけだし。

人に嫉妬するなんて恥ずかしくて醜いことをする子たちだもん。

しかも、友達面して。

性格が悪いのは、むしろあの子たちの方だ。

しかし、少年はわたしを冷たい目で見たまま、言葉を続けた。

「お姉ちゃんは他人に鈍感だから、わかんないのかもね。いや、自分が最高に素晴らしい存在だと思ってるから、わかんないのか。あのね、どんなに仲が良い友達同士や家族でも、自分より優れている人間に嫉妬するのは当たり前のことなんだよ。

ん? 何変な顔してるの、お姉ちゃん。よく考えてみるよ、別に

おかしいことじゃないだろ。自分より出来のいい人間に嫉妬するのは、プライドのある人間なら当たり前のことじゃん」

……言われてる意味が、また、よくわからない。

だって、あの子たちより、わたしの方が可愛いもの。頭もいいし、運動もできるし。わたしはあの子達を格下に見てるつもりはないけど、実際には、見下していたのかもしれない。でも、それは仕方ないでしょ？

「あのね、お姉ちゃん。何考えてるのかは、その不思議そうな顔を見たら大体わかるけど。つまり、お姉ちゃんは、自分が思ってるほど素晴らしい人間じゃないんだよ。むしろ、他人に嫉妬を抱けないほど自分が最高で素晴らしいと思ってる、ただの周りが見えていない自分大好き人間なの」

につこりと笑って、少年は言った。つまりお姉ちゃんは、いわゆるナルシストってやつかな、と。

その言葉に、わたしは驚いて、困惑した。だって、だって……！

「……わ、わたしは別に、自分のこと、素晴らしいとか、そんな風には」

「思ってるかい？ ……嘘つき」

冷たい目をして綺麗に笑った少年の、わたしの右手首を掴む左手の強さが強くなる。

「思ってるよね？ お姉ちゃんは自分で自分は完璧だと思ってる。お父さんのこともね。」

——でも、それは違うよね。素晴らしい人間っていうのは、むやみに他の人間のことを見下したりはしないよ。お姉ちゃんは自分のことしか見てなくて、周りが見えてないだけ。いや、見ようともしていないだけ。お姉ちゃんは自分の意見をちゃんと出して、それを貫いてるだけだ、とかなんとか、自分に都合のいいように解釈してるかもしれないけど、それは違うよ。お姉ちゃんは自分が最高で、

他の人に言つたとおりにしたくないだけだよ。だから、周りと協調しなくちゃ駄目なときにそうはしないで『ワガママ』を言つんだ。自分の都合しか考えてない『ワガママ』をね」

違う。わたし、そんなこと思つてない！

そう言つべきなのに、何故だか口が動かなくて、少年の顔をただ見つめることしかできない。

彼は綺麗な顔で笑つたまま、馬鹿にした口調で続けた。

「お姉ちゃんさ。俺のこと、何回も『顔は綺麗なのに口が悪い』とか、思つただろ？」

うん。ついでに性格も悪いと思う。

この質問には、はつきりと頷いた。その瞬間、ピクリと少年の形のいい眉が不愉快そうに動いたけれど……こ、心の中、読んでないでしょうね?! なんてちょっと視線が怖くなつてるの?! ちよつとあんたの性格が悪いって思つただけじゃない!

「俺はいいんだよ、自分でわかつててやってるんだから。でも、お姉ちゃんは駄目だよな。自覚なしにやって、そのせいで周りの人間に『見た目はいいのに口と性格が悪い』って思われてるんだから。お姉ちゃん、どうせ仲の良い友達もいないだろ? 当たり前だよな、俺だつて心の中じゃ『わたしとあんたじゃ釣り合わないわー』とか思つてるような女と仲良くはしたくない。お姉ちゃんのことだから、友達というよりお父さんという方が楽しい、とか思つてるんだろ?」

ぐつとつまる。その通りだ。

友達というより、お父さんという方がいい。だって、他の子は、わたしに釣り合わないんだもの。

……あ、あれ? でも、これって……。

「でも、そういうのって、相手にもちゃんと伝わってるんだよね。お姉ちゃん、良い意味でも悪い意味でも素直だから、すぐに態度に出しちゃうし。そもそも隠す気、ないだろ？ そうだよな、相手は常に自分より劣ってるんだから。いくらでも偉そうな態度を取れるよな。基本的にお姉ちゃんの側にいるのは、お姉ちゃんに甘い父親だから、ろくに注意もされないし」

お父さんは、わたしのことを大事なお姫様って言う。

わたしが、お母さん似の美人で、頭もよくて、優秀だから。

お父さんの、自慢の娘だから。

「お姉ちゃん、分かりやすいからね。だからまあ、お姉ちゃんが友達にしてあげている」友達も、お姉ちゃんのこととはそんなに好きではないだろうね。というか、むしろ相手の方がお姉ちゃんの「友達をしてあげている」んじゃないのかな？ お姉ちゃん、学校でも目立ってそうだし。見栄えのいいハリボテ扱いされてるんじゃないのかな」

友達は、「真奈美って可愛いよね」っていつも言う。

だって、わたし、モテるから。学校とか、街とかで、男の子が声をかけてくるのは、わたしがいるから。わたしは勉強だって、できるから。テスト前は、仕方なくノートを貸してあげる。友達は、わたしよりも頭が悪い子ばかりだから。

「あのさあ、お姉ちゃん。自分が普通に日常会話で人を見下す態度を取ってんの、気づいてた？ 俺の言動にだいぶん苛ついてたみたいけどさ、お姉ちゃんも同じことを俺にしたよ。俺だけじゃないね。今日会ったっていう、お父さんの再婚相手の人たち。学校の友達。色んな人に、してるよね。俺と違って、当然のように、さ。俺

はわざとお姉ちゃんを怒らせようとしてやった部分もあるけど、お姉ちゃんは全部、自分が正しいって思ってたやっただろ？」

そう、こいつの言葉とか、態度とか。今もだけど、すごく……癪にさわるっていうか、イライラする。むかつく。見下されて、馬鹿にされて。

でも、それに言い返せない自分が、もつとむかつく。

だって、わかったから。……わたし、もしかしくても、すごく、嫌な性格の子だったのかも。

「俺もさあ、外見であれ能力であれ、自分に自信を持つのはいいことだと思うよ。それに、プライドって大事だからね。自分をより高めるためには、さ。でも、お姉ちゃんは自分を高める必要はないって思ってるだろ？ 極端に人を見下すことに思考が片寄りすぎてるから。自分自身が最高なんだよ、お姉ちゃんは」

冷たい声と馬鹿にしたような口調で、少年は冷静にそう言った。

わたしは。

わたしは、何か言い返さなきゃ、と思ったけど、何も言葉が頭に浮かんでこなかった。

だって、彼の言う通りだったから。

だって——だって。お母さんも、お父さんも、綺麗で、頭がよくて、人気があつて……2人の娘のわたしも、同じくらい優秀じゃなきゃ。お父さんとお母さんにふさわしい、『カリスマ家族』にふさわしい子どもでいなくちゃ、いけなかった。

お母さんが死んだからって、いつまでもぐずぐず泣いているばか

りの子どもじゃ、駄目だった。

お父さんは、泣いてたから。それでもわたしのために、頑張って笑顔でいてくれたから。

だから、わたしはいい子じゃなきゃいけなかった。綺麗で、頭がよくて、運動神経も抜群で、自分の意見をしっかりとって。

「母親がいないから」って、他の人に言われるような子じゃ、駄目だから。死んでしまったお母さんと、仕事で疲れてるのに、わたしを一人で育ててくれたお父さんに、悲しい思いをさせたくないから。

他の子なんて、わたしよりも格下の存在だった。馬鹿な子ばかり。でも、絶対に負けるわけにはいかなかった。お父さんを失望させたくなかった。

お父さんに、嫌われなくなかった。

お母さんが死んでから、わたしはお父さんの重荷でしかなかったから。

夜になると悲しくて、お父さんに泣きついていた。お母さんの料理が食べたいって言って、困らせた。授業参観に来てもらえなくて泣き喚いだ。

それでも、お父さんに「大事なお姫様」って言うてもらったためには、わたしは……わたしは、「素晴らしい子」でなければならなかった。そう、思い込んだ。わたしは、凄いんだって。お父さんとわたしは、凄いんだって。そう、思い込んだ。

お父さんに、嫌われなくなかった。

1人つきりに、なりたくなかった。
それだけ、だった。

呆然としているわたしに、少年は小さく笑った。馬鹿にしたような、呆れたような、優しいような。不思議な笑みだった。

「お姉ちゃんってさあ、ほんと、甘やかされて育てられた世間知らずって感じ」

少年は、実に嫌みな口調でそう言った。

わたしは、何も答えられなかった。

「あのさ。俺が言うのもなんだけど、そりゃ、片親しかないっていうのは、世間一般的に、理由もなく差別されることもあるよね。馬鹿馬鹿しいことだけど、父親しかいないとか、母親しかいないとか、そういうだけで、色眼鏡でみてる人間は、いるよね。お姉ちゃんが、そういうのが嫌で、頑張って生きてきて、そのせいで自分大好き人間になっちゃったのは、仕方ないかもね」

わたしの手首を掴んでいる手の力を弱めて、びっくりするほど優しい声で、少年が言った。

わたしは黙って、彼を見た。

長い睫に縁取られた、彼の綺麗な、茶色い瞳。不思議な強さがある瞳。

「でもね。お姉ちゃん、お父さんが好きすぎるあまりに、ちょっと勘違いしてるよ。お姉ちゃんのお父さんは、お姉ちゃんが母親似で、頭がよくて、優秀な子だからお姉ちゃんのこと大事なわけじゃないんだよ。お姉ちゃんが、自分の娘だから大事なんだ。完璧な人間を求めているわけじゃない。お姉ちゃんが、お姉ちゃんであることが大事なんだ。でなきゃ、自意識過剰で傲慢で我儘で甘えつたれで泣き虫の口の悪い世間知らずで協調性皆無な鈍感人間のお姉ちゃんを『お姫様』呼ばわりなんてしないよ」

.....なんだろう、この気持ち。

天使のように優しく慈悲深い声音と表情で慰められていたはずなのに、そしてそれにわたしもちよっと感動してたのに、最後にその顔と声のまま、物凄い暴言を吐かれた気がする。いや。暴言、思

いつきり、吐かれた。ぼろくそに言われた。

殴りたい。

今までで1番、こいつを殴りたい。

というか、いい加減わたしのことを慰めたいのか怒らせたいのか、はつきりしてほしい…………。

「だからさ、もつと落ち着いて周りをよく見てみなよ。まあ、外見で人を判断するのは、原始的な自己防衛本能に基づく判断としては間違いではないけどな？ 人間、実際に話をして、付き合ってみなくちやわからないこともいっぱいあるんだから。今日お姉ちゃんが会った、再婚相手の人たちも、ね。お姉ちゃんのお父さんだって、会ってすぐにお姉ちゃんが打ち解けてくれるとは思ってないよ。再婚に反対するかもしれない、くらいはそりゃ、考えてるだろうよ。でも、その人たちはお姉ちゃんのお父さんが家族になりたいって思った人たちなんだろう？ ろくに話もしないで嫌がるべきじゃないよ。お姉ちゃんのとった態度に1番傷ついたのは、多分、お姉ちゃんのお父さんだと思うよ？」

わたしは、殴りたいのを堪えつつ、黙って少年の優しい顔を見つめた。

じわり、と涙が滲んできそうになるのを、必死で堪える。

そうだ。お父さんは、前々から、何度もわたしに十河由里のことを紹介しようとしていた。

それを曖昧な態度で避けていたのは、わたしの方だ。そのくせ、「お父さんには幸せになつて欲しい」なんて思ってた。お父さんが再婚しないことに安心しながら、お父さんに恋人ができておかまわない、とも思っていた。お母さんに先立たれて悲しんでいるお父さんを支えてくれる人が、わたし以外にもほしかった。

十河母子に、暴言——あときはそうは思わなかったけど、今な

ら分かる——を吐いたわたしを、初めて叩いたお父さん。

すごく怖い顔をしていたけど……傷ついたのかな。わたしの態度に。だから、あんな風に怒ったのかな。

「それに、お姉ちゃんのお父さん、きつと今ごろ後悔してるよ」

「え」

「え、じゃなくてさ。だって、お姉ちゃんをこれだけ我儘自己中女に育てるような人だろ？ 絶対娘を溺愛するタイプの父親じゃないか。そんな人が、いくらお姉ちゃんが悪いからって、娘を叩いて後悔しないわけないだろ？」

「……そ、そうかな……」

我儘自己中女、というのには言い返したかったけど、ぐっと堪える。それよりも、お父さんが後悔してるって言う言葉が気になった。「そうだよ。大体、お姉ちゃんくらいの年齢の女の子って、普通は父親とは距離を置くだろ？ それをしないで自分を慕ってくれてる娘のことを叩いて、平気なわけないよ」

「……そうかな」

「そうだって」

自信満々に言い切る少年は、わたしを見て、馬鹿にしたように笑った。

その綺麗な笑顔が、憎たらしいけど、なんだか安心する。

わたしって、すごく嫌な子、だったのかな。

そうなんだろうな。

そもそも、十河由里とお父さんが、どうして付き合いだして、再婚するまで愛し合うようになったのか、それも知らないんだ。

ぱつと見は、ただのおばさんだったけど。でも、離婚したって言うていたから、圭太を抱えて、1人で仕事をしながら子育てしてるんだ。うちの家みたいに死に別れたわけでもないから、周りに嫌なことを言われたこともあるんじゃないかな。……あ、いや、わたし

も言っちゃったけど。すごく、失礼なこと。

馬鹿だなあ、わたし。

「お母さんがいなくて可哀相」って言われるのが嫌なのは、わかるのに。なんで、十河由里たちのこと、あんなに馬鹿にしちゃったんだろう。

別れた夫とよりを戻せ、なんて、すごく失礼なことを言った。他にも、鏡を見る、とかさ。圭太が怒るのも、当たり前かもしれない。わたしだって、お父さんのこと、馬鹿にされたら怒るもの。

……わたしとお父さんは、「普通」の家族なのに。父と娘だけの家庭だけど、お母さんが死んじゃったけど。特別なことなんて、何もないのに。

十河母子だって、母子家庭だけど、「普通」の家族なのに。何も、悪いことも、変なこともないのに。

わたしが偉そうに言えることなんて、何もなかったのに。

馬鹿だなあ、わたし。ほんと。

ちゃんと、お父さんたちと向き合ったらよかった。周りの友達と、もつとまともに付き合えばよかった。

まだ、間に合うのかな、わたし。

「大丈夫。まだ間に合うよ」

少年は、わたしを見て、優しく笑う。ほんとうに心の中の声が聞こえているみたいに。

「……ほんとに？」

「うん。お姉ちゃんが、お父さんと、再婚相手の人たちに、真剣に、心から謝ったらいいんだよ。一回で許してもらえなかったら、何回

でもね」

「……わたし、実は、人に謝ったこと、あんまりないの」

「あー、だろうねえ。見たらわかるよ。でも、できないことじゃないだろ？　ここから地上に飛び降りるよりかは簡単だ」

「当たり前でしょうが！」

楽しそうに言う彼に、つられて笑う。

ああ、いやだなあ。

結局、こいつに慰められるどころか、説教までされてしまった。

こんな、年下のクソガキに。

でも、こいつに事情を話す前より、ずっと心の中が軽くなっている自分に気がついて、わたしは苦笑した。

ああ、どうしよう。

顔は綺麗だけど、口も性格も悪いのに。

こんな年下のクソガキに、わたし、ちょっと惹かれている。

最悪な休日に見た空の色（夕日×再会編）

「さあ、夕日が全部沈む前に戻らなきゃ。約束したよね？」

わたしの返事を待たずに、少年は掴んだままのわたしの右手を引きずって歩き出す。

全然、人の言うこと聞いてくれない。……むかつく。

少年に引きずられながら振り返って、さっきまで2人で眺めていた夕日を見る。

……綺麗な色。

「そんなに夕日が見たいのなら、また見に来ればいいじゃん」
わたしの方を見ないまま、少年が素っ気無く言った。

「今度は4人で、さ」

……ほんと、むかつく。

それに、悔しい。わたしばかり、こいつと離れるのが嫌だっ
思ってるみたいで。

ほんとに、むかつく。

少年に散々馬鹿にされてボロクソに貶されて説教されて慰められ
た（……んだよね？ 多分。自分のことなのに、いまいち慰められ
たという自信がもてない……）後、わたしは少年と色々なことを話

した。

何故か、正しい土下座の仕方や謝罪の仕方のレクチャーをされたけど……馬鹿にされてたのかな……。それにしても、少年の目が真剣だったけど。

とにかく、わたしと少年は夕方まで、屋上庭園にいた。

相変わらず、少年はわたしのことを馬鹿にしきった態度で、見下したような目で見てきたけど。

でも、楽しかった。あの、心底むかつくクソガキと話をするのは、本当に楽しかった。

馬鹿にされて貶されて鼻で笑われる内に、だんだん少年の態度にも慣れてきた。

……わたしは、別にマゾでもシヨタコンでもないわよ？！

ただ、わたしに対して遠慮なんて一切なしで、真正面から鋭く感情を叩きつけてくる彼との会話が、なんだかとても心地よく感じられただけ。

少年は、優しくない。自分の思ったままを、わたしにわかりやすいように、真っ直ぐにぶつけてくる。絶対にわたしに言い負けない。

強いなあ、と思った。

どうやったら、こんな小さい子が、ここまで人の感情の機微に鋭くなれるんだろう。おまけに語彙も知識も豊富だし。年上の女の子に全然怯えないって、どうなの？という家庭環境にいるんだらう、この子。

そう思っ、家族のことを尋ねてみたら、

「……………別に、普通だけど？」

長すぎる空白の後、あからさまに視線を逸らして答えられた。ものすごく気になったけど、怖い目で睨まれて続きは聞けなかった。

あの迫力も、何なのかなあ…。

でも、楽しい時間が過ぎるのは、あつという間だった。

やがて空が赤らんでくると、少年はケータイを取り出して、何やら物凄いスピードで指を動かした。お姉さんと連絡をとってるのかな、と思って見ていると、あっさりとした声で、

「もうすぐ、時間だから。俺、帰るけど？」

と言われて、思わず「え?!」と聞き返してしまった。

「え、じゃなくってさ。最初から、俺の暇潰しにデートしてね、っていう約束だっただろ？」

「え。デ、デートだったんだ、やっぱり……」

いや、明らかにデートらしいこと、全然してなかったけど。

そう思いつつ、ケータイから目を離さない少年の綺麗な横顔が寂しくて、わたしは彼になんとも言えないでいた。

まさか、口も性格も悪いけど、見た目は小学生のこいつに、「もう少しここに一緒にいて」とは言えなかった。まだ、家に帰ってお父さんたちに会う決心がついてないから、一緒にいてほしい、とも言えなかったし。

そうしたら、ふっと少年は顔を上げて、私を見て、にっこり笑った。綺麗な綺麗な、天使みたいな笑顔。わたしじゃなくても、あんなに綺麗な笑顔の子がいたら、見とれちゃうに決まってる。

「馬鹿面さらしてるお姉ちゃん。そんなに俺と離れたくないの？」

優しい声で嫌味ったらしく言われて、内心どきつとした。返事を返せないでいると、少年は「ふーん？」と呟きながら、じろじろとわたしを見つめた後、

「ま、いいよ。じゃあ、もう少しだけここにいようか。ここからだったら、夕日が綺麗に見えるしね」

そう言って、優しく笑った。

綺麗な笑顔だった。本当に、すごく優しくて、無邪気な笑顔だった。

その笑顔に、わたしの胸の奥がきゅんとなったのは、絶対に気のせい。

こんな、年下の口も性格もクソガキに、ときめいたなんて。

絶対に、気のせい。

……………そう思い込むことにした。どうせこのまま別れて、もう2度と会わないだろうし、ね。

わたしは少年と、黙って空を見つめた。さっきまで綺麗な青空だったそこは、だんだんと赤い色に塗りつぶされていく。

今日は、最悪な休日だった。

でも、今は、そうでもない。

綺麗な空を、綺麗な少年を見ながら、わたしは涙がこぼれそうになるのを、ぐっと堪えた。

黄色、赤色、橙色。

色んな暖かい色が混ざり合ってできた綺麗な光が、わたし達を照らしていた。

「綺麗だね」

「うん……」

夕日が赤いって言うのは、嘘だ。

こんなにたくさん色が混ざってるのに、ただ赤いだけに見えるなんて、皆、目が悪いんだ。

「夕日が全部沈む前に、帰ろうね」
「……うん」

わたしの返事に、少年は微笑んだ。

わたしの右手を握るでもなく、ただ掴んでいるだけの彼は、眩し
そうに目を細めて夕日を見つめた。

あと少し。

あと少しで、奇跡みたいに楽しかったこの時間と、お別れだ。

「……信じられない……」

あの最悪の休日から、1か月後の休日。わたしは1か月前に1人
で怒って逃げ出した、例のレストランの一室にいた。

あの日、駅で少年と別れたわたしは、勇気を出してお父さんに電
話した。

お父さんは、かつてないほど意気消沈した声で、電話口で一番に
「真奈美、頼、大丈夫か？」と聞いてきた。少年の言ったとおり、
お父さんはわたしを叩いたことを、とつても後悔していた。

そして、驚いたことに、お父さんと十河母子が、すぐに駅にわた
しを迎えに来た。3人とも、店を飛び出していったわたしのことを、
ものすごく心配していたらしい。

そして……、わたしを出迎えたお父さんと十河圭太は、なんと、

既に十河由里から鉄拳制裁を食らっていたのだ。

お父さんの右頬は真っ赤に腫れ上がっていて、せつかくのかっこいい顔が台無しだったし、圭太は拳骨を食らって頭に小さなたんこぶを作っていた。わたしが店を飛び出した直後、わたしのことを叩いてしまったせいで呆然としていたお父さんを、十河由里が「女の子の顔をぶつなんて、何事ですか！」と言って左ストレートを決めて吹っ飛ばした後、圭太に「女の子の頭に水をかけるなんて、あんた何やってるのよ！」と拳骨を食らわせたらしい。

十河由里は、大人しそうな外見からは全然想像できない、びつくりするほどパワフルな女性だった。そして、わたしよりも、ずっとずっと大人で、「母親」だった。

わたしはほとんど土下座しながら、泣きながら3人に謝ったんだけど、十河由里はわたしの拙い謝罪の言葉を、最後まで真摯に聞いてくれた。

そして、

「ちゃんと謝ってくれて、ありがとう」

そう言って、わたしのことを優しく抱きしめてくれた。ぽんぽんと背中をあやすように撫でながら、「すぐにじゃなくていいのよ」と言った。

「私のことも、圭太のことも、すぐに受け入れてくれなくていいの。これから、少しずつ会って、ゆっくり決めてくれたらいいのよ。真奈美ちゃんが、私たちと家族になってもいいかどうか。私は彩加さんから真奈美ちゃんを取ろうなんて思っただけから、真奈美ちゃんが私のことを母親だと思うのが無理なら、別にいいのよ。でも、今すぐに全部を決めないで欲しいの。私も圭太も、真奈美ちゃんとは今日初めて会ったばかりでしょう？ 色々な話をして、もっと仲良くなりたいの」

優しい声に、わたしは頷いた。十河由里は、優しかった。わたし

が混乱しないように、とても配慮してくれた。物凄く失礼なことを言ったわたしを、笑って許してくれた。

その日は、晩ご飯を4人で一緒に食べて、わたしは十河由里とケイタイのメアドと電話番号を交換して別れた。ちよつとずつでいいから、彼女のことを知りたいと思ったから。

——そして、一か月経った、今日。

「ごめんね、真奈美ちゃん。黙ってて」

わたしの正面の席に座って、本当に申し訳なさそうに、わたしに謝る十河由里。今は、わたしは彼女のことを由里さんと呼んでるんだけど、わたしは由里さんの方を見ずに、ひたすら彼女の隣の席に座っている、綺麗な綺麗な美少年を凝視していた。

わたしの隣の席に座っている圭太はきよとした顔で、美少年とわたしの顔を交互に見つめている。

「純と真奈美姉ちゃん、知り合いなの？」

「まあね」

心底不思議そうな顔の圭太に、「ジユン」と圭太に呼ばれた美少年はニヤリとして答えた。

……………ほんつとうに、信じらんない！！！！

あの日から、わたしは由里さんと毎日電話やメールで話をした。

圭太とも。

圭太は最初に会ったときに、わたしが由里さんのことを散々貶したから、初めはわたしと会話するのも嫌そうにしていたけど、ちゃんと謝ったら、少しずつ打ち解けてくれた。最初は頭の悪そうなガキだと思った圭太だけど、話してみると、年相応ですごく可愛い子だった。ちよつと恥ずかしそうに、でも嬉しそうにわたしのことを「真奈美姉ちゃん」って呼ぶのが、たまらなく可愛い。お互い一人っ子で、兄弟に憧れていたから、わたしも圭太のことがすぐに好き

になった。最近では、「真奈美姉ちゃん、今度、一緒に遊ぼう？」なんて可愛いことを、もしもじしながら言ってくる。もう、本当に、圭太は可愛い子だった。

そんな、素直で可愛い圭太を、彼の父親は密かに虐待していたらしい。

圭太がまだ2歳くらいの時のことだったそうで、本人はあんまり覚えてないみたいだから、圭太にだけは内緒にしてね、と由里さんはわたしに言った。

由里さんは現在、とある警備会社に勤めていて、SPのような仕事をしているそうだ。会社の社長さんとか、そういう偉い人を、さりげなく悪者から守る仕事だって言ってた。

彼女がわたしのお父さんと初めて会ったのも、お父さんが残業で帰宅が夜中になってしまった帰り道に、柄の悪い男数人に囲まれて殴られそうになっていたところを、たまたま通りかかった由里さんが助けたのが始まりだったそうだ。人は見かけによらないっていうか……次々と男たちを華麗に投げ飛ばす由里さんに、お父さんはすっかり魅了されてしまったらしい。道理で、由里さんに殴られたお父さんの右頬が物凄く腫れ上がったいたわけだ……。女の人でも、最近、強い人は強いものね。

それで、由里さんは仕事の関係上、当時、長期出張中だったそうだ。でも、圭太のことが心配だったから、彼女は同僚に頼んで、早めに家に帰ってきた。そこで由里さんが見たのは、父親に食事をろくに与えられず、放置されてぐったりとしていた圭太だった。

由里さんの夫は当時、運悪く勤め先が倒産してしまって、求職中だったそうだ。でも、自分が面倒を見るから大丈夫だと言って、由里さんを出張に行かせた。近所でも評判のいい、子煩悩なお父さんだったそうだ。——表向きは。

本当は、男で夫である自分より、女で妻のくせに稼ぎのいい由里さんが、憎くて仕方がなかったそうだと。そして、その由里さんに懐いている圭太も、同じくらい憎かったんだって。

信じられない、と思った。そういうの、テレビのニュースの中でも、知らなかったから。でも、その日以外にも、その男は圭太を密かに怒鳴りつけたり、わざと食事を減らしたりしていたらしい。

由里さんは、それが原因で離婚したそうだと。すぐに圭太の状況に気づいてあげられなかった自分を責めて、一時期自殺にまで追い込まれたけれど、職場の同僚の人たちの励ましで、なんとか立ち直ったらしい。

由里さんは結局、夫のことを、警察には通報しなかった。一応、会社の社長と懇意にしている病院に圭太を入院させて、それで夫を警察に突き出そうとはしたらしい。でも、できなかったんだそうだと。なんでかっというのと、由里さん、本気で怒って、夫を「ぐちゃぐちゃ」にしてしまったらしい。警察に通報したら、逆に由里さんが捕まる！って会社の同僚の人たちが止めて、ついだにその後自殺未遂に走った由里さんを必死に押さえ込みつつ、夫を強制入院。全治6ヶ月だったそうだと。

そついう、本当なら隠しておきたい過去を、由里さんはわたしに教えてくれた。あ、うん、「ぐちゃぐちゃ」の具体的な部分はあえて詳しくは聞かなかったわ。怖いから。でも、圭太を傷つけた奴だから、むしろ当然の制裁よ！

わたしも、由里さんに色々な話をした。そして、あの休日にあつた、顔はいいけど口と性格の悪い少年の話をした後、由里さんは奇妙な沈黙の後、わたしにある提案をしてきた。

お父さん抜きで、由里さんと、圭太と一緒に、昼ごはんを食べない？って。

わたしは勿論、即OKしたんだけど。

……だけど、ね？

「お姉ちゃん、あんまり睨まないでくれる？」

な・ん・で、こいつがここにいるのよ？！

もう、絶対に、2度と会わないって思ってたのに！！ その、「お姉ちゃん」の嫌味ったらしい、人を見下したイントネーション、やめてっばー！！

わたしがあんまり怖い顔をしていたせいか、圭太が怯えたようにわたしの服の袖をひっぱって、「どうしたの？」と心配そうに聞いてきた。

可愛い。圭太は可愛い。そりゃ、顔の造りはわたしの目の前にいるクソガキの方が断然いいけど、圭太だって、結構整った顔立ちをしてるし、何より素直でいい子だ。ちょっと乱暴な言葉遣いも、クソガキよりは全然まし。年相応で、可愛いものよ。

ああ、天使っていうのは、圭太にこそ似合う言葉よね。
間違っても、この目の前の、ニヤニヤとわたしを見て笑っているクソガキに似合う言葉じゃないわ！！

「純、『お姉ちゃん』って……？」

「ああ。名前で呼ぶのが面倒くさかったから、そう呼んでただけ。気にしなくていいよ」

「ふうん……」

なかなか答えないわたしに、圭太はクソガキの方を向いて話を始めた。わたしは由里さんに視線を走らせて、低い声で聞いた。

「一体、どういうことですか？　なんで、このクソガキが、ここに」「クソガキって。相変わらず口が悪いなあ、ま・な・み・ちゃん」

「なっ!!」

心の底からむかつく言い方で、クソガキがわたしに言った。真っ赤になって奴を睨むと、由里さんが溜息まじりに、「とりあえず、お話のご飯を食べながらね」と言った。うつ……、一体、どうなってるのよ……。

圭太はクソガキとゲームや学校の話をしながら、もぐもぐと料理を食べている。わたしも料理を口に運びつつ、由里さんを睨んだ。

「で、どういふことなんですか？」

「……うーん。なんていうか……。彼、木崎純君って言うんだけど。私と部署はちよつと違うんだけど、同じ会社に勤めている方の息子さんで、圭太と同級生なの」

なるほど。こいつ、「キザキ ジュン」って名前なのね。うん、似合ってるかも。どんな漢字をあてるのかは、わからないけど。

……じゃなくって。

「圭太と同級生なのは、見てたらわかるわ。そうじゃなくて、どうしてこいつがここにいるの？」

「えーっと。あのね、ひと月前の、あの日。本当なら、私たちは真奈美ちゃんと隆司さんとお昼ご飯だけ一緒に食べて、すぐにお別れする予定だったのよ」

「……うん」

「なんでお昼だけだったかっていうと、私が次の仕事でちよつとお世話になる臨時協力員さんがいるんだけど、その人と打ち合わせをしなくちゃいけなかったからなの」

「……うん？」

「で、その臨時協力員さんっていうのが、彼」

そう言つて、由里さんはパスタを優雅に食べているクソガキ……じゃなくて、「ジュン」を示した。

「……………は？」

いや、そいつ、小学生でしょ？

ぽかんとしている私に顔を寄せて、ごく小さな声で、由里さんは言った。

「あのね。純君と半日一緒に過ごした真奈美ちゃんなら分かると思うけど、彼、年の割にすごく成熟してるし賢いでしょ？」

「う、うん……。それは、そうだけど……」

「それだけじゃないの。純君、コンピューター関係、物凄く強いんだよ。詳しくは言えないけど、その……『コンピューター語』が完璧って感じなの。難しいプログラムをあつという間に構築しちゃうし、逆に物凄く厚いセキュリティを、簡単にすり抜けたり、破ったりできるの」

「へ……？」

「だから純君は、非公式の、うちの会社の臨時協力員さんなの。……それでね、彼がひと月前のあの日、真奈美ちゃんに会ったのは偶然らしいんだけど。真奈美ちゃんの独り言を聞いて、それが私と圭太に関係あることだってわかったみたい」

「は……？」

「真奈美ちゃんと接触した後、すぐに私の仕事用の携帯に純君からメールで連絡が入ったわ。彼とは駅で会う約束をしていたから。簡単に事情を説明したら、純君が、真奈美ちゃんは今、すごく混乱して情緒不安定だから、自分が落ち着くまで一緒にいるって」

「え？」

「それから、一定時間ごとに純君から連絡がきたの。今、ご飯を一緒に食べてる。真奈美ちゃんは食欲はあるよ、よかったね、とか。今、屋上庭園で一緒にいるよ、真奈美ちゃんはもう落ち着いたし、叩かれた頬の腫れもひいてるよ、とかね」

「……………」

あの日、「ジュン」が度々メールを打っていたのは、そういうことだったの……。

わたしは呆然として、由里さんを見た。

正直、まだ頭が話に追いついてこないけど、「ジュン」がとんでもなく凄い子だっていうのは分かった。

「黙ってて、本当にごめんなさい。でも、純君に口止めされていたから」

そう言っ、本当に申し訳なさそうに、由里さんはわたしに謝った。

う、うん……。えっと、こういう場合、わたしは怒ったらいのかしら。でも、「ジュン」のおかげで、わたしはちゃんとお父さんたちに謝れて、今、ここにこうしているわけで。

……一応、「ジュン」に感謝……はしてるから、怒る気はない。

でも、なんていうか、なんていうか……。

わたしは、ちらっと「ジュン」を見る。圭太と楽しそうに話している彼は、無邪気で可愛い。

……なんで、口止めしておいて、今更会う必要があったわけ？

今日、この日に。

すると、わたしの心の声が聞こえたかのように、「ジュン」はわたしの方を見て、そうしてにつこり笑って言った。

「圭があんまり、毎日毎日『真奈美姉ちゃん』と『隆司父さん』の自慢ばかりしてくるからさ。血みどろの殴り合いばかりしてる、うちの馬鹿親父と破天荒姉ちゃんの荒みきった父と娘の関係改善のための参考に、真奈美ちゃんに会いに来たんだよ」

「……はああ？！ 何よ、それ！ 意味わかんないのよ、あんた！」

「はは、真奈美ちゃんは理解能力低いからねー」

「なっ、ば、馬鹿にしないで！」

何よ、その血みどろの殴り合いって！意味わかんない！！

ぎゃんぎゃん怒鳴るわたしと、思いつき馬鹿にした調子で笑って受け流す「ジュン」との会話に、圭太がむっとした顔で口を挟んだ。

「純、真奈美姉ちゃんを馬鹿にすんなよ！」

「け、圭太……」

「ジュン」からわたしを庇う圭太にきゅんとした。か、可愛いなあ！

「ごめんよー、圭。……………そのにやけた気持ち悪い顔なんとかしろよ、変態ブラコン女」

「ジュン」は爽やかに圭太に謝った後、わたしにだけ聞こえる小さな声で、わたしにそう言った。ちらっと一瞬だけ視線を向けた奴の目が、「気持ち悪いんだよ、お前」とわたしに向かって言っていた。思いつき、遥か高みからわたしを見下して、馬鹿にしていた……………こ、こいつ、ほんとにむかつく！！あのとときちよつとときめいた自分、消えて！！あれは何かの間違いよ！圭太の方が、断然可愛い！！

ギリギリと真つ赤な顔で「ジュン」を睨むわたし、何食わぬ顔で圭太と会話する「ジュン」、「ジュン」の性格の悪さに気がつかないで笑顔の圭太、そしてこの3人を見て苦笑する由里さん。

この関係が、この日の3ヵ月後、わたしとお父さん、そして由里さんと圭太が新しい家族になった後も続いていくことを、このときのわたしは、まだ、知らなかった。

最悪な休日に見た空の色（夕日×再会編）（後書き）

児童虐待は絶対にいけません。あしからず。

「クソガキ」と「むかつく」をえらい大量に使用した話でした。
はあ…。

自分の立ち位置を見つめなおした女の子と、口の悪い少年の話でした。どっちも口が悪くて性格が捻くれてますね。真奈美はこれから圭太の純真さによって、少しは更生されるかと思われませんが。

木崎家の3兄弟、これで出揃いました！

簡易人物紹介

木崎純：キザキ・ジュン 木崎家三男。8歳、小3。口が達者で人の感情を読むのが得意な、嫌な子ども。機械関係、大好き。

遠野真奈美：トオノ・マナミ 遠野家長女。16歳、高1。自己中ワガママ甘えんぼ。圭太が可愛い。ファザコンのマザコン。その内、由里コンにもなるか？そして、ブラコン予備軍。

遠野隆司：トオノ・リュウジ 遠野家の大黒柱。40歳、会社員。イケメンで仕事が出る、会社で一番人気の貴公子さま。娘ラブ。

遠野彩加：トオノ・アヤカ 故人。隆司の妻で真奈美の母。享年35歳。美しく、優しい母で、良き妻でした。

十河由里：ソゴウ・ユリ 十河家の大黒柱。39歳、警備会社勤務。合気道が得意。強くて優しい女性。

十河圭太：ソゴウ・ケイタ 十河家長男。9歳、小3。かつこいいお父さんと、綺麗なお姉ちゃんがもうすぐできるよ。癒し系。

奥様の溜息／溺愛される次男の話／

初めて娘ができた男親というものは、娘に「大きくなったら、パパのお嫁さんになるの」と言われるのが夢だと聞く。それでもって、男親は、「この子は絶対に嫁に出さん！」などと言うのだそうだ。彼氏なんか連れてきた日には、大喧嘩。ネチネチと娘の彼氏を細かくチェックし、絶対に付き合うのを認めようとしない、とかなんとか。

男親にとって初めての娘というものは、かくも可愛いものらしい。中には妻よりも可愛がって、娘をお姫様扱いをする男親もいるそうだ。いき過ぎると禁忌に触れるが、父と娘の仲が良いのは、大変結構なことである。

その、娘に対する愛情を向ける心、うちの夫にも是非、分けてください。

そして、

「うわああああん！！ お母さん、助けてえー！！」

我が家の次男を、夫の溺愛から救ってやってください。ほんと、切実に。

「うつうつ……」

えぐえぐとぐずる次男坊、純を膝の上に抱き上げて、よしよしと頭や背中を撫でてやる。

純はまだ4歳、可愛い盛りだ。うちの子どもは何故か全員、わたしではなく夫に外見が似た。娘は男親に、息子は女親に似ると聞

くが、我が家にはそれは全く当てはまらなかった。

残念といえば残念だが、まあ、わたしの平凡な外見に似るより、無駄に美しい夫に似た方が得だろう。人間、見た目が全てとは言わないが、大部分それで判断されてしまう場合があることは否定できない。かといって見目がよすぎるのも、それはそれで問題があるのだろうが、美しい容姿の方が何かとお得であることには違いない。

我が家の第一子、長女明奈は外見も中身もまんま「夫の女版」だった。そして、夫とは犬猿の仲。この2人はもう、どうしようもない。奇跡でも起きなければ、仲良くならないだろう。

第二子、長男優吾は髪と目の色はわたしに似たが、性格は……： なんとというか、年々掴みどころのない子に育っていつている気がする。まあ、優しくていい子だから、いいのだが。

そして、第三子である次男純はまだ4歳だが、姉と兄の4歳時代よりも、物凄くよく話す。上の2人が非常に言葉が遅かった、というのもあるが、この子は本当によく話す子だ。

そして、さすが末っ子というべきか、空気を読むのが上手い。姉と父の危険な信号をいち早く察し、逃亡する。また、兄の特殊な事情による体調不良に一番に気がついては、彼を気遣う。生まれたときから周囲に個性的な人間が多かったせい、相手の言葉にしない部分の感情の変化を敏感に察し、思いやることのできる子なのだ。

わたしは子どもたちは全員大好きだ。愛している。大切な、わたしの宝物だ。

わたしの夫も……… まあ、娘とは仲が悪いが、愛はあるようだから、一応子どもを思いやってはいる。

そして、奴は何故か、

「純、見つけた」

「ひいッ……」

次男が超お気に入り。

それはもう、純がわたしに助けを求めて泣き叫ぶほど、構いたがる。

「……要。ちよつと待ちなさい」

必死で夫から逃げてきた純は、小さい体をわたしに押し付けて、肉食獣に見つかった哀れな草食動物のように、ぶるぶると震えている。

おのれ貴様、わたしの可愛い息子に今度は何をしやがった！！
わたしが睨みながら向かいのソファに座るように促すと、夫は大人しくそれに従った。が、何故か気持ち悪いくらい機嫌がいい。
なんなんだ、こいつは。そう思いながら、可愛い純をぎゅつと抱きしめつつ、夫に声をかけた。

「ちよつと、要。いい加減にしなさい。純を追い詰めないでよ」

「んん？ 別に追い詰めてなんかないよ？ 一緒に遊んでるだけだよ」

「あんたの場合、遊びが『狩り』に似てるの！ 純が嫌がってるでしょうが！」

「嫌がる顔がまた、可愛いのに……」

その言葉に、ピクリと自分の頬が引き攣るのが分かった。この、変態が！！

しかし、奴はわたしが睨もうが何しようが、涼しい顔。というか、えらくにこやかな笑顔だ。愛しい獲物を見つめる目で、わたしと純を見ている。愛しい獲物って何？ とは聞かないで欲しい。強いて言うなら、小さくて絶対自分に敵わないと分かっているのに牙を剥き出しにしてくる、頭の悪い小型草食動物を見る狡猾な大型肉食動

物の目をしているのだ。

「この馬鹿！ 変態！！ サド！！ 鬼畜！！ 子どもに嫌がらせしてんじゃないわよ！！」

「別に嫌がらせはしてないんだけどねえ」

「あんたがそうでも純にとつては嫌がらせなの！」

「僕はたまにしか家に帰って来れないんだから、ちゃんと息子に愛情をたっぷり注いでおかないと」

「いらん！ あんたの愛情はいらん！ 不要だ！ 金だけ置いてさつさと仕事に行け！！」

「酷いなあ。家庭崩壊の第一歩だよ、そういうの」

「家庭が崩壊する前に純の精神が崩壊するわよ！ 子どもを可愛がるのはいいけど、程度つてもんを知りなさい！！」

客観的にみれば、わたしは酷い妻なのだろう。しかし、この夫、子どもを「可愛がる」のが壊滅的に下手なのだ。

犬や猫が飼い主に過剰に可愛がられすぎて、逆にストレスで体の調子を崩すことがある。今の純が、ちょうどそんな状態なのだ。

抱き上げたり頭を撫でたり頬擦りするのとは別にいいのだが、それを延々と一日中やり続ける。庭で「高い高い」と言っただけで2階の屋根の高さにまで放り上げる。「柔らかいねえ」と言っただけでほっぺたを伸ばしまくる。子どもはおもちゃじゃないんだぞ！！ この馬鹿！！

純も、別に父親が嫌いなのではないらしく、構ってくれるのは嬉しいようなのだが、やはり許容限度というものがあるらしい。最近では、父親から逃げまくり、姉や兄の背中にくっついていて。が、化け物みたいな父親から無力な4歳児が逃げ切れるはずもなく、大抵捕獲されては奴の良いように弄くられているのだ。

しかし、謎だ。

わたしは純のことを不憫だとは思うが、何故にこの夫は、ここま
で純を構うのか。その理由がよくわからない。

明奈は別の意味で昔から父親に構われまくっているからいいとし
て、優吾が小さかったときには、奴はここまでベタベタはしていな
い。いや、優吾は少し変わった能力……というか体質をしているか
ら、奴が過度の接触を控えた、とも考えられるが。うん、夫は優吾
に対しては、世の息子をもつ父親たちと、そう変わらない態度をし
ていると思う。

だが、純へのこの溺愛ぶりは、どうなのか。気持ちの悪いこと、
この上ない。

ちなみに明奈も優吾も、父親が純をめちやくちやに可愛がる様子
を見ても、全く弟に嫉妬していない。というか、純を不憫がったり、
父親を気味悪そうにして見ている。

「……要。あんた、なんでそこまでして純を構うのよ」

前々から疑問だったことを聞いてみる。純は父親に背を向ける体
勢で、わたしの胸に顔を押し付けている。かわいそうに。

「なんでって……。そりゃあ、僕の子どもだからね。可愛いから構
うんだよ」

につこり笑って言う夫に、しかしわたしは騙されない。奴の言葉
を額面どおりに受け取ってはならないことは、既に学習済みだ。

別に、裏で何か企んでいるとか、腹黒いとか、そういうことでは
ない。夫は基本的に嘘はつかない性格で、常に相手には本心しか言
わない。しかし、奴の言葉は、言葉の意味が一般人の考えるものと
若干ずれている場合が多い。

わたしはかつて、夫に「殺す、てめえ絶対殺す！！」と叫んだこ
とがある。

奴はそれを、何故か自分へのプロポーズだと理解した。そしてそ
の結果、あの悪夢の結婚式が……結婚式が、あつたんだよね……。

正しい意思疎通と相互理解のためには発言に気をつけましょう、短気は損気、ということ身を以て学んだあの日のことを、わたしは生涯忘れない。というか、忘れないけど、脳にこびりついて剥がれ落ちそうにない……。

とにかく、奴の発言をそのまま信じてはいけない。注意深く、発言内容を吟味して思考しなくては。

「……あのね。明奈にも優吾にも、そこまでベタベタしなかったでしょうが、あんた。なのに何で、純にはここまでベツタリなのかって聞いているの」

「いやだなあ、アレは隙あらば僕に攻撃しかけてくるし、優吾はまだ、あんまり引つ付かないほうがいいからさ。特に、僕はね」

娘のことを「アレ」呼ばわりする夫は、娘には「あの男」「バカ」「虫」などと呼ばれている。

母としては、さすがにちょっと切ないのだが、お互い本気で嫌いあっているのしょうがない。人前では仲のいい親子を演じているのも、更に切ない。いつかの日か、和解してくれたら、いいなあ……。

優吾のことは、しょうがない。適度な距離が必要なのだ。まあ、優吾は構ってほしかったら自分から寄ってくるので、問題ないのだが。それに、夫は……色々あるから、優吾のように敏感な子が一緒にいるのは、少ししんどいのもかもしれない。

それはそれでいい。多少問題はあるが。しかし、何も上の子2人をベタベタに可愛がれなかった、その欲求不満を純にぶつけているわけでもあるまい。

「だからって、純には変態みたいに構いすぎよ。怯えさせてどうするのよ、あんた」

「だってねえ。怯えた顔とか、嫌がる顔とか、僕に文句を言う顔と

か、僕を貶すときの言い方とかが、1番似てるんだよ」

「……………は？」

「泣きそうな顔も、似てるなあ。逃げるときの悲鳴とか」

「……………誰が、誰に？」

なんか、嫌な予感がする。わたしは膝の上にいる純を思わずぎゅうつと抱きしめた。純もわたしに更にしがみついていた。

「決まってるじゃないか。純が子どもたちの中で1番梓にそっくりだから、可愛くって、ついつい構っちゃうんだよ」

「……………は?!」

夫の言った言葉を理解するのに、ものすごく時間がかかってしまった。

え？ 何？ 似てる？ 似てるか？ この子が、わたしに？

まじまじと腕の中の純を見つめると、純はきよとした顔でわたしを見返した。

そして、嬉しそうに笑うと、「ぼく、お母さんとそっくり？」などと頬を染めて聞いてきたので、「そうよー、そっくりよー」と頬擦りしつつ答えた。

きゃっきゃと笑う息子は、まさに天使。我が家の天使2号だ（1号の長女はもう覚醒してるから……）。優吾は天使より、神様寄りっぽい。可愛い。可愛すぎるぞ、息子よ。

その様子をにこやかに眺めている夫は、立ち上がってわたしと純の方へと近づきながら言った。

「気がつかない？ 優吾もマイペースなところが梓にそっくりだけだよ」

いや、貴様の方がマイペースだ。

「純は1番梓に似てるよ。僕を嫌がって抵抗するときの顔とか、罵るとき言い方とか」

貴様、自分の息子に一体何してんだ。

「ひとつのことに夢中になったら周りが全然見えなくなるところとか、そういう時に悪戯しても邪険にしないとか」

家のテレビとか電話とかを、純が勝手に解体して組み立て直して横で純の顔にマジックで落書きしてたのは、そのためか。

「僕は小さい頃の梓を、写真でしか知らないからね。こんな感じの子だったのかなー、と思うと感慨深くてさ」

……………ちよつと待て。

「要……。あんた、もしかして、遠まわしにわたしに嫌がらせしてたの……？」

「ええ？ そんなことしてないよ。ただ、純の反応が梓にそっくりで楽しいし可愛いから、ついつい構っちゃうんだよ」

「……………」

脱力。

脱力した。

なんていうか……ごめん、純。全然気がつかなかったけど、君はわたしに似てしまったらしいよ、奴に対する反応が……。不甲斐ない母を許してください……。奴は君の反応がお気に入りらしいよ……。

そういえば純がお腹にいた頃、明奈と優吾が「お母さん似の妹がいい！」と言っていたが、夫は笑っているだけだった。子どもは授かりものだからね、元気に生まれてきてくれたらそれでいいよ、とかなんとか、珍しくまともなことを言っていたが。

……………わたしに似た娘だったら、どうなってたんだろう……………。

きやらきやら笑っている純を見つめながら、純が顔は夫似で性別・男だったことについて、神に心から感謝した。

「でも、やっぱり純は男の子だからね」

いつの間にかわたしの正面に立っていた夫はそう言って、わたしの腕から純を取り上げて、絨毯の上に立たせた。

「ほら、純。もうすぐ和之君が遊びに来るから、お兄ちゃんのところに行つてなさい」

「え？」

思わず、声をあげたのはわたし。時計を見ると、もうすぐ午後2時だ。今日は日曜日で、休日は大体この時間になると、和之君が明奈に会いにやってくる。彼は明奈と勉強をしたり、優吾たちと遊んでくれるので、優吾も純も和之君をとて慕っている。

「うん！」

和之君の名前を聞いてぱっと顔を輝かせた純は、リビングから出て行く際、ふつとわたしに心配そうな、申し訳なさそうな視線を向けた。

その意味がわからずに首を傾げると、夫にもう一度促されて、純は心配そうにしながらも優吾のいるであろう庭へと出て行った。

……？ どうしたんだろう、あの子。変な顔して。

そんなわたしの純に対する疑問は、夫の素早すぎる行動によって氷解した。

「さて」

「ぎゃっ?!」

純の足音が遠のいた瞬間に、わたしは夫の肩に俵担ぎされていた。

夫の無駄に硬い肩の筋肉やら骨やらが、折り曲げられたわたしの腹にあたって痛い。というか、圧迫されて苦しい。

「ちよ、ちよっと、要?!」

「うん? 何?」

「何、じゃ、なくって! あんたが何してるのよ!」

「んー、寝室に向かつてる」

「はあ?!」

わたしを肩に担いだまま、夫はその長いコンパスを活かして、さつさと歩く。奴はバタバタ暴れるわたしの抵抗を軽くないして、まるでダメージを受けていない。は、腹立つな……! というか、何?!

あつという間に2階の寝室についてしまったものの、なんだか物凄く嫌な予感がして、わたしは冷や汗を流しながら、夫に尋ねた。

「……あの、要? 何するの?」

「うん? いやね、僕は明後日から、また仕事で当分の間は家に帰って来れないからね? アレを叩き潰して、優吾の修行見て、純を愛でて、純と梓のセットも堪能したからね?」

「……ええと。じゃあ、もう、満足したんじゃない?」

むしろ、今から仕事に行ってくれ。そして半年くらい帰ってくるな。

「うん。だけど、やっぱり純は男の子だからね。すぐに大きくなって、絶対に梓みたいな反応してくれなくなるから、やっぱり梓によく似た女の子が欲しいなあ、と思って」

「え、えー……。えっと、今、昼間なんですけどー……」

「アレももう少し可愛げがあつたらねえ。問答無用で急所狙ってくるわ、生きた百足を口の中に突っ込んでくるわ、全然父親を敬わないから」

明奈……母の知らないところで、そんなことをしてたのか。急所

はいけれど、生の百足は……ちょっとキツイ。視覚的に。

「だからねえ、梓」

優しく、優しくベッドの上に落とされる。長い指がわたしの髪を撫で、頬をすべり、唇にそっと触れる。

「もう1人くらい、作ろうよ。今度は、女の子がいいな」

耳をくすぐる、刃のように鋭くて、ぞくぞくするほど甘く心地いい低音に、わたしは目を閉じた。抵抗しても、無駄っぽい。

愉しげな夫の声を聞きながら、わたしは先ほど心配そうにしていた純の顔を思い出して、小さく溜息をついた。

息子よ。父の不穏な気配を察したのなら、次からは真っ先に母に知らせてくれ。逃げるから。

そんなことを思いながら、わたしの思考はさつさと夫に溶かされてしまった……。

その後、残念ながら4人目はまだ生まれていない。が、夫はまだ諦めていないようなので、どうなることやら。産むの、わたしなんだけどね……。

そして、純は夫の予言どおり、たくましく、強い子になった。相変わらずベタベタしてくる父親に対して、一切の遠慮もなく罵詈雑

言を吐く息子を、しかし夫は嬉しそうに構いまくっている。

とはいえ純も、わたしからすれば何に使うのかよくわからない類のコンピューター、というか、謎の機械類を、好きなだけ与えては弄くらせてくれる父親のことを、一応好いてはいるようだ。

そういえば、純の同級生が今度再婚するらしく、彼と仲の良いらしい純は、今日も彼の家に遊びに行っている。名前は、たしか、十河圭太君だ。もうすぐこの苗字も、変わってしまうのだろうが。

彼の母親は夫と同じ会社の人で、わたしも会ったことがある。なんとというか、強烈な印象の女性だったな……。プロレスラーのような体格の成人男性8人を、ちぎって投げて蹴って潰して地べたに這わしていた彼女が、夫の顔を見るなり青ざめて逃亡しようとした場面は、忘れようにも忘れられない。夫は会社で彼女に何をしているのだろうか。なんであんなに怯えられるんだ。

口が達者で空気を読むのが上手い優しい次男から、圭太君の新しいお姉さんについての話をわたしが延々と聞かされるようになるのは、この日からもう少し経ってのことだった。

奥様の溜息／溺愛される次男の話／（後書き）

純が「家族」について、真奈美に話したからなかった理由でした。父親にうざいくらい愛でられています。父親は息子にどんなに冷たい目で睨まれようが、拒絶されようが、気にもしません。

そして、純は何気に遠野父娘の仲の良さに感心しています。彼の姉と父親は仲が悪いので。

父親は娘に生きた百足を口の中に突っ込まれて食わされかけたので、娘にでかい蛾を食わせようとして、長男と次男に必死で止められました。

温もりの記憶（前編）（前書き）

今回、少し毛色の違う話です。あしからず。

温もりの記憶（前編）

さーちゃんが死んだ。

さーちゃんは、黒い犬に殺された。

次は、あーちゃんが殺される。

黒い犬に、殺される。

逃げろ、あーちゃん。黒い犬に、つかまるな。

学校から帰って来て、あーちゃんが、まず1番にすること。

うがい、手洗い。それから、部屋にランドセルを置いて、台所へ行く。

台所の冷蔵庫に貼ってある、まーくんからのメモを読むのだ。

まーくんからのメモには、あーちゃんの今日のおやつについてと、晩ご飯について。それに、まーくんが何時くらいに帰ってくるかが書かれている。

まーくんのお仕事は、忙しい。メモに『今日は〇時に帰る』と書いてあっても、家に帰って来れないときがある。

そういうとき、まーくんと一緒にご飯を食べたり、本を読んでもらうのを楽しみにしているあーちゃんは、とっても悲しくなる。

あーちゃんは、まーくんといくつかのお約束をしている。その中に、「夜8時までにはまーくんが帰って来なかったら、あーちゃんはお風呂に入る前にご飯を食べること」「夜10時がきたら、あーちゃんはお風呂に入って歯を磨いて眠ること」というのがある。あーちゃんはまーくんのことが大好きだから、どんなに寂しくても我慢して、ゆーちゃんと一緒に眠るのだ。

ゆーちゃんは、まーくんがあーちゃんの5歳の誕生日に買ってくれた、真っ白いふわふわのウサギのぬいぐるみだ。あーちゃんの、一番のお友だち。

あーちゃんは、ゆーちゃんのことが大好きだ。ゆーちゃんは、あーちゃんと、いつも一緒にいてくれる。

あーちゃんは、ゆーちゃんと一緒にいるときだけ、まーくんがいなくて寂しいのを、我慢できなくて泣くときがある。ゆーちゃんはまーくんみたいに温かくないけど、冷たくもない。ゆーちゃんは、あーちゃんが泣いても、何も言わずに、ずっと一緒にいてくれる。だから、あーちゃんはゆーちゃんが大好きだ。

まーくんのお仕事は忙しい。毎日、朝早く起きて、朝ご飯の準備をして、すぐに家からいなくなる。だから、あーちゃんは毎日頑張って早起きする。少しでも長く、まーくんといたいから。

でも、まーくんは、たまに何日も家に帰って来れないときがある。そういうときには、まーくんのお友だちのさーちゃんが、あーちゃんに晩ご飯を作りに来てくれる。

さーちゃんは、きれいな女の人だ。さーちゃんは、あーちゃんに色々なご飯やお菓子の作り方を教えてくれる。

まーくんがいないときには、あーちゃんはさーちゃんと一緒に晩ご飯を作って食べ、あーちゃんがお風呂に入っている間に、さーちゃんは明日の朝ご飯の準備をするのだ。さーちゃんは、明日が休み

の日なら、昼ご飯の準備もしていつてくれる。

でも、さーちゃんはそれが終わったら、いつもすぐに帰ってしま
う。あーちゃんは、それが寂しい。

だから、あーちゃんは、さーちゃんよりもゆーちゃんの方が好き
だ。ゆーちゃんは温かくないが、いつも一緒にいてくれるから。

あーちゃんは今、小学校4年生だ。1人で何でもできる、偉い子
だ。

あーちゃんは、もう、夜中に1人でトイレにいけるし、お買い物
も、お掃除も、お洗濯もできる。簡単なご飯を作るのだって、でき
るのだ。

あーちゃんが初めて卵焼きを作ったとき、まーくんはあーちゃん
のことを何回も褒めてくれた。「おいしいよ」と何度も言ってくれ
た。でも、何故かまーくんは、いつも最後にはあーちゃんに「ごめ
んね」と謝るのだ。

あーちゃんは、まーくに謝ってほしくなくて、とても困ってし
まう。

あーちゃんは、まーくに謝ってほしいわけじゃないのだ。

まーくんにもっと、あーちゃんのことを好きになっ
てほしいだけ
なのだ。

あーちゃんは、まーくんのことが、世界で1番大好きなのだ。

まーくんは、優しくて、温かい。あーちゃんの、大事な人。

でも、今日のまーくんのメモには、あーちゃんは困ってしまった。

さーちゃんが来た日は、まーくんのメモではなく、さーちゃんの
メモが貼ってある。何時に来て、今日は何の晩ご飯を作るのか、と
いうことが書いてある。でも、たまに、まーくんがあーちゃんが学
校に行っている間に家に帰って来て、あーちゃんにメモを残してい

くときがあるのだ。あーちゃんはそれが楽しみで、毎日、冷蔵庫のメモを確認する。

まーくんは一昨日からお仕事から帰って来ていなくて、今日も、朝あーちゃんが確認したときは、冷蔵庫にはさーちゃんが昨日貼っていたメモしかなかった。

でも、あーちゃんが学校から帰ってきて、冷蔵庫を見たら、まーくんのメモがさーちゃんのメモの上に貼ってあったのだ。

あーちゃんは、嬉しかったけど、とっても困った。

まーくんのメモの書いていることの意味が、全然わからない。

メモの字は、確かにまーくんの文字だった。でも、急いで書いたみたいにその文字は歪んでいて、ところどころ震えていた。

メモには、『さーちゃん』が『黒い犬』に殺された、と書いてある。そして最後に、あーちゃんに『逃げろ』とあった。

あーちゃんは、まーくんのメモを持って、首を傾げた。

さーちゃんが殺されたって、どういうこと？黒い犬って、どんな犬？逃げろって、どこに逃げたらいいの？

あーちゃんはとっても困ってしまったけれど、まーくんの言うとおりにすることにした。あーちゃんは、まーくんのことが大好きなのだ。

あーちゃんは、まーくんから渡されたお金の入っているピンクの可愛いお財布と、ついでにゆーちゃんを部屋から取ってきて、玄関に向かった。

とりあえず、商店街へ行こう。あそこなら、あーちゃんのことを知っている、八百屋のおじさんや花屋のおばさんがいる。

そう思いながら、あーちゃんが運動靴をはいていると、いきなり玄関の扉が開いた。

あーちゃんはびっくりして、顔をあげた。

あーちゃんの目の前には、あーちゃんが見たことのない、きれいなお姉さんが立っていた。

肩まである真っ黒い髪が、真っ白な肌に映えて、とてもきれいだった。髪と同じくらい真っ黒い、とってもきれいな目が、あーちゃんを見つめた。

あーちゃんがぼかんとしていると、お姉さんは不思議そうに首を傾げた。

「どこに行くの？」

きれいな声で、お姉さんはあーちゃんに聞いた。

あーちゃんは、お姉さんに答えようとして、困ってしまった。まーくと、「知らない人とお話してはいけません」というお約束をしているのだ。

困ったあーちゃんが、あーちゃんの横に座らせていたゆーちゃんを抱き寄せて考え込むと、お姉さんは「ああ」と何かに気がついたような声をあげて、ポケットからひとつの鍵を取り出した。それを、あーちゃんに見せる。

鍵には、あーちゃんがまーくんにあげた、フェルトで作ったゆーちゃんのマスコットが付いていた。

まーくんの鍵だ！

そう思って、あーちゃんは嬉しくなって、お姉さんに声をかけた。

「お姉さん、まーくんのお友だち？」

「うん、そうだよ」

お姉さんはいっこり笑って、あーちゃんと視線を合わせるように
屈みこんで、優しく言った。

「『まーくん』に頼まれたんだ。まーくんが帰ってくるまで、一緒
にしようね？」

天使みたいにきれいな顔で、お姉さんはあーちゃんに微笑みかけ
た。

温もりの記憶（中編）

― エリン、いたか？！

― いや、いない。奴は何処に行ったんだ？

― クソッ、逃がした！女の方は、確認取れたか？！

― ああ。【AR-30098】だった。後は【AR-43309】、奴だけだ。

― あいつが1番厄介だったのに！ 4班の奴ら、油断しやがって！

― 落ち着け。待っていれば、直に片が付く。

― 何を悠長なことを！ 青い猫、わかってるのか？！

― 今回の任務に失敗したら、俺たちの命が危ないんだぞ？！

― だからだ。黒い犬が【AR-43309】を追っている。

― 何？！

― もともと、【AR-43309】は黒い犬がずっと追っていたんだ。大丈夫だ。

― 俺たちは、連絡が来るまで待っていればいいんだな？

― そうだ。下手に追うな。殺されるぞ。【AR-43309】より、あいつの方がずっと危険だ。

大きな鞆を持っていたお姉さんは、その中からきれいな箱を取り出して、「お土産だよ」と言っ、あーちゃんにおいしそうなシユ

ークリームをくれた。

「ありがとう！」

「どういたしまして」

あーちゃんは、さーちゃんが教えてくれた『お客さまが来たときの対応の仕方』を思い出して、お姉さんに紅茶を淹れてあげた。あーちゃんが飲む分は、オレンジジュースにした。あーちゃんはまだ紅茶が苦手で、まーくんやさーちゃんのようにおいしそうに飲めないのだ。

そして、お皿にシュークリームを2つ載せて、お盆の上にそれらを置いた。

あーちゃんは、お盆の上のものをこぼさないように、そろそろと歩いてお姉さんのいる部屋に行った。

座布団の上にお行儀よく座っていたお姉さんは、お盆を持ったあーちゃんを少しびっくりしたような目で見て、それから「ありがとう」ときれいな笑顔で言った。

「君は偉いね。いつも家のお手伝いをしているの？」

「うん。さーちゃんがね、いっぱい教えてくれるの」

お姉さんは、優しく笑ってあーちゃんの頭を撫でてくれた。あーちゃんは頭を撫でられるのが大好きだから、とっても嬉しかった。

それから、あーちゃんはお姉さんと一緒にシュークリームを食べた。ふわふわした生地の中に、甘いカスタードクリームがたっぷり詰まっていて、とってもおいしかった。お姉さんは、あーちゃんが淹れた紅茶を飲んで、「とってもおいしいよ」と言って、またあーちゃんの頭を撫でてくれた。

「お姉さん、さーちゃんは死んじゃったの？」

シュークリームを食べながら、あーちゃんはお姉さんに聞いた。
お姉さんはきよとした顔をして、それから首を傾げて、あーちゃんに聞き返した。

「どうして、そう思うの？」

「あのね、まーくんのメモに書いてあったの」

あーちゃんは、まーくんのメモをお姉さんに見せた。お姉さんはそれを読んで、なんだか面白そうに笑った。

「なるほどねえ……」

「お姉さん、さーちゃん、死んじゃったの？」

あーちゃんは、隣に座らせていたゆーちゃんを抱きしめて、お姉さんにもう一度聞いた。

お姉さんはあーちゃんの目を覗き込むようにして、優しく笑った。

「ううん。死んでいないよ」

「そっかあ。よかった……」

「『さーちゃん』が死んじゃったたら、悲しい？」

「うん。さーちゃん、優しいし、あーちゃんに色んなことを教えてくれるんだよ」

あーちゃんがそう言つと、お姉さんは「そうなんだ」と言つて、何かを考えるように、視線を空中にさまよわせた。

「お姉さん。お姉さんが来たから、あーちゃんは逃げなくつてもい

いんだよね？」

「うん？ …… ああ、そくだよ」

「そっか。よかったー」

あーちゃんは、ゆーちゃんに「よかったねー」と言った。

あーちゃんは、ゆーちゃんと一緒に家でまーくんを待っている方が好きなのだ。あんまり別の場所にはいたくない。だって、メモにはいつになったらまーくんがあーちゃんの所に来てくれるのか、ということが書かれていなかったから。まーくんとずっと会えなくなるのは、嫌なのだ。

「ねえ。まーくんとさーちゃんは、君のことを『あーちゃん』って呼んでるの？」

お姉さんに聞かれて、あーちゃんはこっくりと頷いた。

「うん。まーくんもさーちゃんも、あーちゃんのこと、『あーちゃん』って呼ぶよ。ゆーちゃんも、『あーちゃん』って呼ぶんだよ」

ゆーちゃんの手をぴこぴこ動かしながら、あーちゃんは答えた。ゆーちゃんは、あーちゃんと2人きりのときは、とってもおしゃべりなのだ。

あーちゃんの答えに、お姉さんは優しく笑った。その時になつてようやく、あーちゃんはまだ、お姉さんに名前を聞いていないことに気がついた。

「あのね、あのね。お姉さんも、あーちゃんのこと『あーちゃん』って呼んでいいよ。だから、お姉さんのお名前、教えて？」

「ん？ ああ、そくだね……。お姉さんの名前は、『ミレイ』っていうんだよ」

「みれい？」

「うん」

「えっと、じゃあ、『みーちゃん』って呼んでいい？」

「うん。いいよ」

みーちゃん、みーちゃん。

ゆーちゃんと一緒に、あーちゃんはお姉さんの名前を繰り返した。
お姉さんは、それを優しく見ていた。

「あーちゃん。君は、まーくとずっと一緒にいるの？」

「うん。そうだよ。ゆーちゃんはね、あーちゃんが5歳のときから一緒にいるんだよ」

「そう……。じゃあ、あーちゃんは、まーくんのこと、好き？」

「うん！ まーくん、大好き！」

「さーちゃんより？」

「うん！ さーちゃんより好き！」

「ゆーちゃんよりも？」

「うん！ あーちゃんはね、まーくんのことが、世界で1番大好きなんだよー！」

あーちゃんの言葉に、お姉さん——みーちゃんはきよとした顔をして、それから一拍置いて、大きな声で笑い出した。

あーちゃんはびつくりしてみーちゃんを見た。

みーちゃんは、お腹を抱えて笑いながら、なんだかとても羨ましそうな目であーちゃんを見た。

「みーちゃん、大丈夫？」

「あー、うん……。う、ごめんね、こんなに笑ったのは久しぶりで……」

「ジュース飲む？」

笑いすぎて苦しそうなみーちゃんに、あーちゃんは飲みかけのオレンジジュースのコップを渡した。

みーちゃんは「あ、ありがと……」と涙目で言いながら、コップを受け取ってジュースをごくごくと飲んだ。

「そうかあ……。あーちゃんは、まーくんのことか『世界で1番大好き』なのかあ」

「うん。まーくんもね、あーちゃんのこと、大好きだよって言うの」

「ふうん。……いいなあ」

コップを机の上において、みーちゃんはあーちゃんのすぐ横へと近づいてくると、目を細めてあーちゃんを見つめた。

「みーちゃん？」

「いいなあ。まーくんが羨ましいよ」

「みーちゃんも、まーくんのこと、好き？」

「……………」

みーちゃんは少し考え込むようにして、あーちゃんを見た。それから小さく笑って、「好きだよ」と言った。

「なら、あーちゃんもみーちゃんのこと、好きだよ！」

「え？」

「まーくんのこと好きな人は、あーちゃんの仲間だもん。おいしいシュークリームくれたし、ゆーちゃんもみーちゃんのこと、好きだって！」

「……………」

「あのね、でもね。あーちゃんの1番はまーくん、2番はゆーち

やんで、3番はさーちゃんだから、みーちゃんは4番目ね！」
「……………4番かあ……………」

みーちゃんは苦笑いして、あーちゃんの頭を優しく撫でた。そしてそのまま、ゆーちゃんを抱きかかえたあーちゃんをすっぽりと抱きしめた。

「みーちゃん？」

「うーん。4番かあ……………。微妙だなあ……………」

「えつと……………えつとね。でもね、もしかしたら、2番くらいになれるかもよ？」

「うん？」

あーちゃんは、自分がみーちゃんに言った「4番目」という言葉に傷ついているのだと思って、慌ててみーちゃんの顔を見上げた。
みーちゃんは、何かを期待するような目で、あーちゃんを見つめていた。

「あのね。もし、ゆーちゃんとさーちゃんがいなくなったら、みーちゃんはあーちゃんの2番目だよ！」

「……………まーくんは？」

「え？」

「まーくんがいなくなったら？」

「えつと……………」

あーちゃんは、困ってしまった。あーちゃんにとって、まーくんは世界で1番大好きな、大事な人なのだ。まーくんがいなくなってしまうなんて、あーちゃんには考えられない。そんなことになったら、あーちゃんは悲しくて悲しくて、きつとたくさん泣いて、そのまま溶けて消えてしまう。

でも、みーちゃんは怖いくらい真剣な目で、何かを期待するようにあーちゃんを見つめている。少しだけ、悲しそうな顔で。

あーちゃんはなんだか、みーちゃんが可哀相になってしまった。みーちゃんは、今日会ったばかりのあーちゃんのこと、とっても好きみたいだ。もしかしたら、みーちゃんにはお友だちが少ないのかもしれない。

あーちゃんはまーくんが世界で1番大好きで、まーくんがいなくなるなんて考えられなかったけれど、みーちゃんにそのことを伝えたら、みーちゃんは泣いてしまうかもしれない。

みーちゃんは、今まであーちゃんが会ったことのある人の中で、1番きれいな人だ。すごくきれいだから、そのせいでお友だちが少ないのかもしれないし、誰かに1番好きになってももらえないのかもしれない。そんなのは、可哀相だ。

だから、あーちゃんはちょっとだけ、嘘をついた。

「まーくんがいなくなったら、みーちゃんがあーちゃんの1番だよ」

まーくんが、あーちゃんの前からいなくなるなんて絶対にないから、そんなことはありえないけど。

あーちゃんの言葉に、みーちゃんはとっても嬉しそうな顔をして、あーちゃんのことをぎゅっと強く抱きしめた。あーちゃんとみーちゃんの間で、ゆーちゃんの白いふわふわな体が潰れてしまった。

「ありがとう、あーちゃん」

「みーちゃん、苦しいよ……」

「うん。大丈夫、すぐに楽になるからね」

あーちゃんが苦しくてみーちゃんの顔を見上げると、みーちゃんは天使みたいにきれいな顔で笑って、あーちゃんのほっぺたに顔を寄せて、ちゅっとした。

あーちゃんがびっくりしていると、みーちゃんは笑ったまま、あーちゃんのほっぺたに頬擦りした。

あーちゃんは、なんだかよくわからないけど、みーちゃんが喜んでくれたから安心した。みーちゃんみたいにきれいな人が、あーちゃんのせいで悲しい顔をするのは、嫌だったから。

そして、あーちゃんはなんだか、ふわふわな気持ちになってきた。ふわふわ、ふわふわ。
目がとろんとしてきて、体に力が入らない。

ぼんやりしたまま、あーちゃんはみーちゃんを見た。
みーちゃんは微笑んだまま、もう一度、あーちゃんのほっぺたにちゅっとした。

それから、座布団の上に、だらっとしたあーちゃんの体を横たえた。

みーちゃん？

あーちゃんは、みーちゃんの方に視線を向けた。体に力が入らなくて、うまく動かない。それに、とってもふわふわして、気持ちいい。

でも、なんだか、不安になった。

みーちゃんをこのままにしてはいけない、という、不安。

みーちゃんは、ゆーちゃんを片手でつかんで、そのまま勢いよく壁にぶつけた。みーちゃんがつかんでいたゆーちゃんの頭がおかし

な音を立てた。

ふわふわなゆーちゃんに似合わない、何か固い物が壊れる音。

みーちゃんはポケットから、何か、小さな細長いものを取り出した。それがシャキン、と音を立てて、ナイフになった。

みーちゃんは、空いている手でナイフを握って、ゆーちゃんの頭にそれを突き刺した。

ゆーちゃん！

あーちゃんは悲鳴をあげたけど、声は出なかった。ただ、喉の奥からひゅうつと空気が押し出される音だけがした。

みーちゃんは一瞬だけあーちゃんの方を向いて、困ったように笑った。

それから、すぐにゆーちゃんに向き直ると、ゆーちゃんの頭をナイフで引き裂いた。可愛いゆーちゃんの顔が真つ二つに割れて、たくさんの真つ白な綿と、小さな銀色の固まりが出てきた。銀色の固まりは、変な形に歪んでいた。

みーちゃんはゆーちゃんの体をぽいつと投げ捨てて、銀色の固まりを摘み上げて、それを色々な角度から眺めていた。

みーちゃん、ひどい。ゆーちゃんに、何をするの。

あーちゃんはとっても悲しくなった。それに、みーちゃんがすごく怖かった。

涙がぼろぼろ溢れてきて、それに気がついたみーちゃんが、どうしてだか嬉しそうに笑った。

「泣いた顔も可愛いね、あーちゃん」

それから、みーちゃんはあーちゃんに背中を向けた。
あーちゃんには、もう、みーちゃんの顔は見えない。

みーちゃん、ひどい、ひどいよ。ゆーちゃんに、ひどいことしないでよ。ゆーちゃんが死んじゃうよ。みーちゃん、あーちゃんのこと嫌いなもの？

ぼろぼろと涙をこぼしながら、あーちゃんはみーちゃんの背中をにらみつけた。

そして、いつの間にか、みーちゃんと向かい合っている人影に気がついた。

いつから、そこにいたのか。

みーちゃんは、あーちゃんたちがいる部屋の扉の方を向いていた。
あーちゃんが紅茶などを持ってきたときに、きちんと閉めたはずの扉が、開いていた。

そして、まーくんが、みーちゃんと向かい合って立っていた。

まーくん！ まーくん、助けて！

あーちゃんは、まーくにそう叫ぼうとしたけど、やっぱり声は出なかった。それに、とってもふわふわな気持ちが強くなって、どんどん眠くなっていた。目が開けていられず、瞼がゆっくり落ちていく。

あーちゃんは、まーくとみーちゃんが、何か言い争っている声を聞いた。でも、何を言っているのかまでは、わからなかった。

まーくん、まーくん……。

あーちゃんは、本当なら、まーくんの名前を呼んで、飛びつきたかった。まーくんの、大きくて温かい体に抱きしめてほしかった。

でも、もう、無理だ。もう、あーちゃんはまーくんには会えない。次にあーちゃんが目を覚ましたとき、きつと、まーくんはあーちゃんの前から、永遠に消えていなくなっている。

どうしてだか、そんな予感がして、あーちゃんはまた一粒、涙をこぼした。悲しくて、苦しくて、悔しかった。

真っ暗になっていく意識の中で、あーちゃんは最後に、いつものようにまーくんに「あーちゃん」と名前を呼ばれて、そしてぎゅっと抱きしめてもらえなかったのが、ひどく寂しい、と思った。

温もりの記憶（後編）

寂しい、さみしい、サミシイ……

あーちゃんは、まーくんに、もう会えないのが、かなしい、さみしい……

あーちゃんは、まーくんに、もう……

……『あーちゃん』？ 『まーくん』？

『あーちゃん』とは、誰のことだ？ それに、『まーくん』とは？

わたしは今まで、『あーちゃん』などと可愛い名前と呼ばれたことがあっただろうか？

わたしは、わたし、は……

わたしは、今、一体、なんの、夢を……

「……さ、あずさ」

ああ、相変わらずいい声がする……。

この、妙にぞくぞくする色気のある声は、ある意味犯罪だな……。

「あずさ……梓。ほら、もう起きないと」

ああ、なんか勝手に体が浮いてる……。

背中と膝の裏に回された腕の感触から、わたしは俗に言う「お姫様抱っこ」というものをされていることがわかった。この抱き方、スカートだと下着が丸見えになる大きなリスクがあるが、わたしは基本的にスカートは履かないため、問題はない。

ゆっくりと体が移動して、ソファの上に座らされる。

それから、額に冷たい唇の感触。ちゅつと軽い音をたてたそれが、少しくすぐったかった。夫は、こういう可愛いことをするのが好きなのだ。濃厚なやつはもう、本当に半端なく濃厚なのだが。わたしは夫のこういう可愛いキスは、嫌いではない。

わたしは目を開けた。カーテンの開け放たれた昼間の寝室は、照明を点していなくても十分明るい。

眩しくて、少し目を細める。ベッドから少し離れた位置にある2人がけのソファに、わたしは座らされていた。

ソファの正面に置かれているテーブルの上には、可愛い皿にこんもりと盛られた、夫お手製の大量のシュークリームと、温かい紅茶が2人分。夫はわたしの隣に座って、わたしを見てにっこりと笑った。

「おはよう。よく寝てたね」

「ん……」

答えつつ、紅茶に手を伸ばす。うーん、美味しい……。わたしが

淹れるより、断然美味しい……。淹れる手順は一緒のはずなのに、
一体何が違うのやら。

何をやらせても人並み以上のことをやる夫は、お茶を淹れるのも
上手だが、料理もお菓子も作るのが得意だ。お前もうプロになって
店出せよ！　と言いたくなるくらい、上手い。

わたしは料理はともかくとして、お菓子の類は作るのが苦手だ。
手順や分量がいちいちきっちり決まっているのが、もう、面倒くさ
い。なので、お菓子の類は夫に一任している。奴は特にお菓子作り
が好きというわけではないが、わたしが夫手製のお菓子が好きなの
を知っているため、仕事から帰ってきたら、大抵はキッチンに籠も
って何かを製作する。

今回は、シュークリームを作ったようだ。しかし、毎回思うが、
何故こんなにたくさん作るのだ。確かに美味しいのだが、もう少し
量を減らしてくれてもいいのに。

「あきちゃんは？」

「今は隣の部屋で昼寝してる。よく寝てるよ」

「……わたしに昼寝させてくれたのはありがたいけど、あんたにあ
きちゃんの世話させたのだけは不安だわ……。変なことしてないで
しょうね？」

「してないよー。まだ、さすがに2歳児にはね。ころころ転がした
り、ぬいぐるみで殴られたり、ほっぺたひっぱったり、目潰し食ら
わされかけたりして、お互いに有意義に過ごしたよ」

「……………そう」

不安だ。

ものすごく、不安だ。

わたしは明奈の無事を確認したくて、とりあえずシュークリーム
をひとつ口の中突っ込んで、立ち上がった。

……あれ？

「……ねえ、要」

「ん？ 何？ 美味しくない？」

「あ、いや、美味しいんだけど……」

ふわふわの薄めの生地。中にたっぷり詰まった、決してくどくはない、程好い甘さのカスタードクリーム。

夫が作ったシュークリームは、何も今日初めて食べたわけではない。

それこそ、夫とわたしが初めて会った、わたしが中学生だった時に、奴が初めてわたしに振舞った手料理がこれだった。

だから、このシュークリームに奇妙な懐かしさを感じても、それは別に、おかしくはない、はずだ。夫がシュークリームを作ったのも、そう言えばずいぶん久しぶりなのだから。

ただ、なんとも言えない、奇妙な感覚がある。

夫と初めて会った頃よりも、もっと、もっと昔。

まだ小さかった頃に、この味を食べたような。

そんなこと、あるはずがないのに。

「どうしたの？」

訝しげにわたしの顔を見つめる夫に、わたしは曖昧に微笑んだ。

変だな。

何故か、不安になった。

世間一般の父と娘の触れ合いとは、大きくかけ離れたことをしている夫と明奈のことも、十分不安ではある。しかし、それとは別に、初めて感じる不安が、わたしの胸の中に渦巻いていた。

何か、大事なものを失くしてしまったような。

何か、大切なことを忘れているような。

何か、何か——それが『何』なのかが、わからない。わからないけれど。

「夢……」

ぼつりと、わたしが無意識に呟いた言葉に、夫が首を傾げた。

「夢？ 夢がどうかしたの？」

「うん……」

なんと言えればいいのか。

多分、さつき惰眠を貪っていたときに、何かの夢を見たのだ。ただ、その内容を綺麗さっぱり忘れてしまったため、何の夢だったのかはわからないが。

いや、本当は夢なんて見ていなかったのだろうか。

記憶が真っ白なような、真っ黒なような。何かあるような、ないような。

不思議な空白が、わたしの中に存在していた。

「怖い夢でも見た？」

立ち上がった夫が、優しく笑ってわたしの顔を覗き込む。
身長差があるのだから、それは別におかしなことではない。いつ

ものことだ。初めて会ったときから、夫は背が高い男だったのだから。

なのに何故、今、それを懐かしく感じるのだろうか？

「……わからない」

小さく答えると、夫は黙ったまま、わたしを優しく抱き寄せた。わたしの頭を撫でる夫の手の感触に、またも奇妙な懐かしさを感じる。

これは、何？

「……ねえ。なんで今日、シュークリームを作ったの？」

胸を締め付けるような、奇妙な懐かしさと不安から逃れたくて、無理矢理話題を変えた。

夫の腕の中から一刻も早く抜け出したかったが、逆にもっと強く抱きしめてほしくもあった。

体を鍛えているくせに、夫の体温は低い。

それでも、冷たいというほどではない。

その体温が、わたしにとっては時に恐怖で、時に嫌悪で、そしていつも幸福だった。

わたしは夫を鬱陶しいしうざったいし腹立たしいと思う。もう本当に、何度コンクリ詰めにして海の底に沈めてやろうと思ったことか。結婚したことだって、何回も悔やんでいる。

しかし、わたしはそれでも確かに夫が好きだし、愛してもいる。でなければ、子どもを作る前に自殺してでも逃げている。こんな風に、大人しく抱きしめられてもいない。

どれだけ溜息をつく事態が生じて、わたしが夫といふのは——
こんなこと、絶対に口に出して言っちゃらないが——彼のことが、
世界で1番好きで、大事だからだ。

それは確かなことで、絶対に変わらない事実だ。

この妙な不安と懐かしさがあっても、この気持ちだけは揺らがない。
それは断言できる。

しかし、この奇妙な懐かしさと、不安は何なのだろう。

「ああ。梓と初めて会ったときのことを思い出して、なんとなくね。
あの日も、今日みたいに涼しい、秋の日だったから」

「え？」

夫の返答に、一瞬、意味が分からなかった。

「何言ってるの？ 要と初めて会ったのは、真夏だったじゃない」

そうだ。わたしが夫と初めて会ったのは、わたしが中学生になっ
たばかりの年の、夏休み。夏の暑い日だった。

「……ああ、そうだったね。ごめんごめん、勘違いしていたよ。あ
の日は、梓に思いっきり崖から突き落とされて海に落ちたから、そ
れで勘違いしてた。夏とはいえ、夜は冷え込んでたからね」

「……ご、ごめん……。あれはわたしが悪かったわ……」

やべえ。忘れていたかった事実を思い出してしまった。

ごめん、あれは本当にわたしが悪かった。夫だからこそ、あんな
ことがあったのに今、生きているのだ。そうでなければわたしは、
ほぼ確実に殺人者になっていた。

しかし、夫が勘違いをするとは珍しい。無駄に記憶力がいいくせに。

そう思っで見つめると、夫は優しく笑ってわたしを抱きしめた。夫の胸のあたりまでしか身長のないわたしは、そのまま奴の胸に顔を押し付ける。

綺麗な笑顔のまま、夫の顔がわたしの顔に近づいてきた。柔らかい濃い栗色の髪が頬を掠める。薄い茶色の瞳が、優しい光を称えてわたしを見つめていた。

夫の形のいい唇が、わたしの耳元で小さく動いた。

「でも、初めて会ったときから、僕は梓のことがすぐに好きになったよ」

ぞくぞくする、いい声だった。わたしが1番好きな声だ。

その言葉に何故か、声変わりをしていない、少女のような、綺麗な少年の声が重なって聞こえた気がしたが、何を言っていたのかは分からなかった。

シュークリームは、まだたっぷりある。紅茶は冷めてしまっただろうから、また淹れ直さなくては。明奈を1人で眠らせておくのは可哀相だし、心配だ。こっちの部屋に連れてこよう。

でも、もう少しの間だけ、このまま。

そう思っ、わたしは胸の中にある奇妙な懐かしさと不安が小さくなり、そして完全に消えてなくなるまで、世界で1番心地よい、夫の体温を感じていた。

温もりの記憶（後編）（後書き）

奥様は旦那様のことが、（あれだけ罵ってても）大好きなんですよ、というお話でした。

旦那様は、奥様のために張り切りすぎて大量にお菓子を作っていました。

子どもらは、たとえ父親の方が料理と菓子の腕が圧倒的に上手だろうと、母親の作ったものの方が好きだし「美味しい」と褒めます。むしろ、父親を褒めたら彼ににらまれます。

旦那様の微笑みゝ形に残るものゝ

「父さんと母さんって、なんで結婚したの？」

可愛い可愛い次男坊の質問に、僕は笑顔で答えた。

「勿論、愛し合ってるからだよ」

「嘘だ！ それはあり得ない！！ 明らかに父さんからの一方通行の愛しかないだろ！！」

失礼な。なんでそんなに必死な表情で断言するのかな、この子は。

僕の愛息子のひとりである次男坊の純は、3人の子どもたちの中で1番妻に似ている。性格とか、話し方とかが。

だからつつい構ってしまうのだけれど、やっぱり純は男の子だ。成長するに従って、妻のような反応をしてくれなくなった。まあ、それでも上2人よりは可愛い反応をしてくれるから、僕はこの子を1番構っているのだけれど。

「やっぱり母さんに聞かないと駄目か……。でも、母さんに結婚の話聞くと、いつも拳動不審になるからなあ」

「照れ屋さんなんだよ、梓は」

「うつさいこの馬鹿一目見りや違うのが分かるだろうが。父さん、あんた目が腐ってんのか？」

口の悪い子だなあ。何でこんな風に育ったんだろう。

やっぱり、父親である僕が仕事にかまけてばかりで、ちゃんと可愛がってあげられなかったのが原因かな。

「……何考えてるのかは知らないけど、父さんが今考えてることは

多分、間違ってるから」

引き攣った顔の純にそんなことを言われてしまった。相変わらず、内心を見抜くのが上手い子だ。

「それで？ いきなり結婚について聞いてくるなんて、どうしたの？」

「……分らないのなら、いいよ。別に」

「ふうん。そういえば、君の友達の十河圭太君、来月にはめでたく『遠野』圭太君になるんだってね？ 親御さんはお互い再婚になるけど、式は挙げるのかな？」

「……父さんのそういうところ、すっごい性格悪いと思う」「酷いなあ」

むっとしたように睨んでくる純に、笑顔を返す。心の底から鬱陶しそうな顔をされてしまった。

仲の良い友達から内輪だけの結婚式に特別に招待されて嬉しがるなんて、可愛いじゃないか。それで自分の両親の結婚についての話を聞きたがるところも、発想が単純で本当に可愛い。口は悪いが、性格は素直な良い子だ。

「……今、俺のこと馬鹿にしただろ」

「え？ してないよ？ 僕が純を馬鹿にするはずないじゃないか」「……………あ、そう」

疲れきったような溜息をついて、純が僕から視線を逸らした。どうしたのだろうか。

やっぱり、だんだん成長するにつれて、子どもは親に対して冷たくなっていくものなのかな。純の反応が以前よりも冷たくなった気がする。でも、妻には懐いているのになあ。これは母親と父親の差なのか、それとも、僕が仕事であまり家にいないせいなのか。

……今度、あいつらに言って長期休暇でも取るか。

「父さん、ちゃんと仕事しろよ。間違っても長期休暇なんか取るなよ？ 俺と母さんの平穩……じゃなくて、家族のためにしっかり金

稼いでこいよ！ 父さんはうちの大黒柱なんだからな」

素晴らしいタイミングで純が慌てて僕の方を向いて、釘を刺してきた。鋭い子だ。子どもをだしにして仕事をサボろうとした父親に気がつくとは。

「……あのさ、父さん。真面目な話、何で母さんと結婚したの？

それに、父さんたちってちゃんと結婚式を挙げたの？ 何でうちには、父さんと母さんの結婚式の写真が1枚もないんだよ」

訝しげな顔をしてそう尋ねてきた純に、僕は少し困ってしまった。僕と妻がどうして結婚したのかというと、それはお互いに愛し合っているから、としか言いようがないのだけれど。何でか純はそれを必死に否定するしなあ。純はまだ小さいから、人を愛する、ということがよくわからないのかもしれない。

結婚式だって、ちゃんとしたものを教会で挙げただけだ。ただ、写真を撮ることができた状況ではなかったから、写真が1枚もないだけで。妻の可愛いウエディングドレス姿は、きちんと僕の記憶に焼き付いているのだけれど。

やっぱり、結婚式の写真が1枚もないのは、不自然なのかな。

でも、あのときあれ以上教会にいたら、絶対に爆破に巻き込まれていたからなあ。

僕はせめて1枚くらいは妻と写真を撮ろうとしたのだけれど、当の妻本人が「死ぬ！！ これもう死ぬ！！ もうやだこんな結婚式あり得ない！！」っていうか結婚式って何？！ 何でわたしは今結婚式を挙げてるの？！ そもそもここは何処の国よ？！ 何でわたしは今ウエディングドレスなんか着てるの？！ ああもう、時間よ戻れえー！！」などと嬉しさのあまり壊れかけていたため、仕方なしに彼女を抱えて教会から退避したのだ。でも、そういう複雑な事情を説明して、果たして純が納得してくれるだろうか。

困ってしまった僕の顔を見て、純はとても冷たい目をした。なん

で僕を責めるような顔をするのかな、この子は。

「まあ、事情を話せば長くなるんだけどね」

「ならいい」

何で？ 自分から聞いてきたのに。

「……よく考えたら、母さんと父さんが結婚してるのは事実なんだから、結婚の動機なんて些細なもの、別にどうでもいいよな。それに、普通は花婿側よりも花嫁側の方が結婚式には思い入れがありそうなのに、母さんがあんなに結婚式を思い出さなくなさそうってことは、ろくな式じゃなかったんだろ。写真が1枚も撮れないくらい、慌しかったとか」

おや、鋭い。

でも、式自体は本当に立派なものだったんだけどなあ。

「つーか、母さんが言い淀むのは仕方がないとして、父さんが上手く説明できない結婚式って、どんだけ悲惨な式だったんだよ。逆に知りたくなかったよ。知ったら俺、凄く後悔しそう」

失礼な。

疲れきった顔の純を眺めつつ、僕はふむ、と考え込んだ。

確かに、慌しい結婚式ではあった。そもそも結婚自体、ギリギリまで妻の親は許してくれなかったし。おかげで今でも妻の実家とは疎遠になってしまっている。このことは、妻と子どもたちには申し訳ないと思っているのだ。

でも、あの人、最初に僕が妻と結婚したいって言ったときは笑って許可してくれたのに、なんで10年近く経ってから再度結婚の許可を貰いに行ったら、あんなに反対したんだろう。今でも妻とはごく偶に手紙で連絡を取り合っているくせに、僕とは会っても絶対に会話すらしてくれない。

まあ、便利な『道具』だった存在に、愛娘を取られたとでも思っているんだろうな。それにあの人、どうも最初は僕のことを女だと思っていたようだしなあ。ああ、でも、妻も最初は勘違いしていた

な。初めて会ったとき、僕のことを『お姉さん』って呼んでいたし。まあ、あの頃は自分が男でも女でも、別にどっちでも良かったから気にはしていなかったんだけど。

うーん。妻はあんまりロマンチストではないにしろ、それなりに結婚式に色々夢と希望を持っていたのかもしれない。

当時は結婚願望なんて欠片もなさそうだったから気にしなかったものの、よく考えたら、彼女の希望をあまり聞かなかった気がする。申し訳ないことをしたなあ。一生に1度きりのものなのに、写真が1枚もないのは、確かに不自然、というよりも妻がかわいそうかもしれない。

……もう1回、結婚式、挙げ直そうかな？ 今度はちゃんと、妻の希望を聞いて。別に式は1回しか挙げてはいけない、なんて決まりはないんだし。ふむ。

「……父さん、また、何かろくでもないこと企んでるだろ」

「ええ？ どうしてそうなるのかな。ただ、もう1回くらい結婚式を挙げ直してもいいかなあ、と思ったただだよ」

「……別に止めはしないけど。母さんにまず許可を貰ってから行動しろよ、それ」

父さんが1人で行動したら、恐ろしいことになる……などと酷いことを言う純の頭を撫でてやりながら、どうしてこの子はこのなにお母さんっ子になってしまったのだろうか、と考える。

マザー・コンプレックス——通称マザコン、などという極端なものではないし、別に「僕は将来お母さんをお嫁にする！」などと、思わず生きたまま瓶詰めにして地中深くに埋めてしまいたくなるような戯言を言う子ではないんだけれど。

こんなにも僕に冷たくて、妻に優しいのは何故だろう。いや、理由もなく純が妻に冷たくしたら怒るけど。でもなあ。

「……父さんが今、何を考えているのか、なんとなく分かる気がする

る」

大人しく頭を撫でられたまま、純が僕を見上げて、冷たい表情で言ってきた。

昔は泣き喚いて僕から逃げていたのに、最近では上手くあしらわれてる気がして、父親としては子どもの成長が嬉しい反面、何だか少し寂しくもある。

「ふうん。何を考えていると思う？」

「どうせ、俺が父さんより母さんに優しいのは何でだろう、とか考えてるんだろう」

「おや。さすがは、純。よく分かっている。」

「……理由、教えてやろうか？」

純は冷たい目をしたまま、そんなことを言ってきた。

「うん。知りたいな」

「……なんで父さんが分かってくれないのか、俺にはそっちの方が分からないけどね？」

いったん口をつぐんで目を閉じた純は、次の瞬間、カッと目を見開いて、いきなり僕に掴みかかってきた。こちらから。

「あのなあ！ 母さんは、俺をこんな謎の部屋に閉じ込めたりしないの！！ まともなの！！ あんたよか優しくしたくもなるっての！！ ここ、何処なんだよ？！ 朝だと思って目が覚めたら、全然見覚えのない真っ暗な場所に寝巻き姿で転がってた俺の気持ち分かるか？！ どうせ分からないんだろうが、この馬鹿親父！！」

「ああ、なんだ。純、やっぱり怖かったの？ 悲鳴もあげないから、てつきり平気なのかと」

「悲鳴をあげなかったんじゃないかってあげられなかったんだよ！！ 絶句してたの！！ 驚きすぎて声もあげられなかったの！！ それくらい分かれよ、馬鹿！！」

「そうなの？ それにしてはやけに冷静に部屋を調べてたから」

「十分混乱してたよ！！ パニックだったっての！！ 俺は姉ちゃ

んや兄ちゃんじゃないんだから、夜目は利かないんだよ！！目が慣れるまで全然何も見えなくて困ったんだよ！！　　つーか今でもぼんやりとしか認識できてないんだよ！！」

「そうなの？　でも、ここには危険なものは何もないから、大丈夫だよ」

「あんたの大丈夫は一般的に言って十分危険なんだよ！！　あてになるか！！」

「本当に大丈夫なんだって。」

それに、純をびつくりさせようと思って気配を殺して目が覚めるのを待って、それから背後から近づいて声をかけたのに、純、全然驚かなかったじゃないか。むしろ、第一声が悲鳴でもなく朝の挨拶でもなく、『父さんと母さんって、なんで結婚したの？』だった僕の方がびつくりしたよ。そんなに十河圭太君に心を奪われてるの？」

「気持ち悪い言い方するな、この変態が！！　確かに圭には結婚式に招待されたけど、それよりあんたの顔を見た瞬間に、俺みたいな小学生をこんな場所に放り込んで様子を伺うような根性悪の鬼畜外道な男と、あんな常識的な母さんが何で結婚したのか疑問に思ったんだよ！！　　ついでにあんたと俺が血が繋がっていることが、本気で信じられないんだよ！！　今日、平日だぞ？！　俺、普通に学校あるんだぞ？！」

「あ、それは大丈夫。病欠の電話、学校に入れておいたから」

「てめえ義務教育舐めてんじゃねえー！！」

「ちなみに今、朝の１０時半ね。純、よく寝てたねえ。ちよつと薬に対する耐性、つけた方がいいね。駄目だよ、僕の作った料理とかお菓子とか僕が淹れたお茶とか、油断して飲み食いしたら」

「息子に薬盛ってんじゃねえよ！！　　というか、父親の作ったものを安心して口にできない家庭って何なんだよ！！」

「とても温かい家庭だよね」

「てめえ１回地獄に堕ちろ！！　むしろ宇宙人にでも浚われる！！　それで頭かち割って脳みそを宇宙人のものと交換してもらえ！！」

今のてめえの脳みそより宇宙人の脳みその方がよっぽどまともだよ――！

「酷いなあ。ほらほら、落ち着いて。宇宙人なんて何処にもいないからね。いい子、いい子」

「この状況で落ち着いてられる奴は姉ちゃんと兄ちゃんくらいだよ――！ それに、てめえみたいな非常識な人間がいるくらいなら宇宙人くらいいるはずだろうが――！ 大体、母さんはなんでてめえを止めなかったんだよ――！」

「こらこら、お父さんのことを『てめえ』なんて呼ばないの。まだ『あんた』の方がまだよ。

……梓は、朝、起きれなかったんだよ」

子犬のように可愛らしくきゃんきゃん喚く純を宥める。よしよし、ちよつと落ち着いてきたね。

「……母さんに、なんかした？」

「別に、何も？ 疲れてたみたいだよ」

まあ、僕が疲れさせたんだけど。

でも、特別なことは何もなかったしな。妻は元から、僕より全然、体力ないからね。

「……………」

「本当だつて。疑いの目で見ないでよ。僕が梓に薬を盛るわけないじゃないか」

「息子には盛るくせに……」

「僕の血を引いてるから大丈夫だよ。あ、ちなみに、僕が純を抱えて家を出るのを止めなかったのは優吾だからね？ 『一緒に行く？』って聞いたら、無言で目を逸らされてしまった」

「兄ちゃんの薄情者――！！ せめて俺か母さんを起こせよ――！！」

「アレは昨日、義之君と和之君の家に泊まってたしね。義之君、アレみたいな娘でも息子の嫁にぜひって言うてくれるんだから、いい

人だよね。和之君もいい子だし」

「姉ちゃんのアホー！！ もうさっさと嫁に行っちゃえー！！」

「ほらほら、純、落ち着いて。いい子、いい子」

また興奮してしまった。困ったな、いつもは姉と兄の悪口なんて言わない子なのに。

とりあえず適当に宥めながら純の頭を撫でまくっていたら、純もだんだんと落ち着いてきた。

叫びすぎて肩でゼーはー言っている純は、疲れたような顔で僕から視線を逸らしたまま、「それで？」と聞いてきた。

「結局ここ、何処なの？」

「地下室だよ。家からはちょっと離れた所にある街の、普通のビルの地下8階の一室」

「普通のビルに地下8階なんて存在しねえよ！！ 空調管理とかどうなってるんだよ！！ 意味分かんないっての！！」

「まあまあ、落ち着いて。そういう細かい設備については、後で説明してあげるから。とりあえず、純にはここにある『鍵』を外してもらいたくてね。それで、連れてきたんだ」

喚く純の手を取って、部屋の東側の壁の方へ連れて行く。僕は別に灯りなんて必要ないのだけれど、純には必要なようだからポケットからペンライトを取り出して、スイッチを入れて純に『鍵』を見せてやる。純は軽く目を見開いて、それから怪訝そうな顔をして僕を見上げた。

「……これが、『鍵』？ 俺には普通のノートパソコンに見えるんだけど。父さんが俺に頼むってことは、違うんだろ？」

賢い子だな。いい子、いい子。

僕は壁際の床に無造作に置かれている、一見普通のノートパソコンを開き、電源を入れた。

パソコンもどきのモニター部分には通常の起動画面ではなく、真

つ 白い空間がただ広がっている。

「……何かに繋がってるの？ これ」

「うん。無線だけだね。他に8個の『鍵』があって、それは全部僕が外した。でも、これは僕では外せないようになってるんだよ」

「父さんでも無理なの？」

「僕 でも 無理なんじゃなくて、僕 では 無理なんだよ。だから、純に頼むんだ。これ、外してくれないかな？」

僕の言葉に、純は少しだけ目を細めて僕を見つめた。

ああ、この顔。純のこういう顔は、本当に妻にそっくりだ。

妻は僕のことをいつも否定するくせに、それでもいつだって、僕を見極めようとする。

「……わかった。ちょっと、時間がかかるかもしれないけど、いいよ。待つてるから」

電源以外には全部で60個しかない正方形の無印のキーを、床に座り込んだ純がリズムミカルに叩く。画面に映る真っ白な空間には、たくさんの平仮名と数字の羅列が螺旋状にびっしりと並び、点滅しては消えていく。

黙々と作業をしながら、純が突然ぼそりと呟いた。

「父さんって、俺と母さんに、嘘ついたことある？」

僕は少しだけ驚いて、『鍵』を外すのに専念しているはずの純の背中を見つめた。

突然、どうしたんだろう。

「純にも梓にも、嘘なんてついたことないけど？」
当たり前じゃないか。

「……じゃあ、俺と母さんに黙ってることは？」

僕は、キーを一定のリズムで叩き続ける純の、小さな背中を見つめた。

子どもたちの中で、1番妻に似ている子ども。1番、僕の血が薄い子ども。

鋭い子ではあるけれど、それはいいことなのか、悪いことなのか。優吾は体質だから仕方がないとはいえ、純はなあ。

「そうだねえ。梓や純から直接聞かれない限り、話すつもりがないことは、いくつかあるけどね」

一応、正直に答えておく。

僕は基本的に、嘘はつかない。ばれたとき、嫌われてしまうのが怖いから。

「ふうん。……母さんと俺が何かを『誤解』してても、俺たちが父さんに確かめない限りは、父さんはその『誤解』を『真実』のままにしておくんだ？」

卑怯者。

そう言われた気がした。

本当に口が悪い子だ、と思わず苦笑する。でも、素直な良い子だ。自分と母親のことではなく、僕のことを心配してそう言ってくれている。純はともかく、確かにいくつかの事実については、黙っていたことが妻にばれたら、離婚される恐れがあるからねえ。

でも、僕からは言わないよ。ごめんね、純。『誤解』のままの方が、いいこともあるんだよ。

例えば、妻が初めて僕に会ったときのことか、ね。

「……まあ、いいけどさ。何にしろ、父さんが変態鬼畜外道ろくでなしの最低男なのは変わらないし」

「酷いよ、純」

優しさの欠片もない評価だ。

どうしてそこまで僕に冷たく出来るんだろっ、この子は。こんなに可愛がっているのに。

それから20分ほどかかって、突然ピーツという電子音がして、画面が真っ暗になった。

純はいつもと変わらない表情で僕の方を向いて、「多分、外れたと思う」と言った。

僕は上着のポケットに仕舞い込んでいた、金属製の小さなケースを取り出した。切れ目が全くない、ただの直方体だったそれを軽く振ると、上部の平面部分が音もなく外れて、中から奇妙な形にひしやげてしまった銀色の金属片が出てきた。

「……何、それ？」

不思議そうな純に、にっこりと笑顔を返す。途端に心底嫌そうな顔をされた。

おかしいな……。この子はなんで、僕が笑いかけただけで嫌がるんだろう。

「これはね、思い出の品なんだよ」

銀色だが、銀で出来ているわけではない。元々はサイコロ状の物体だったものの一部だ。

本当は僕がずっと持っているつもりだったのに、以前、手癖の悪いネズミに取られてしまったのだ。慌てて取り返したのはいいんだけれど、その時には既に、こんな面倒な『鍵』をかけられてしまっていた。

「何の思い出なの？」

「僕と梓が初めて会ったときの思い出。でも、梓には内緒だよ」

優しく言くと、純は一瞬だけ嫌そうな顔をして、それでも素直に頷いてくれた。よしよし。

「……母さん、ほんとに、なんでこんな変態鬼畜外道ろくでなしの最低最悪非常識男と結婚したんだか」

あれ。なんか僕の悪口、さっきより増えてない？

「大体、なんでいきなり、俺にこんなことさせるんだよ。ちゃんと

説明してくれたら、俺だって素直に手伝うよ。まだ幼い息子に薬を盛って眠ってる間に拉致して謎の部屋に放り込んだりするから、人間として全然駄目なんだよ、父さんは」

「だって、そっちの方が面白そうだったし」

「息子で遊ぶんじゃないやねえよ！！ この馬鹿親父！！」

「ああもう、怒らない、怒らない。ほら、そろそろ帰るよ。でないと、すぐに面倒くさいのがここに来るからね」

「いうか、今、この部屋に何体か向かって来てるな。面倒なのが。」

「……聞きたくないけど、一応聞いとく。それ、人間？」

残念。人間がよかったのか、純は。

「いや、犬だね。一般的な大型犬より少し大きくて、かなり賢くてとっても獰猛な奴」

見た目、ちよつと化け物みたいな犬だ。あんまり可愛くない。

「俺みたいな無力な小学生をそういう危険なのがいる場所に連れてくるなよ！！」

「だって、ねえ。ここに『鍵』があったからさ」

「だってとか言うな、いい年したおっさんが！！ とつと家に連れて帰れ！！ 大体、俺まだ寝巻き姿でおまけに裸足だろうが！！」

「ごめんよー。そんなに怒らないで。じゃあ、行くよ」

純を右腕で抱えあげると、これ以上ないというくらい嫌そうな顔をされた。

無言だったが、純は目で「変態に抱き上げられてしまった……」。

何という屈辱」と言っていた。酷い。

上着のポケットに思い出の品をそつと仕舞い、『鍵』だったパソコンもどきを蹴り潰して、さっさと部屋を出る。

部屋の中と同程度の暗さの地下通路を見て、純が「何も見えない……」と小さく溜息をついたのがわかった。そうか、純には見えないのか。よしよし、それは好都合。実はあんまり綺麗じゃないんだよね、ここ。臭いはしないけど、色々と青少年の健やかな成長には相応しくないモノが、壁に沿って多数展示されているのだ。

足音を立てずにさっさか歩きながらも、下の階から全部で15体の犬が来るのが分かった。

歩みを止めずに、僕はとりあえず、今の時点での最大の懸案事項について、純に伺いを立ててみた。

「ねえ、純」

「なんだよ、最低親父」

酷い。『馬鹿親父』の方が言い方がましに思えるのは何故だろう。もう1回結婚式を挙げるとしたら、梓には白無垢がいいと思う？それとも、やっぱりウェディングドレス？ 梓の衣装で神前か教会かが決まるんだけど」

「……………母さん、どちらも本気で嫌がると思う。『この年で、しかも子持ちで今更そんなもん着れるか』とか言いそう」

「そうかな？」

「そうだよ……………」

本気でもう1回式挙げる気かよ……………と力なく呟く純に、僕は頷いた。

最初の結婚式も十分立派で印象深い式ではあったんだけど、やはり何か、形に残る思い出がほしい。

妻が頷いてくれれば、すぐにでも準備しよう。今度は最初の時のように海外ではなく、国内での式がいいかな。

内輪で盛り上がるだけの、些細なものでいい。最初の式のときのように、爆破とか崩壊とか大乱闘とかが起きたら、それはそれで思い出深くはなるけれど、また写真が撮れなかったら困る。そういえば結婚後、妻は感激のあまり1週間ほど放心状態だったしなあ。

妻の誕生日は勿論、結婚記念日にも絶対に仕事を入れない僕だけれど、次の結婚記念日に長期休暇をとって、もう1度式を挙げ直すのもいいかもしれない。

僕は妻の喜ぶ顔が大好きだが、彼女の迷惑そうな顔も絶望した顔

も大好きだ。

『もう1回結婚式を挙げたくないかい?』という僕の言葉を聞いた瞬間の、妻の引き攣った顔を見ること。そして、その後の彼女の絶叫やパニック状態を見ること。

それが実は、1番の楽しみだったりする。

でも、さすがにこれは純には内緒だ。知られてしまったら、また貶されてしまうから。

僕は微笑んで、あまり可愛くない犬共に追いつかれないように走り出した。

旦那様の微笑みゝ形に残るものゝ（後書き）

木崎家の旦那様はこんな人です。考え方は割と普通の人です。

彼が言っていた『義之君』とは、明奈の恋人・和之の父親で木崎家夫婦の友人です。明奈は三条家にお泊り（超健全）する際には、家事を完璧にこなして感謝されています。

純は父親といると年相応の常識人です。事なかれ主義の優吾はその後1週間、弟に無視され続けました。

【番外編】ハロウィンな木崎家の人々（１）（前書き）

時間軸とか、１０月３１日までの間にあった話とか、割と無視した適当な番外編です。温い目で見てやってください。

【番外編】ハロウィンな木崎家の人々（１）

三条和之&木崎明奈編

「Trick or Treat!」

ハロウィン。

俺の曖昧な記憶によれば、確か本来、１１月１日の前夜に行なわれるカトリックの祭りだったはずだ。

仏教徒の俺には、あいにく無関係な祭りである。実際には何のために行なわれている祭りなのかも、よく分からない。子どもたちの仮装にも、ちゃんと意味があるんだっけ？　ちよつと調べればわかるのだろうか、俺は別に、興味は無い。

まあ、神様仏様悪魔に天使、幽霊妖怪宇宙人、果ては超能力者や魔術師などの人外（？）の存在が、大なり小なり、国民に色々な形で愛されている日本だ。特に必要でない限り、この国において、ハロウィンの正しい趣旨を理解する必要はないだろう。

要は、騒いで楽しめればいいのだ。参加して悲しくなったり虚しくなったりする祭りなら、俺も断固拒否するが。

でもって。

ハロウィンは、楽しい祭り……だよな。うん。

俺——三条和之は目の前にいる恋人の、見る者全てを魅了する可愛すぎる笑顔につられて顔を綻ばせながら、そんなことを思った。

ありがとう、日本の寛容かつ柔軟な文化よ！　そして、その発展に力を注いできた人々よ！　商業戦略だろうが、自分の欲を満たすためだろうが、目的はどうでもいい。俺は今夜、貴方たちに、心の

底からの感謝と敬意を捧げます！！

「ほら、和之。早くお菓子をくれないと、悪戯してしまうよ？」

どうぞ、ご自由に。むしろ、是非。

思わずそう言いたくなってしまうほど、可愛らしさと色っぽさが見事に融合した猫耳魔女っ子スタイルの明奈が、俺を見上げてちょっと拗ねた表情をしていた。

日本・万歳！！俺は今日、初めて『猫耳』と『魔女っ子』の素晴らしさがわかったよ！！これ、ほんと可愛いな！！しかも凄い威力だ！！今まで俺、正直こういうの馬鹿にしてたけど、認識を改めるよ！！

10月31日、午後9時過ぎ。

俺の家に突如として現れた来客は、猫耳魔女っ子スタイルの俺の恋人——木崎明奈だった。

明奈が日本に帰って来ていることを知らなかった俺は、彼女の突然の来訪に仰天した。

というか、彼女の格好と第一声に驚いてしまったのだ。

明奈、その服とアイテムはどうしたんだ！！ミ、ミニのスカートとか、普段は絶対に履かないくせに！！

明奈のふわふわした茶色い髪、その頭のでっぺんには、真っ黒でふさふさした毛並みの猫耳が、ばっちり装着されていた。

そして、明奈の完璧なスタイルがよく分かる、体にフィットする形状の黒い魔女の服。

ハイネックの首元から覗いている、腰の辺りまである長さのマントを留めている銀色のリボンとは別の、紺色の紐。あれは多分、明奈が背中にやっているトンガリ帽子についているものだろう。

明奈の着ている魔女服（というのか？）は、ノースリーブだった。

明奈、寒くないのか……とは聞くまい。聞くだけ無駄だ。俺は明奈が暑がっている姿も、凍えている姿も、見たことが無い。昔、真冬に実の父親である要さんを氷の張った湖に突き落として、ついでに自分も落っこちた際にも、明奈は震えてすらいなかったのだ。考えるだけで俺の常識が喪失しそうだから、敢えて無視しよう。

ノースリーブから伸びたしなやかな腕——実は成人男性を一振りで吹っ飛ばす凶器でもある——の部分は、二の腕半ばまである長さの、ピッタリとした形の黒い手袋を嵌めていて、左腕には茶色い編籠を下げていた。

そして、明奈の……その、何ていうか……。ほら、あれだ！女性の美しさの一部である、あの、素晴らしく形のいい魅惑の膨らみの部分！！その下のほっそい腰のくびれ、そこできゅっと絞られた、フリルがたっぷり付いたスカートは、明奈の白く柔らかそうな——実際には一蹴りで成人男性を吹き飛ばすことができる、恐るべき力が秘められている——太ももを半分しか隠していない、ヒラヒラしたスカート！

明奈のミニスカートなんて、いつぶりだろうか……。普段は、絶対に膝の上まである丈なのに！その下から見える、太ももまでの長さのピッタリとした黒いロングブーツとの対比が……！絶対領域って、このことが……！！

俺がそんなことを考えているのを知ってか知らずか、明奈は形のいいぷっくりとしたピンク色の唇を軽く尖らせて、右手を俺に向かって差し出してきた。

「ほら、和之。悪戯されたいの？」

早く、早くと菓子 の催促をしてくる明奈に、俺は慌ててポケットを探った。幸い、ジーパンのポケットの中に、ミントガムが1枚入っていた。

明奈からの悪戯も、かなり心惹かれるが……ここは我慢だ。いい意味で絶叫する羽目になる確率が6割、悪い意味で絶叫する羽目に

なる確率が4割。

せめて8：2くらいの割合でないと、明奈の悪戯に臨むのは無理だ。チキン野郎の俺の場合、まず自分の精神面での安全が優先される。

「ほらよ。こんなしかないけど」

「ありがとう！」

たかがガム1枚に、天使のような笑顔を見せる明奈。もうほんと、めっちゃくちゃ可愛い……。

……じゃなくて。

「明奈、今日はいつ帰ってきたんだ？ 急に家に来るなんて、驚くじゃないか」

いつもは日本に帰ってくる際、必ず俺に入る帰国の連絡が、今日 wasn't. なんでだ？

すると明奈は、右手に持ったミントガムを大切そうに籠の中に仕舞いつつ、少しだけ照れたように微笑んだ。

「うん。和之を驚かそうと思って。びっくりしただろう？」

「そりや確かに、びっくりしたけど……」

「それに、すぐに向こうに戻らなきゃいけないんだよ。正味3時間くらいしか、こっちにすることができないから」

「3時間?!」

短い!! じゃ、もうすぐに日本を経つてことか？ せつかく、そんな可愛い格好してるのに!!

俺が残念に思っていると、明奈はにっこりと笑って、「それで？」と言ってきた。

「和之は、わたしに他に言うことはないの？」

その言葉に、俺は暫し考えて、それから口を開いた。

「お帰り、明奈。その格好、すっげえ似合ってる。ほんとに可愛い。ええと……あと、『Trick or Treat』？」

猫耳魔女っ子明奈は天使のように微笑んで、左腕に下げていた籠

の中から、黒い物体を取り出した。

……ちよつと待て、明奈。それは、違う。食い物でも、悪戯に使っていい道具でもない。

「おい……。それ、違うだろ」

「あつ、ごめんごめん。間違えた。こっちだよ。はい、和之」

思わず顔面の筋肉が引き攣ってしまった俺による指摘を、明奈は何事もなかったかのようにサラリと流した。そして、日本では一般人の所持が法律で禁止されている危険物を籠の中に仕舞い、代わりに可愛らしくラッピングされた包みを2つ、取り出した。

何故そんな凶器と一緒に食い物を入れるんだ、とか、他に何かマズイもん持ち運んでやしないだろうな、とか、色々と思つたものの、それ以上は考えるだけで怖いので、俺は何も見なかったことにした。平和主義・万歳！！

「こっちが和之の分で、こっちがおじ様の分だからね。おじ様、今日は家にいないんだろう？」

2つの包みのうち、一回り大きい方が俺の分だった。この大きさの差に、明奈の愛を感じる俺って馬鹿なんだろうか。

「ああ。父さん、会社の人に誘われて、隣の県の温泉に1泊旅行に行ってるんだよ」

明奈は俺の父さんのことを『おじ様』と呼ぶ。昔は『かずゆきくんのお父さん』だった。それがいつの間にやら……。

明奈に『おじ様』と呼ばれて相好を崩している父さんは、別に変態親父には見えないんだが……なんか、微妙だ。うーん。まあ、いいんだけどさ。

「へえ。じゃあ、おじ様によろしくね。それ、わたしの手作りだから、味は期待してくれていいよ」

謙遜する必要のない料理の腕前をもつ明奈は、そう言って自信満

々に笑った。可愛いなあ……。

……駄目だ。俺、だいぶ思考がアホになってきている。恐るべし、ハロウィン。恐るべし、仮装……というか猫耳魔女っ子。

明奈は自分の頭に装着している猫耳を軽く弄りつつ、「じゃ、もう行くよ」と言った。

「……もう、行くのか？」

「うん。いったん家に帰って着替えてから、すぐに日本を発つよ。

次は1か月くらい、帰って来れないかもしれない。でも、ちゃんと連絡するからね」

「ああ。……怪我、するなよ？」

「わかってるよ。わたしを誰だと思ってるの？」

愚問だ。破壊神にかなり近い天使である、俺の可愛い恋人の木崎明奈様だよな。

しかし、1か月か……。やっぱ少し、寂しいな……。

そんなことを思っていると、明奈が右手をちよいちよいつと動かして、俺に屈むように指示してきた。

明奈を覗き込むようにして素直に身を屈めてやると、明奈は自分の頭に装着していた猫耳……の力チューシャを外して、俺の頭にすぽつと被せてきた。

「ふふつ。可愛いよ、和之」

「……そりゃ、どーも」

何なんだ……？ 明奈の下の子である純のような美少年が被れば、そりゃ、男の猫耳スタイルでも可愛いんだろうが……。身長が180センチを超えている、平凡な面した男子高校生が猫耳つけても、普通に痛いだけだと思うんだが。むしろ、視覚の凶器だな。うん。

しかし、背中にやっていた魔女のトンガリ帽子を被りなおした明奈は、俺の猫耳スタイルがえらくお気に召したらしい。満面の笑みを浮かべて、よしよしと俺の頭を撫でている。

……なんだかなあ。いいのかなあ、これ。かなり痛い子じゃないかな、今の俺。

少しだけ切なくなっていたら、不意に明奈が俺の頭を撫でるのをやめて、そのままぐいっと俺の頭を引き寄せた。

驚いて声をあげかけた俺の唇は、すぐに明奈の柔らかくて温かな唇に塞がれた。

明奈のしなやかな両腕がいつの間にか俺の首にまわされて、心地よい強さで締め付けられた。

俺は咄嗟に明奈の腰と背中腕をまわして、バランスを崩して倒れそうになった自分の体を支えた。……彼女の体を使って自分の体を支える彼氏って、どうなんだろう。俺のほうが体重、重いはずなんだけどな……。

というか、左手に持っていた明奈手作りの菓子を、危うく落つことしそうになったんだが。明奈、こういうことするなら、事前に予告してくれ。

密着した明奈の体は柔らかく、甘くていい匂いがした。明奈の背中にまわした俺の右手に、彼女のふわふわとした髪の毛があたって、妙にくすぐりたい。

始まりは唐突だったくせに、明奈のキスは激しいものではなく、優しいものだった。何度も何度も、柔らかい唇が俺の唇をそつと塞ぎ、離れていく。

それが3分くらい続いたあと、明奈は俺の首にまわしていた両腕を外して、それからぎゅうつと俺に抱きついてきた。俺も明奈の体を抱きしめ返してやる。

……ここで、俺の胴体を締め上げないように気を遣ってくれているあたり、俺は明奈に愛されているんだなあ、と感じる。明奈の父親である要さんを彼女が抱きしめるときは、要さんの体からミシミシという、本来ならば聞こえてはいけはずの音が聞こえるのだ。恐ろしい。

「……和之。今年のクリスマスは、一緒に過ごそうね」

「わかってるよ。待っててやるから、ちゃんと帰って来い」

俺の胸元でくぐもった声をあげる明奈の背中を、優しく叩く。顔を上げた明奈の顔は僅かに頬が上気していて、とびきり可愛かった。くるんとカールした長い睫に縁取られた、明奈の茶色い瞳。その中に、俺の顔が映りこんでいる。

「うん。……じゃあ、またね。和之」

「ああ。気をつけてな」

俺から離れていった明奈の体温に一抹の寂しさを感じつつ、俺は笑って彼女に手を振った。

明奈は俺に笑顔で手を振り、来たときと同じように帰って行った。俺の部屋——2階のベランダから音もなくヒラリと飛び降りて、文字通り『風のように』消え去っていったのだ。

流石に、人目につかないように行動するのが上手いな……。まあ、今日の明奈の格好はめちゃくちゃ可愛かったから、他の奴には絶対に見せたくないんだが。

そんなことを思いながら、俺はベランダの窓とカーテンを閉め、明奈からもらった菓子の包みを開けた。

中にはクッキーがぎっしり入っていて、一口齧ると、口の中にふわりとカボチャの甘さが広がった。

お化けやらカボチャやらの形をした、オレンジっぽい色の可愛い形のクッキーを口に放り込みつつ、俺は何気なく部屋のクローゼットについている姿見を見て、溜息をついた。

野郎の猫耳はないわ、やっぱ。明奈……これ見て「可愛い」とか言えるお前の感性、独特だよ……。

姿見に映った俺の猫耳スタイルは………かなり、痛かった。

「……っか、この猫耳、俺にどうしろと……？」

保存しとかないと駄目なんだろうか。というか、これ、俺用だったのか？ 何故俺につけたままなんだ、明奈。

俺はこのとき、今年のクリスマスに、真っ白いウサ耳をつけてミニスカサンの格好をした明奈に、天使のような笑顔でトナカイの着ぐるみを着せられる事態が生じることなど、予想だにしていなかった。

そして、俺のそうしたコスプレを『させられる』様子が高性能の隠しカメラでバッチリ撮られており、明奈がそれをコレクションしている事実は、更に後になって知ることとなる。

誰だッ！！ 明奈に変な趣味植えつけた奴！！ 出て来いコラー！！

野中夕子&木崎優吾（+狩野敏行）編

「トリック・オア・トリート！」

突然のあたしの言葉に、木崎君はきよとした顔をした。えへへ、びっくりしてるね！ さあ、どう反応するのかな、木崎君！

10月31日、午後4時過ぎ。

部活から帰宅したあたし——野中夕子は、いつものようにお母さんに頼まれて、おじちゃん——狩野敏行さんの家に、夕ご飯のおかずのお裾分けにやって来た。

そのとき、おじちゃんの家遊びに来ていたのが、おじちゃんの年の離れた友達で、あたしの同級生である木崎優吾君だった。

木崎君は玄関に出てきたおじちゃんの後ろからやって来て、あた

しに「まあ、上がっていきなよ」と言ってきた。最近わかったんだけど、おじちゃんと木崎君って、年が離れてるのに、すごく仲が良い。お互いに遠慮がないっていうか……対等な友達関係を築いているのだ。普通、こういうのって家主であるおじちゃんが勧めるじゃない？ でも、木崎君はいつも通りの顔で、淡々とそう言ったのだ。おじちゃんも反対せず、「夕子ちゃん、せっかくだからゆつくりしていつてよ」と言ってくれたので、あたしはありがたく、おじちゃんの家にながらせてもらった。

縁側がある、庭に面した8畳くらいの部屋で、あたしと木崎君、それにおじちゃんは仲良く談笑していた。

そこで、あたしはふと思い立ったのだ。

今日は10月31日、ハロウインの日。部活が終わったあと、部室で部員の皆とお菓子の交換をしたんだけど、おじちゃんや木崎君はハロウィン恒例の文句——『お菓子をくれきや悪戯しちゃうぞ？』にどうという反応を返すんだろう。気になるなあ。

ここはいつちよ、確かめてみよう！

そう思っ、ちゃぶ台を挟んであたしの右隣に座っていた木崎君に、最初に声をかけてみた。「トリック・オア・トリート」ってね。さてさて、木崎君はどんな反応をするのかな？

「……ああ……。今日、ハロウィンか」

ぽそつとそんなことを呟いた木崎君は、そのまま自分の後ろに置いてあった黒いデイバッグを開けて、何やらごそごそしていた。

そして、

「はい、野中さん」

あたしに、小さな箱を1個くれた。

「え……。これ、お菓子？」

「うん。姉さんが昨日の夜、大量に送りつけてきたんだよ。多分、中はクッキーだから」

「へー……。あ、ありがとう」
「うん」

何てことない、普通の表情をしている木崎君。きょとんとしたのは一瞬だけだった。

うーん、木崎君がまさか、お菓子を持って来るとは思わなかったな。もつとうるたえるかと思ったのに。残念。でも、今日が八口ウインだつてことに気がついてなかったのか……。日本のお祭りではないから、木崎君は関心がなかったのかな？ お盆とかについては、すごく詳しくあったのに。

木崎君があたしにくれた包みは、両手に乗るサイズの正方形の箱だった。夜空の柄をした包装紙で、綺麗に包まれている。

軽く振ってみると、ガサガサと小さな音がした。そんなに重くないけど、中はギッシリ詰まっているみたい。

木崎君のお姉さんは高校に行かず、もう働いているらしい。別に木崎君の家が貧乏だとか、そういうわけではなく、お姉さんは自分の夢のために頑張っているんだそう。しかも、海外の仕事がメインだつていうんだから、凄いなあ、と思う。きつと、素敵なお姉さんなんだろうな。小学校のとき、ちゃんと観察しておくんだつた。そんなことを思いながら、あたしは次に、ちゃぶ台を挟んであたしの左隣に座っていたおじちゃんの方を向いて、「トリック・オア・トリート！」と言つた。

おじちゃんは笑つて、おじちゃんの後ろにある棚の上の団からお煎餅の入った四角い缶を取り出すと、「ほら」と言つて、あたしにそれを寄越した。つままない反応だ。もつとこう……。盛り上がつてくれないかなあ。

それにしても、家主のおじちゃんとはかく、木崎君は絶対にお菓子なんか持つてないと思つただけだな。別に、木崎君に悪戯してやろうと思つてたわけじゃないけど、ちよつと慌てる木崎君を見

てみたかったのに。

木崎君から貰ったクッキーの箱を膝の上に乗せて、おじちゃんから寄越された缶の蓋を開け、中のお煎餅をバリバリかじりつつ、ほんとにつまんないなあ、盛り上がり欠けるなあ、と思った。

「野中さん」

「ん？」

木崎君の呼び声に、あたしは彼の方を向いた。

醤油味のお煎餅を半分口に突っ込んだまま、という間抜けなあたしに、木崎君はにっこりと微笑んだ。

き、木崎君の微笑みっ！……などどぎまぎしていたら、木崎君はあたしに右手を差し出して、一言。

「Trick or Treat」

「……………へ？」

バキンツと口に入っていた部分のお煎餅を噛み砕いて、残りの半分を右手に持ったまま、あたしはとっても間抜けな返事をしてしまった。

……えっと。今、木崎君があたしに向かって言った、流暢な英語の意味は……………。

「聞こえなかった？『Trick or Treat』だよ、野中さん」

き、聞こえました！木崎君、相変わらず発音が完璧だね！力タカナ英語に聞こえないよ！

……じゃなくて。な、なんで急に？！

「ほら、野中さん。早くお菓子をくれないと、悪戯しちゃうよ？」

にっこり笑顔が眩しい木崎君。

え、ちよつと待って！木崎君、今日がハロウィンだって、さっきまで気づいてなかったよね？！おじちゃんと2人して、あたしのことをアツサリあしらったよね？！おじちゃんへの差し入れのタッパ―以外、明らかに何も持っていないあたしに向かってお菓子

を要求するなんて、どう考えてもおかしいよね？！

突然の「悪戯しちゃうよ」発言にパニックになったあたしを面白そうに眺めていた木崎君は、あたしに再び声をかけてきた。

「野中さん？」

「あ、あの、あたし、お菓子持っていないんだけど……」

「うん。それは知ってる」

「は……？」

「じゃあ、悪戯決定ね」

「へっ？」

あ、あたしがお菓子持っていないこと知ってて言ったの？！ 薄々気がついてたけど、木崎君、案外いじめっ子だよね？！

木崎君の「悪戯決定」発言にあたしが大混乱しているのに、そんなことにはお構いなしで、木崎君はあたしのすぐ近くにまで近寄ってきた。そして、綺麗な真っ黒い瞳を細めて、あたしの顔の方に両手を伸ばしてきた。

な、なんかよくわかんないけど、木崎君の悪戯は怖い！！ ないとは思うけど、「ユ」から始まって「イ」で終わる、4文字の恐怖の存在をくつつけられるかも！！ 今日、ハロウィンだし！ いつもより、そういうのがいっぱいフヨフヨと漂ってそう！！

頭の中がおかしな状態になったあたしは、木崎君の両手の指先があたしの顔に到達する寸前に、彼の綺麗な形をした唇に、右手に持ったままだったお煎餅の残りを押し込んだ。

木崎君は軽く目を見開いて、動きをピタッと止めた。それから僅かに眉を寄せて、あたしが口の中に押し込んだお煎餅を咀嚼した。た。

「お、お菓子！ あげたから、悪戯はなしだね？！」

座ったまま、木崎君から距離をとるように、ずりずりと後退する。

人から貰ったお菓子をあげるのって、駄目なんだっけ？ セーフだよな？ 今回はセーフでいいよね？！

ていうか、悪戯って！ 木崎君の悪戯って！ 気になるけど、なんか怖いよ！！

あたしが顔を真っ赤にして混乱していると、お煎餅を飲み込んだ木崎君が、少し首を傾げてあたしを見てきた。

お煎餅を噛み砕いている間に眉間に寄っていた皺は消えており、代わりに彼は不思議そうな目であたしを見ている。な……何………

…？

「野中さんって」

「はいっ！ い、悪戯は無しでお願いします！！」

「うん。まあ、それはわかったけど。……そんなに怯えなくても、怖いことはしないのに」

「い、いやっ、なんか木崎君の悪戯って怖いっ！！ 木崎君、いじめっ子っぽいよ！」

「そんなことないよ。痛いことも怖いこともしないよ」

「は、歯医者さんの『痛くありませんよー』っていう発言くらい信憑性が薄そう！」

「そんなことないって。」

——それより、さっきの煎餅、僕が貰ってよかったの？」

「……………へ？」

「さっきの煎餅、野中さんが半分食べてたやつだよな？」

「……………あ」

「僕が貰ってよかったの？」

「……………」

あああああ、あたしの馬鹿！！ 木崎君に自分の食べてる途中のものをあげるなんて、何やってるの！！ あ、あたしの歯型がくっ

きりついでるお煎餅、木崎君の口の中に押し込んだ！！ 混乱するにも程があるよ、あたしの馬鹿ああ！！

これが兄弟とかなら、全然平気なのに。おじちゃんでも、まあ、大丈夫。でも、綺麗な綺麗な木崎君に、あたしが口に入れたモノを押し付けるなんて……。か、間接キスなんて可愛いもんじゃないよ、これ……。唾液とかついてたら、どうしよう……。ああ、だから木崎君、お煎餅食べてる間、ちょっと眉間に皺が寄ってたのか……。そうだよ、気持ち悪いよね、他人が口に入れたものの残りなんてさ……。

ズガンと落ち込んでしまったあたしは、恥ずかしさと申し訳なさでいっぱいになってしまって、泣きそうになりながら木崎君を見た。

木崎君は、相変わらず不思議そうにあたしを見つめている。うつ、その綺麗な黒い瞳が居た堪れない……。あたし、汚い……。木崎君は、あんなに綺麗なのに……。神様、ごめんなさい……。これなら大人しく木崎君の悪戯を受けた方がマシだったかも……。

「ごめんね、木崎君……。汚いものあげちゃって……」

「いや、別に汚くないけど。やっぱり気づいてなかった？」

「うつ……。ごめんなさい……」

「謝らなくてもいいって。全然気にしてないよ？」

「でも、木崎君、お煎餅食べてる間、眉間に皺が寄ってたよ……」

「それはほら、野中さんがこうやって後から落ち込むだろうなあ、と思ったからだ。野中さんの食べた残りを気持ち悪いなんて思っていないし、怒ってもいないから」

大丈夫だよ、と言って、いつの間にかあたしのすぐ側まで再び接近していた木崎君は、よしよしとあたしの頭を撫でてきた。

うつ……。あ、ありがとう……。でも、その優しさもなんか恥ずかしいよ、木崎君……。

顔が恥ずかしさでとっても熱くて、それを隠すように体育座りに

近い格好で丸まっていたあたしの耳元に、木崎君の楽しそうな声が聞こえてきたのはその時だった。

「野中さんに悪戯できなかったのは残念だけど、まあ、いいよ」

これって一応、間接キスだね——という言葉に、あたしの思考は一瞬停止してしまった。

え？ …… 木崎君？

ぼかんとして顔を上げると、心底楽しそうな表情をした木崎君と目が合った。

…… え？ え？ —— ええっ？

間接キス…… って、まあ、客観的に考えたら確かにそうかもしれないけど、そんなに可愛いものではないような。だって、木崎君の悪戯を回避するために、自分の食べ残しのお煎餅を木崎君の口の中に押し込んだんだし。しかも、自分で食べ残しと気づいていなかったとか、そういう最悪な展開だったんだけど。

…… なんて、木崎君が楽しそうにしてるんだろう。

ぼかんとして木崎君の綺麗な顔を見つめていると、急に硬いものがぶつかり合う、物凄い音がした。

びっくりして、音のした方向を見ると——何故か、おじちゃんが顔をちゃぶ台に激突させていた。ピクピクと身体が僅かに痙攣している。

そういえば、おじちゃん、木崎君の悪戯発言からあたしを助けてくれなかったな。どうしたんだろう。

「おじちゃん？ …… 大丈夫？」

恐る恐る声をかけると、おじちゃんはちゃぶ台に突っ伏したまま顔だけをあたしの方に向けて、力なく「ああ……。大丈夫だよ、夕子ちゃん……」と答えた。

おじちゃん…… なんでこの気温でそこまで脂汗が浮いてるの？
びよ、病気？

「おじちゃん、熱でもあるんじゃない？ 本当に大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。それより、そろそろ家に帰った方がいいよ。もう外も暗くなってきたよ」

あたしは壁に掛けられている時計を見て、おじちゃんの言葉に頷いた。

確かに、結構時間が経っていた。——あ、おじちゃん、ずっと正座だったから、もしかして、足が痺れたのかな？

あたしはおじちゃんと木崎君にお菓子のお礼を言って、狩野家宅を後にした。

木崎君の「送ろうか？」という親切な申出は、嬉しかったけど、辞退した。自転車だし、家まですぐだから。

それに……やっぱり、自分の食べ残しを木崎君にあげちゃったのが、恥ずかしかったから。

ああもう、今度から、もう少し考えて行動しよう……。

「……間接キス、かあ……」

自転車を漕ぎながら、前カゴに入れた木崎君からもらった、お菓子入った箱を見る。

間接キス。うーん。

……なんで、木崎君、あんなに楽しそうだったんだろう。

もしかして……、と思いたい気持ちもあるけど、それはないですよ、という気持ちの方が強い。

「あたしも、喜んでいいのかなあ……」

木崎君と、間接キス。

………駄目だ、恥ずかしくて死ねる。考えるの、やめとこ
う。

とりあえず、あたしはその日から当分の間、醤油煎餅が食べられ

なくなった。というか、見るのも無理。恥ずかしい！！

……なのに、日曜日におじちゃんの家で会う木崎君がしきりに醤油煎餅を勧めてくるのは、どういう意味なんだろう……。

木崎君って、やっぱり不思議な人だなあ。

（おまけの会話） 木崎優吾&狩野敏行編

「優吾君さあ、俺にいきなり何してくれるの?！」

「少しの間、体を動けないようにしただけだよ」

「声も出なかつたんだけど?！」

「うん。そういう仕様だから」

「（腹立つクソガキだな!!）大体、夕子ちゃんに悪戯って……何するつもりだったんだ?！」

「ん？ 野中さんが痛くも怖くもなくて、僕がとっても楽しいことだよ」

「最悪じゃないか!!」

「えー、どこが?」

「どこが、とか言ってるところが!! 夕子ちゃんは心が清らかなの!! いい子なの!! 優吾君みたいに歪んでないの!!」

「僕は別に、歪んでないよ」

「嘘つけ! 夕子ちゃんが顔を真っ赤にして泣きそうにしてたの、思いつきり楽しそうに見てただろうが!!」

「だって、泣きそうな顔の野中さん、すごく可愛かったから」

「最悪だ!!」

「どこが?」

(以下、分かり合えない2人の会話がエンドレス)

【番外編】ハロウィンな木崎家の人々（１）（後書き）

適當すぎる話でした。季節モノですが、一応シリーズの中に入れておきます。

和之&明奈：バカップル……？

明奈は父親似なので、自分の欲望には忠実です。

夕子&優吾：『悪戯』っていい響きですよ。何をしても許されそうです。

優吾&敏行：年上を敬わない優吾。

【番外編】ハロウィンな木崎家の人々（2）（前書き）

（1）に続いて、時間軸とか本編からの間の話などを完全無視した話です。

温い目で見てやってください。

【番外編】ハロウィンな木崎家の人々（2）

遠野真奈美&木崎純&遠野圭太編

「トリック・オア・トリート！」

そんなことを言っ て見上げてくる可愛い弟——圭太に、わたし——遠野真奈美は満面の笑みを浮かべて、昨日の夜からせつせと準備したお菓子の数々が並んだテーブルを示した。

「さ、好きなだけ食べていいからね、圭太」

「うわっ、うまそう！！ ありがとう、真奈美姉ちゃん！！」

嬉しさを体中で表す可愛すぎる弟に、思わず顔がにやけてしまう。ああ、可愛いなあ、圭太。兄弟って楽しい！！

そんなことを思っていたら、背後から深い溜息が聞こえてきた。

そして、

「……真奈美ちゃん。俺はいいけど、他の人間の前でそのふやけた表情をするの、やめとけよ？ どう見ても良からぬことを企む変態女にしか見えないから」

失礼すぎる、わたしを思いつきり見下した声。

こ、このクソガキは……！！

わたしはぐるっと振り向いて、圭太の生意気な同級生——木崎純を睨みつけた。

「うるさいわね！ 人のことを変態呼ばわりしないでよ！！」

「じゃあ、真奈美ちゃんの圭太に対する気持ち悪い笑顔は何なんだよ」

「きもっ……？！ し、失礼ね！！ わたしは単に、弟思いなだけよ！」

「度が過ぎるとブラコンだよね、それ。あ、もう遅いか」

「誰がブラコンよ!!」

こ、こいつは相変わらず、年上に対する口のきき方が全然なっていない!!

ギリギリ睨みつけるわたしを、純は鼻で笑う。奴の目が、「自覚ないの? ブラコン女」と言っている。

むかつく、こいつは本当にむかつく!!

「純、真奈美姉ちゃん、食べないの?」

「はい! 今行くわ、圭太!」

イスに座ってわたしたちを待っている圭太の呼び声に、わたしは即座に笑顔で言葉を返す。

純が呆れたように見てきたけど、気にしない。今日は楽しいハロウィンなもの! わたしは、わたしは……!!

「真奈美姉ちゃん、お菓子作りすっごい上手だね!」

「そんなことないわよ。でも、褒めてくれてありがとう、圭太」

へへへ、と照れる圭太の、可愛い可愛い狼男の仮装姿を堪能する。今日、この圭太の可愛い格好を見るのが、どれだけ楽しみだった

ことか!!

もう、着ぐるみを着た圭太、ほんとに可愛い!! やっぱ、ハロウインのメインは仮装よね!!

そんなことを思っていると、わたしの向かい側の席に座った純が、心の底から呆れた声でボソツと一言。

「変態ブラコン女」

うるさいわね! ちょっと弟を可愛がってるだけじゃないの!! 何なのよ、その哀れむような視線は!!

10月31日、午後3時。

わたしの家では、3人だけの小さなハロウィンパーティーが開かれていた。

メンバーはお菓子準備担当のわたし、そして仮装した狼男な圭太

と、黒猫な純。……可愛い。圭太は勿論だけど、流石に見た目がいだけあって、純の黒猫姿はとっても可愛い。圭太みたいな着ぐるみではなく、真っ黒い猫耳を装着して黒い上下を着ているだけ、という手抜きだけど。うーん、尻尾がないのが残念よね。

夏に再婚したわたしの家は、現在、お父さんとお母さん、それにわたしと圭太の4人暮らしだ。

わたしとお父さんが元から住んでいた家に、圭太たち母子が引っ越してきたんだけど……それに伴って、圭太は転校することになってしまった。学区の制限があるから、仕方ないことではある。でも、仲の良い友達と別れることになって、圭太はすごく寂しそうだった。そんな圭太も、すぐに新しい学校に馴染めたようだった。圭太は素直で良い子だからね！……それに、何故か圭太の親友であるらしい、見た目は超麗しい美少年、中身は性悪毒舌少年の木崎純が頻繁に我が家に遊びに来るおかげで、前の学校の友達とも相変わらず仲良くしているみたい。

まあ、純が我が家によく来るのは、あいつがわたしの新しいお母さんとも知り合いだから、っていうのもあるのだろうけど。

「真奈美ちゃん、よくこれだけ作ったね……」

カボチャプリンを口に入れつつ、純が感心したような、呆れたような声を出した。

ダイニングにあるテーブルには、わたしがせっせと作ったカボチャプリンや各種のクッキー、ケーキにマフィン、シュークリームなどが所狭しと並べられている。……まあ、明らかに、3人で食べきれない量ではない。

料理は苦手だけど、お菓子作りは好きなのよね。甘いもの、好きだし。不器用だから、そんなに凝ったものは作れないけどね。

「余ったらどうするの？ これ」

「お母さんとお父さんにあげるから大丈夫よ。お父さんは5時には

帰ってくるって言うてたし、お母さんも明日の朝にはこっちに帰ってくるらしいから」

純の疑問に答えてあげると、純は「ふうん」と呟いた。それから、右隣に座っている圭太と何やら会話しつつお菓子を食べている。

お父さんは休日出勤、お母さんは一昨日から北海道に出張中。だから、今日は家にいるのは、わたしと圭太と純の3人だけだ。

圭太にハロウィン用のお菓子を作ってあげようと最初に思い立ったのはわたしだ。で、それを圭太に提案したら、「じゃあ、狼になる！」と言われてしまったのだ。つまり仮装するってことかなあ、と思っていたわたしは、圭太に学芸会で使ったという狼男の着ぐるみを見せられて——今日のパーティー開催とあいなった。

だって、圭太のふわふわした灰色の毛に覆われた着ぐるみ、可愛いんだもん！ 耳も尻尾もふわふわで、絶対圭太に似合うんだもん！！ あれ着てわたしの作ったお菓子を食べる圭太、どうしても見たかったんだもん！！ お母さんに相談したら、「是非、写メってね！」って言われたんだもん！

……でも、圭太が純を誘うことは予想していなかった。更に言うなら、純も仮装するとは思ってもいなかった。すごい嫌がりそうなのに……。

まあ、猫耳つけたただだから、仮装とはいえないかもしれないけど。男が猫耳つけても気持ち悪いだけだけど、このくらいの年齢の美少年がつけたら違うわね……。女の子がつけるのとは、また違った良さがあるって言うか……。奥が深いわ……。

黒猫な純と狼男な圭太、という眼福な構図を前に、とりあえずお母さんから頼まれていた写メを送ろうと、ケータイを取り出して構えた。

「圭太、純、ちょっといい？」

きょとん、とわたしの方を向いた圭太。狼男なのに、口元につい

たクリームが可愛い！！……と思ったわたしを冷めた目で見る、黒猫な純。「馬鹿だ……馬鹿がここに……」と、純の目がわたしを罵倒している。む、むかつくなあつ……！！

気を取り直して、わたしは優しい笑顔を作り、圭太と純に向かって「写真を撮っていい？」と尋ねた。

「お母さんが圭太の狼男、見たいって言ってたから」「うん、いいよ！」

にっこり笑顔の圭太。可愛い。ついでに、客観的に見たら、見た目だけは圭太よりも抜群に可愛い（でも中身がマイナス過ぎる）純も入れば、かなりいい画になるんじゃない？ そう思っただけを見て、と、

「俺が撮ってあげるから、圭は真奈美ちゃんと一緒に写りなよ」

天使のように輝かしい笑顔で、そんなことを言われた。……はあ？「いいの？ 純」

「俺と一緒に写ってるのより、真奈美ちゃんと写ってる写真の方が、由里さんもいいだろ。俺、写真ってそんなに好きじゃないし」

軽く肩をすくめると、純はイスから下りてわたしの方にやって来た。

「え、ちょ、ちよつと！」

「ほら、さつさと圭の横に行きなよ」

そして、純はあるうことか、自分の頭につけていた猫耳の力チューシャをわたしの頭にがしつと取り付けて、わたしの手からケータイを取り上げた。

ちよつと、猫耳なんて恥ずかしいもの、つけないでよ！！ あんた一体、何考えてんの？！

真っ赤になったわたしは、すぐに純に文句を言おうとしたんだけど、

「可愛いよ、真奈美ちゃん」

「真奈美姉ちゃん、可愛い……」

破壊力満点の2人の笑顔に、何も言えなくなってしまった。

……駄目だ。可愛さと笑顔のキラキラ度では、女子高生は小学生には勝てないわ……！！ 何かが負けてる……！！

純にぐいっと腕を引つ張られて、イスから立ち上がらされた。そのまま背中を押されて、わたしはよろけつつも圭太の横へと向かった。

にこにこしている圭太を見ると、まあ、写メくらいはいいかと思ってしまう。さっきまで純が座っていたイスに座って、圭太と肩を寄せ合い、2人でケータイについているカメラに向かって微笑みかける。

「はい、撮るよー」

ピロリン、という間抜けな電子音がして、ほっとする。圭太と一緒に写メを撮るのは楽しいけど、猫耳は、なんていうか……恥ずかしい。早く純に返したい。

純がわたしのケータイを持って、圭太の方にやって来た。今撮った画像を圭太に見せ、それからわたしにケータイを返した。

画面の中には、肩を寄せ合って笑う狼男な圭太と猫耳をつけたわたしがいた。顔は全然似ていないけど、これを見たら、誰だってわたしと圭太のことを『家族』だって思うはずだわ。血は繋がっていないけど、わたしと圭太はもう、本当の姉弟だもの。

胸の中が温かくなる画像を見ていたら、不意に頭を撫でられた。な、何？

顔を上げると、純がにっこり笑顔でわたしの頭を撫でていた。

「……何よ？」

「ん？ ……真奈美ちゃんも、お姉ちゃんらしくなったなあ、思っ
てね」

いい子いい子と頭を撫でられても、正直複雑だ。

何なのよ、こいつは……。褒めてるのが、貶してるのか、よくわからないわ……。

そのまま暫く頭を撫でられていたわたしは、圭太の一言で我に返った。

「純、その猫の耳、真奈美姉ちゃんにくれるの？」

「うん。真奈美ちゃんにあげる」

「えええっ?! い、いらないわよっ!!」

な、何馬鹿なこと言ってるのよ! 猫耳なんて、持っても使い道ないでしょうが!!

慌てて頭から猫耳を外して、無理矢理純に押し付ける。「え〜」
という残念そうな圭太の声が聞こえたけど、気にしない。だって、日常生活の中で猫耳なんか使わないでしょ?! いらないってば、こんなの!

「真奈美姉ちゃん、似合ってたのに……」

「いいの! 別にいらないから! ……大体、どうしてあんだ、猫耳なんか持ってるのよ?」

わたしは半眼になって純を睨みつけた。圭太も純も、パーティー前までは普段着で、圭太の部屋で着替えてきたのだ。黒い毛の猫耳は、純の持参。……まさか、わざわざ買いに行ったとか?

「まさか、俺がこんなもんをわざわざ買いに行ったとか、そんなふざけた事を考えてはないよね? 真奈美ちゃん」

こ、心読まれたー!!

動揺して引き攣ったわたしの顔を鼻で笑って見下すと、純は猫耳カチューシャを持ってくるくる回しながら、「これは姉ちゃんのだよ」と言った。

「昨日の夜、大量に荷物が送られてきてさ。その中に、これが入ってたの」

「……ってことは、それ、勝手にわたしが貰っていいものじゃないでしょう?」

何、人様のものを勝手にわたしに押し付けようとしてんのよ、こいつは!

わたしの怒りを、純はあっさり受け流して、「だって、なんかさあ……」と嫌そうに呟いた。

「姉ちゃん、どう考えてもコレを碌な使い方しない気がしてさあ」

「……は？」

「母さんも兄ちゃんも同じ意見だったから、適当に処理していいって言ってたし」

「……処理？」

「なーんか、姉ちゃんの手製っぽい魔女の服一式と一緒に入ってたから……。不吉っていうか、ほつとくと悲惨な目に遭う人間が出そうって言うか……」

「……猫耳のせい？」

「うん。猫耳のせい」

何よ、それ。意味分かんないわよ。

「というか、わたしは関係ないじゃない！　そういうのは、家族間で解決しなさいよね！」

むっとしたわたしは、「とにかく、絶対にいらなからね！」と念を押して猫耳の受け取りを拒否した。使いだないわよ、そんなものの。

圭太の残念そうな溜息にはちょっと心がぐらついたけど、でも、いらないわ。わたし、人が仮装するのを見るのはいいけど、自分とするのは嫌なのよね。

純は少し考えるようにして、それから猫耳を再び自分の頭に取り付けた。「あがるって言ってたんだから、大人しく貰っておけばいいのに」などという失礼な呟きが聞こえたけど、気にしない！　どうしてこいつは、こつも偉そうなのよ？！

「でも、残念だなあ」

純はわたしにだけ聞こえる音量で、そつと囁いた。

「黒猫な真奈美ちゃん、飼育したかったのに。俺が飼い主なら、すつごく可愛がってお世話してあげるのに」

……し、飼育？　お世話？　か、可愛がる？

どういう意味よそれ。なんなのよそのキラッキラした笑顔は。

……………どうしてわたしの心臓は、こんなにドキドキバクバク言ってるのよ?! 今の発言をした相手は物凄い美少年だけど、まだ小学生だから!! ここは真っ赤になるところじゃなくて、怒るところだから!!

真っ赤になつて絶句するわたしを不思議そうに見る狼男な圭太、面白そうにわたしを眺める黒猫な純。

わたしは思った。

……………純みたいな黒猫を飼うくらいなら、たとえ肉食であつても、わたしは圭太みたいな狼を飼う方を選ぶ!! でないと、心臓がもたない!!

天気の良い10月最後の日、わたしの内心の滅茶苦茶な叫びにツッコミを入れてくれる人間は、この家には誰もいなかった。

木崎梓&木崎要編

「Trick or Treat」

背後からそつと耳元で囁かれた言葉に、わたしは思わず、その場に崩れ落ちた。

刃物のような鋭さのある、それでいて甘くて耳心地のいいバリトンによる、奇襲だった。

こ、腰にきた…………!! 背筋がぞわぞわする…………!!

涙目になつて顔をあげると、夫がにこやかな顔でわたしを見下ろ

していた。

「か、要……」

「ただいま、梓」

あんた一体、いつの間に帰って来たの?! 当分、帰ってこないんじゃないの?!

奇襲によるショックで半泣きになりつつ、わたしは殺意すら抱ける美しい夫に対して、知り合ってから以来常々口になっているにも関わらず、いつこうに守られた試しのない注意をした。

「気配を消して、背後から、急に話しかけるな!!」

「これ、職業病だから。癖なんだよね。いい加減、諦めて?」

嘘つけ!! 貴様、絶対にわざとやってるだろうが!!

睨みつけるわたしを、夫は優しい笑顔で見つめる。

不吉だ。

不吉すぎる笑顔だ。

何か、危険だ。逃げた方がいい気がする。

わたしはへたり込んだまま、それでもジリジリと後ずさりしつつ、夫に向かって声をかけた。

「な、何で急に帰ってきたの……?」

「仕事かひと段落ついたからね。ああでも、明日の朝には、またすぐに日本を発つよ。今度は1か月くらいかかるかなあ」

「明奈はもう飛行機に乗ってるけど……」

「アレの担当とは別口なんだよ。——ところで、梓」

「な、何……?」

とん、と背中にあたる、柔らかい感觸。しまった、出口じゃなく
て行き止まりの方向に後退していた!!

「今日は、10月31日だね」

「う、うん……?」

「ハロウィンだね」

「そ、そうね」

明奈が昨日の夜、大量に荷物を送りつけてきたからね……。

あの子、魔女の仮装、確かに似合ってたけど……。どうして行きにはあった猫耳が帰りにはなかったんだろう。まさか、和之君にあげたとか？ そんな意味不明な真似……。しそうだな、明奈は。猫耳をつけた和之君を見て、嬉しそうに「可愛い」とか言いそうだ。和之君……。ごめんね、止められなくて……。

—— 待て。ハロウィンだと？

わたしは恐る恐る、壁にかかっている時計の時刻を確認した。

現在、午後１１時２４分。

まだギリギリ、１０月３１日ではある。

……。して、夫は最初、わたしに何と囁きかけてきた？

何か、恐ろしい単語の羅列だった気がする。

そう、確か——

「さて、梓。梓がお菓子をくれないから、僕は君に悪戯しないとね」

いーやーだー！！ こっちに来るな馬鹿ー！！

１０月３１日、午後１１時３０分。

寝室にて、わたしはソファに座り、ほっと安堵していた。なんとか夫からの悪戯を回避できたからだ。

危つくベッドの側まで後退していたものの、サイドテーブルの上に置きっ放しにしていたお菓子を、夫の手に押し付けたのだ。

これが貰い物のお菓子だったり既製品だったりしたなら、夫が受け取らない可能性があった。しかし幸いなことに、このお菓子はわたしが作ったものだった。大人しく受け取った夫は、残念そうにしつつも悪戯を諦めてくれた。よかった……。！！ 神はわたしを見捨

てていなかった……！！

「ふうん……。梓がこんなものを作るの、珍しいねえ」

わたしの右隣に座った夫が片手で摘み上げている『こんなもの』とは、すなわち、チョコレート。

市販のものを溶かして型に流し込んで、ついでに好みのトッピングをぶち込んで固めただけの、安易なお菓子だ。

『手作り』などとは呼べないような代物だが、構いやしない。どうせ食べるのはわたしと純くらいだ。優吾は、チョコレートがあまり好きじゃないから。

「スーパーの福引で当たっちゃったの。新製品の板チョコばかり、30枚。まさか板チョコをお裾分けするわけにもいかないじゃない？」

だから、さつさと纏めて消費しようと思ったのだ。板チョコだけを置いていても、我が家の子どもたちは食べてくれない。

まったく、どうしてあのスーパーは福引の景品に板チョコとか用意しているんだ。しかも3等がそれとか、おかしいだろう。わたしは4等のティッシュ箱6箱組みを狙っていたのに……！！新製品だかなんだか知らないが、一口齧ってみたけど他のメーカーのチョコとの違いなぞ、わたしには全然わからなかった。どこがどう違うんだか。

「へえ。……でも、夜にチョコレートを食べるのは、肌に悪いんじゃないかってっけ？」

そんなことを言いながら、夫は口の中に1つ、チョコレートを放り込む。につこり笑って「美味しいよ」と言ってくれるこの夫は、優しいのか、何なのか。わたしは別に、トッピング以外に味に手は加えていないのだが。美味しいのなら、それは多分、材料の板チョコが美味しいのだ。

「しかも、ワインなんか開けて。どうしたの？眠れない？」

目敏い夫は、サイドテーブルに置かれた飲みかけのワインを横目

で見る。

……わたしが偶々チョコレートをつまみにワインを一杯やっていただけで、何をそんなに気にする必要があるのか。奴の考えはよくわからん。

「別に、特に理由はないけど……。なんとなく、飲みたくなっただけ」

夜中にチョコレートを食べて二キビが出来ようが、関係ない。無性にアルコールと甘いものが欲しくなるときもあるのだ。

これといった理由はないので、夫にそう伝えたと、奴は「ふうん」と納得したのかしていないのか、よく分からない反応を返してきた。なんなんだ、一体。

しかし、まさか夫が帰ってくるとは……。明奈もそうだが、何で今回に限って、2人とも事前に連絡を入れてくれないんだ。わたしは心底、驚いたのに。心の準備くらい、させてくれ。

小さなガラスの皿に載せられた6個のチョコレートを、1つ摘んでは口に入れている夫を見やる。

仕事や長距離の移動の疲れが全く見えない、憎らしいほどに整った横顔。わたしは夫が疲れている姿というものを、未だに見たことがない。

夫はいつも、マイペースだ。堂々としていて、何も恐れていないように見える。

そんな夫が完璧な人間なのかといえば、人として大切な何か——常識とか良識とかを完全に無視している点で、まるで駄目なのだが……どうなのだろう。

『完璧な人間』とは、何をもって『完璧』と言うのだろうか。

ロボットではあるまいし、『完璧』という言葉が当てはまる人間など、果たして存在しているのだろうか。評価をするのが人間であるのなら、好き嫌いというのは誰にでもあるのだし、誰かにとって『完璧』な存在であっても、それと同じ人物が別の誰かにとっては

『完璧』ではないかもしれない。
ならば、『完璧な人間』なんて、どこにもいないのではないだろうか。

1人の人間の頭の中という、狭い世界の中の限られた範囲内——
——小さな箱庭の中にしか、存在しないのではないだろうか。
夫はわたしからすれば、全くもって完璧ではないが、別の誰からすれば完璧な存在なのかもしれない。

『誰かに好かれるということは、別の誰かに嫌われるということだ』——かつて、そんなことを言われたことがある。その人に好かれるから別の人に嫌われる、という意味ではなく、誰かが自分を好きになる理由と同じ理由で、別の誰かが自分を嫌うこともあるのだと、そう言われた。

同じ価値観を共有することができる人間というのはごく僅かで、皆で同じ物を見て、その評価が分かれるのは当然のことなのだそうだ。それは不条理なことではなく、自我をもって生きる人間の集まりであれば、当たり前のことらしい。

だから、双方向の愛情というのは大切に素晴らしいものなのだと、そう教えられた。愛を秤にかけることも、その性質を判断することも難しいが、たくさん人間がひしめく中で、偶々出会った2人が互いに愛し合うのは、とても尊いことだそうだ。

まあ、確かにそうなのだろう。それは、納得できる。

……………しかし、最後に『だから、いい加減諦めて素直になつて、木崎と結婚しちゃえば？ あれだけアンタのことを、好き好き言ってくれてるんだから』と言われたことは、記憶の彼方に無理矢理追いやった。割といい話をしてくれていたはずなのに、どうして締めがああ台詞だったのだろう。

型に流し込んで固めたはずなのに、何故か歪な形のチョコレートを摘んでは口に入れている夫。

奴の空いている左手を、そつと右手で握り締めてみる。夫は元々体温が低いので、触った瞬間に掌がヒヤリとした。

不思議そうにわたしを見てきた夫を無視して、そのまま奴の肩にもたれかかる。

——夫が指摘した「眠れない」というのは、あながち間違いではないのかもしれない。

昔は夫にはなるべく家にいて欲しくなかったのだが（色々な意味で、子どもに悪影響が出そうだったから）、最近は少しだけ、夫がいないことが寂しい…………… ような気も、僅かながら、しないでもない。

でも、夫はなんだかんだ言つて、いつも堂々としている。長期の仕事が終わつたあと、久しぶりに家に帰ってきたときも、夫はいつも変わらない。

だから時々、わたしが必要なのかな、と思う。およそ弱点が見当たらない夫にとつて、わたしは何なのかな、と思つてしまうのだ。まあ、多分「妻だよ」などと答えられる気がするので、敢えて夫にそのことを尋ねたりはしないが。

……年月を重ねた分、分かるようになったことと、分からなくなつたことがある。

何でも分かり合える夫婦というのは理想だが、わたしと夫には、恐らく永遠に当てはまらないだろう。

夫が本当に人間なのかどうか、子どもを3人産んだ現在ですら疑問なのだ。奴の考えなど、理解できないことの方が多い。

しかし、昔は夫の帰りなど待つていなかったはずなのに、今のわたしは夫の帰りを…………… 待つているような、いないような。

微妙だが、隣に夫がいてくれるのは嬉しい…………… 気がする。

昔と変わらず、夫のことはわたしなりに愛しているし、世界で1番好きなのだが、これは愛情が深まったのか、それとも単に、わたしが弱くなつただけなのか。

わたしに疲れを見せてくれない夫を、少しだけ——ほんの少しだ

け、寂しく思う。

昔は、こんなことはなかったのになあ。

「梓？ 眠いの？」

肩にもたれかかったまま目を閉じたわたしに、夫が優しく声をかける。

いい声だ。わたしの大好きな声。

答えないでいると、夫が苦笑する気配がした。

「……僕の方が、梓に悪戯された気分だなあ」

なんだ、それ。どういう意味だ。

内心むっとしつつも表情を変えないでいると、額に冷たい感触がした。

夫の唇が、そっと触れた感触だった。

「もつと、甘えていいから」

わたしの耳元で、夫が小さく囁いた。

優しく、嬉しそうな口調だった。

偶にこうやって甘えられるのも、不意打ちみたいで楽しいけどね——と言う夫に、ああ、こいつはそう言えばこういう変態だったなあ、と思った。

昔から、わたしのことを甘やかすのが好きな奴だった。わたしに頼られるのも、甘えられるのも好きな様子だった。

……そのために、わたしを精神的に追い詰めることも……何回もあったな。わたしが泣こうが喚こうが、嬉しそうにしていたし。駄目だ、客観的に考えたらこの夫、最低の変態じゃないか。

……その最低の変態の夫に甘やかされるのが好きなわたしって、実は物凄く駄目人間なんじゃ……。

そうは思ったが、まあ、自分の気持ちを取り繕っても仕方がない。わたしは夫の心地いい体温を感じながら、そのまま眠ることにした。

明日の朝、目が覚めて夫が隣にいらなくても、今夜の温もりがあれば大丈夫だろう。

そう思って、夫がわたしの髪の毛を優しく撫でるのを感じながら、わたしは穏やかな気持ちで眠りに落ちたのだった。

【番外編】ハロウィンな木崎家の人々（2）（後書き）

季節モノ、ハロウィン編終了です。ハロウィンになってないハロウィンものですね。すみません。

真奈美&純&圭太 真奈美、着実にブラコン化。

圭太に彼女とかができたら、すごいことになりそうです。

純は……嫌な小学生ですね。猫耳は、純たちの危惧通りの使い方をされました。

梓&要 ハロウィン関係ねえ！！……すみません。

旦那様の悪戯は、奥様にとって生き地獄なので、何とか回避しました。

相思相愛夫婦です。

昼下がりの戦争（前編）（前書き）

若干の暴力表現があります。ぬるーいですが、あしからず。

昼下がりの戦争（前編）

変質者という存在は、何故かなかなか撲滅しない。困ったものだと思う。

痴漢に覗きに盗撮、露出狂。ああ、小さい頃には近所で痴女が出たつてんで騒ぎがあつたな。いたいけな少年を家に連れ込んで悪戯する変態のおばさんが、何件かやらかしたらしい。俺はもちろん、大丈夫だったけど。

女子と違って、男つてのはあんまりそういう被害には遭わない。だから、実際に変質者がどういうものなのか、それがどのくらい怖いのか、ということが実感できる機会は非常に少ない。

しかし、俺——三条和之は、実際に何か被害に遭つたわけではないが、何度か変質者というものと遭遇したことがある。何せ、恋人である木崎明奈が超可愛い子なもんで。

ただ、毎回ろくなことになるないので、須らく世の変質者どもは更生するか、さもなければ滅失すべしだと思っている。

俺が初めて変質者と遭遇したのは——あれは忘れもしない、小学四年生のときのことだ。

季節は、ちょうど秋の暮れ。だんだんと日が短くなってきていた時期だった。

いつも通り、俺は明奈と一緒に木崎家宅へと帰っていた。その日は父さんが仕事で遅くなるとかで、俺は明奈の家で夕飯をごちそうになる予定だったのだ。

夕暮れの田んぼのあぜ道を、明奈と二人、とりとめのない話をしながら歩いていた。

そうしたら、正面から男の人がやって来たのだ。顔はぼんやりとしか覚えていないが、多分四十代くらいのおっさんだった。

ダークグレーのなかなか渋いコートを着て、俯きがちに俺たちの

方にやって来たおっさんは、俺と明奈の行く手を遮るようにして立ち止まった。

何だ？ この人。

そう思っただけ止まった俺と明奈に、おっさんはやにやした笑みを浮かべて、コートの正面を大きく開いた。

……うん。いわゆる『露出狂』とかいう類の人間だったんだよな、あのおっさん。

コートの中は全裸で、ちよつとたるんだ腹だとか、ごわごわした胸毛だとか、てめえんな汚ねえもん見せてんじゃねえよっつー気色悪いもんまで、全部丸見え状態。

俺は呆氣にとられてばかんとしてしまった。「うわ、変態だ！」とは思ったものの、驚きすぎて咄嗟に反応することができなかったのだ。情けないことに。

後から振り返ってみたら、あの露出狂のおっさんは明奈を狙っていたんだろ。今もそうだが、当時の明奈はとても可愛い美少女だったから。

ふわふわの茶色い髪と色白できめ細かな滑らかな肌、長い睫に縁取られた大きな目。唇なんて何も塗ってないのに綺麗なピンク色で、華奢な少女の身体なのに姿勢がいいせいかスタイルがよく見えて……って、それはどうでもいい。

とにかく、そのおっさんは美少女の驚いた顔や悲鳴が聞きたかったのだろ。自分の全裸を見ず知らずのいたいけな少女に見せて、「きゃー！」とか「いやー！」とか言われることの何が楽しいのか、俺には全く理解できないが。

ああ、変質者の考えることなんぞ俺には理解できない。だが、とりあえずそいつらが人に迷惑かけるのが大好き人間だっつーことは理解できる。

ただの露出狂のおっさんだとて、単に裸を見せるだけでも、小さな女の子にとっては怖いし気持ち悪いことだらう。身体に危害を加えられなくても、精神的に酷い傷を負うかもしれない。

自分より弱い相手にそういう変態行為をする奴は、本当に最低だ
と思う。

今の俺なら、変質者がいたらまず警察を、と思う。

当時の俺は、とりあえずここから逃げないと、思った。

場所は人通りの少ない夕暮れのあぜ道で、ちょうど民家がまばら
なところだったから、大声をあげても誰も来てくれそうになかった。
それにおっさんの方が俺よりも身体がでかかったから、下手なこと
して明奈が殴られてもしたら危ないと、そう思ったのだ。

とりあえず一番近い家に駆け込んで、その家の人に助けてもらお
う。すぐに警察に連絡してくれるはずだ。——おっさんがコートの
中身を曝け出してからほんの数瞬の間だったが、そういうことを考
えたのだ。

結果的に、下卑た顔でにやつきながら俺たちの反応を待っていた
露出狂のおっさんは、警察のご厄介になることはなかった。

「へへ、へへ……っ?!」

——バゴツ!!

何やら気味の悪い笑い声をあげていたおっさんの顔に、鈍い音と
共に真つ赤なランドセルが命中したのが始まりの合図だった。

何の始まりかって、そりゃもちろん——ブチ切れた明奈の「お仕
置き」だ。

「……………ふふっ」

可憐な唇から漏れる、鈴を転がすような可愛らしい笑い声。

につこり笑った明奈の横顔を見て、声にならない悲鳴をあげたの
を覚えている。

自分の顔が青ざめていることを自覚しつつも思わず一步下がった
俺の前で、明奈は顔を両手で押さえて地面に這いつくばり、くぐも
った呻き声をあげているおっさんに近づいていった。

おっさんの顔面に命中した明奈のランドセルは、無事に中身をば

らまくことなく地面に転がっていた。

それを横目で見た俺は、ランドセルの表面が何やら濡れていることに気がついたのだが、そのときはそれが何かわからなかった。後でそれがおっさんの鼻血だったことが分かるのだが、まあどうでもいいことだ。

おっさんは逃げなかった。突然の攻撃に、逃げたり怯えたりという以前にただただ驚いていたのだろう。教科書やノートがぎゅちり詰まったランドセルを、鼻血が出るくらいの勢いで顔面にぶつけられたのだから、そのショックもあったのかもしれない。

変態行為をしておきながら相手に反撃されることを予想していないなんてアホだなあと思うが、小学生相手に変態行為に走る馬鹿だからなあ。自分は絶対に大丈夫だとも思っていたのか、さっさと逃げるべきなのに、うーうー呻いているだけだった。

そのせいでおっさんは明奈の接近を許してしまい、

「なあ、お前」

俯けていた頭をガシッと掴まれて、明奈の顔と同じくらいの高さにまで持ち上げられ、

「汚物の分際で、どうして生き物の声をあげているの？」

柔らかな笑顔を浮かべた明奈の、白くてほっそりとした膝による攻撃を数発、思いつき顔面に食らった。

掴んだ頭を叩きつけるようにして、勢いよく上げた右膝をおっさんの顔面に激突させながら、明奈は清純な天使のような笑顔を浮かべていた。自分の膝がおっさんの鼻血で真っ赤になるうがお構いなしだった。

ほっそい膝なのにどうしてあんなに凄い音がするんだろうか。「

ひいつ！」という悲鳴を飲み込みつつ、俺は更に一步後ろに下がった。

「あがつ！」だの「びぶつ！」だの、日常生活においてはおよそ聞くことのない悲鳴を一通りあげたおっさんは、最後に横っ面に右ストレートを喰らって吹っ飛び、二メートルほど離れた場所に立っていた電柱にぶつかって沈黙した。合掌。

しかし、それで終わりではなかった。明奈は再度おっさんに詰め寄って、鼻血や涙や涎などでぐしゃぐしゃに汚れながら腫れ上がっているおっさんの頬に平手打ちを食らわせ、無理矢理意識を戻した拳句、

「ねえ、お前は汚物のくせに痛みを感じるの？ 何様のつもり？ お前のような存在が呼吸をすること自体、地球にとって償えないほどの罪悪だとは思わないの？ そのヘドロが詰まった頭で考えてみなよ、すぐに分かることだろう？」

それはそれは優しい声で、雑草でも踏みつけるがごとくおっさんの頭をぐりぐりと踏みにじりながら、情け容赦のない言葉責めを開始した。

氏名・年齢・住所・電話番号・家族構成・勤め先から始まって、おっさんの身元を確認できるような情報を聞き出しつつ、明奈は色々な言葉を使っておっさんを苛めていた。

その様子を青ざめながら見ていた俺は、明奈の真っ赤に濡れた膝が気になったのと、おっさん死ぬんじゃないかと心配になったために、そろそろと明奈に近寄っていったのだが、

「君たち、何してるの？」

『腰砕けになる美声』とはまさしくこの声だろう——そう思わせ

る艶やかな低音を聞いて、「天の助け!」とばかりに後ろを振り向いた。

「やあ、和之君。久しぶり。あれ、前に会ったときよりもまた少し背が伸びたね」

黒いスーツを着た、男の俺でも思わず見蕩れてしまうほどの美男――明奈の父親である要さんがいた。

「か、要さん! お久しぶりです……じゃなくって、あれ、あそこ
の! 変質者が!」

「うん?」

にこにこしたまま俺の頭を撫でる要さんに、まごつきつつも明奈と帰っていたら変質者が現れたことを説明した。あと、明奈がなんか大暴走! ……とも。

「ふうん。露出魔か。それは災難だったね」

まるで慌てることなく俺の説明を聞き終えた要さんは、自分の存在に気がついているだろうに、敢えて無視を貫いている明奈の方へと歩み寄り、

「明奈。お父さんに挨拶は?」

「ぐえっ」

綺麗に磨かれた革靴で、明奈によって土下座の状態で頭を踏みにじられていたおっさんの背中を容赦なく踏みつけた。大したダメー
ジはなさそうに見えたが、おっさんが蛙のようなくぐもった鳴き声
をあげたことから、かなり苦しかったんじゃないかなあと思う。

「チッ……。もう帰ってきたのか」

明奈、実の父親に舌打ちってどうなの。

「はは、かれこれ三週間ぶりに会ったお父さんに対してそういう口
の利き方はないんじゃないかなあ。本当に礼儀知らずな子だよね。
可愛くないなあ」

要さん、実の娘相手にどうしてそんなドスの利いた声で話すんで

すか。

「バカに礼儀を説かれる筋合いはないなあ。それより足をどけなよ、この汚物はわたしがお仕置きしてるんだから」

「汚物ねえ。てつきり動く廃棄物かと思っただよ」

どっちも違う、そいつはただの露出狂の中年親父だ。この似た者父娘め。

そう思いながらもツツコミを入れることができなかったチキンな俺は、要さんに何やら小声で言い含められた明奈と共に、「私のよくな雑草以下の汚物が生きててすみません……貴重な酸素を消費してしまつてごめんなさい……」とくぐもった声で涙交じりに呻き続けるおっさんを要さんに任せ、手を繋いで木崎家宅へと向かった。

おっさん、まともに喋れる状態じゃなかっただろうに、途中で少しでも噛んだら明奈が「汚物の分際で口を利いておきながら途中で噛むなんて、許されると思ってるの？」と笑顔で脅してきたため、必死になつて口を動かしていたが……。

後で聞いたところ、要さんはおっさんを警察に突き出さない代わりに、もう二度と変態行為は行ないませんと誓わせたそうだ。

おっさんは一応定職に就いてて家庭があつたのと、明奈が過剰防衛のレベルを超えた、ほぼ調教と言つていいレベルにまでおっさんを肉体的・精神的に追い詰めていたかららしい。まあ、確かにやりすぎだよな。うん。

「和之くん、怒った？」

「怒ってないよ。でも、あんまり人のことを殴っちゃ駄目だよ。明奈ちゃんの足とか手とかが汚れちゃうから」

家に着く前に、おっさんの鼻血などで汚れていた明奈の膝や手をハンカチで拭いてやりながら、何もせずに事態を傍観していただけの俺は偉そうにそんなことを言った。

「うん、わかった。でも、あの汚物、和之くんに汚らしいものを見せたから……」

心底俺を思いやる明奈に、内心で盛大にずっこけながら苦笑した。
「俺は男だから平気だよ。でも、その……、明奈ちゃんの方が、気持ち悪かったでしょ？」

「ううん。わたしは平気」

につこり笑った明奈の顔は、夕日に照らされていつそう鮮やかだった。

「だって、和之くんがいるんだもん。和之くんがいたら、気持ち悪いことも怖いことも、全部なくなるよ」

おっさんを踏みにじって罵っていたとき以上の輝くような可愛い笑顔で、明奈は力強く言いきった。

そんな彼女に俺が思わず見蕩れてしまったのは——まあ、仕方ないだろう。

多少暴力的でも、明奈が最高に可愛い女の子であることは、違えようのない真実なのだから。

——懐かしい記憶を思い起こしながら、俺は両腕を捻り上げたおっさんを駅員に引き渡した。

小学生の頃ならいざ知らず、身長が無駄に伸び、それに伴ってそこその筋肉もついた高校生の俺は、たまたま同じ電車に乗っていた同級生を痴漢していた変態男を発見し、特に問題なく捕まえることができた。

今日は何かイベントがあるとかで、休日だというのに電車はすし詰め状態だった。日を改めて出かけりゃ良かったか、と後悔したのも束の間。人ごみの向こう側で、見覚えのある女子が顔を真っ青にして歪めていた。

あれっ、あいつ吉川じゃね？　なんだ、具合でも悪いのか？

この人ごみに電車の揺れが加われば、そりゃ気分が悪くもなるだろう。

その女子は同じクラスの吉川なんとか（下の名前は知らん）で、確か図書委員をしている。俺はまだまとも話したことはないが、繊細そうな雰囲気をした大人しめの子で、凜とした綺麗な顔をしている……と思う。いや、俺なんかが評価するようなことじゃないが。クラスの男連中には割と人気なんだよな。儚げで『守ってあげたい系』の子らしい。

実際、吉川は身体があまり丈夫じゃないらしく、よく体育を見学している。身体の線も細いし、そういう意味では確かに『守ってあげたい系』かな。

そういうわけで、吉川が身体が弱いこと知っていた俺は、倒れたりしないだろうかと少し心配になり、チラチラと吉川の様子を眺めていた。

そうしたら、不意に顔をあげた吉川と目が合って、その瞬間に彼女の両目からボロツと大粒の涙がこぼれ落ちた。

当然、俺は「はっ？！ 何？！ 俺、なんかまずい顔したか？！」とパニックになったものの、吉川の唇が何かを訴えるように動き——それが「た・す・け・て」という言葉だと理解した瞬間に電車が大きく揺れ、さざ波のように動いた人の隙間から、吉川の着ている服の上から彼女の胸をわし掴んでいる変態の手が見えた。

で、慌てて人ごみを押しのけながら（その過程で見ず知らずのたくさんの人に物凄く睨まれて悪態吐かれた。ちよつと傷ついた……）吉川の元に急ぎ、何やら顔を赤らめて荒い息を吐いて興奮していた変態をとっ捕まえたわけなんだが。

「あー、吉川？ 大丈夫……じゃ、ないよな。うん。ごめん。はは、は……」

「……ふえっ、……うくっ」

痴漢をとっ捕まえたならそれでハイお終い——ということにはなら

ないらしい。速攻でトンズラしようとしたら、駅員さんに捕獲されてしまった。

それで現在、警察に事情を話さなくちゃいけないとかで、駅にある待合室……のような所に連れて来られた俺と吉川は、駅員さんによつて出されたお茶を飲みつつまったりしていたわけなんだが。

吉川、泣き止まないんですけど。

いや、誰か助けて！ 俺は無理！ 泣いてる女子を慰めるのとか、ほんと無理だから！

細い肩を震わせて、顔を両手で覆って泣いている吉川は——これがまた、声を必死で押し殺して静かに泣いているから妙に痛々しくて——物凄くかわいそうなんだけど、こういう場合どういう風に声をかけたらいいのか全然わからない。

俺、今まで明奈狙いの変質者に遭遇したことは何度もあるけど、どれも変質者の方が恐怖に慄き苦痛に喘ぎ、血と涎と鼻水垂らしながら泣いてたから。こういう場面、初めて！ 駄目だ、居た堪れない！

あーもう、駅員さん、誰か来いよ！！ 空気読んで！ 俺たち新しいクラスになってまだ二ヶ月くらいしか経ってない上、まともに話したことありません！！

そんなことを思いながら、どうにか泣いている吉川を慰めなくてはと思っていた矢先、

「はい、待たせてごめんねー。君、ええと、女の子の方。警察の方が来てくれたからね、もう大丈夫だよ。お話できるかなあ？」

軽快なノックと共に、人の良さそうな五十代くらいの駅員さんが入ってきた。あー、助かった……。

吉川は顔を俯けたままだったけど、小さな声で駅員さんとか話をして、それから彼に連れられて部屋から出て行った。去り際まで、俺の方は一度も見ずに。

……。まあ、いいけどさ。ショックだったんだろうし。

その後、吉川を呼びに来た駅員さんはすぐに俺の方へ来て、開口一番、

「彼氏君、だめじゃないか。こういふときこそ、ちゃんと彼女を慰めてあげないと」

物凄い誤解発言しやがった。

「違います！ 彼女はただの同級生で、偶々見かけて助けただけです！」

「え、そうなの？ 君、勇気あるねえ」

感心感心と頷かれて、一気に肩の力が抜けた。何なんだ、一体。

「じゃあ、これを機に仲良くなれるといいね」

「仲良くななくていいですよ！ 大体、痴漢に遭ったことなんてあまり言いふらさない方がいいでしょう」

あれだけ泣いていたんだから、吉川は今日の記憶をさっさと忘れてしまいたいだろう。それに、変な風に歪曲されて噂にでもなったらかわいそうだ。

「ん、そうだね。警察には聞かれたことを話したらいいけど、彼女のためを思ふんなら黙っていた方がいいね」

「はあ……」

「じゃ、君もこっち来てね。捕まえたときのこととか、聞かれたことにちゃんと答えてくれたらいいから」

そうして、俺は駅員さんに連れられて警察の方とご対面したわけなんだが。

この翌日、学校にて、俺が吉川なんとか（名前わからん）から謎の宣戦布告を受ける羽目になろうとは——まるで予想だにしていなかった。……ま、当たり前だな。……はあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9617h/>

木崎家の人々

2010年10月8日22時45分発行